
リバーズ・シンデレラ

天そば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバース・シンデレラ

【Nコード】

N9558V

【作者名】

天そば

【あらすじ】

そう考えると、わたしはシンデレラとは真逆なのかもしれない――。

公星高校野球部のマネージャーを務める川口柚香は、片想い中のキヤプテン、嶋良次と共に、数々の謎に遭遇する。野球好き少女のメーアドレスの由来、体育館からグラウンドに向かう途中で忽然と姿を消した同級生、昼と夜で眼鏡が変わる保健医――、そして、川口自身の抱える「誰にも言えない秘密」。

二人の推理が冴え渡る、短編連作形式のラブコメ風ミステリー。

プロローグ 1

1

覚悟はしていた。

けど、いざそうなると自分でも驚くぐらい落ち込んだ。

勝手な思い込みなのはわかってるけど、あの人はわたしの希望の星だった。それを失うっていうのは……なんて言えはいんだろう？ 口下手なわたしでは、うまく説明できない。でも、食べ物を口にしてもすぐに戻してしまい、夜はあんまり眠れなくなった。なにもかもに気力が湧かなくなつて、もう高校なんて行かなくていいかな、とすら思った。

2

そんなわたしに、救いの手は思わぬところから伸ばされた。一番近くにいるはずなのに、一番遠くに感じるあの人から。その人の目は真剣だった。冷静に考えたら冗談かと思うことを、心の底から真面目に提案してきた。

——その案、乗ってやろうじゃないか。

どうせ一度は賭けに失敗した身だ。わたしは、目の前に差し伸べられた手を取った。

これからの三年間が、茨の道になることを知って——。

プロローグ 2

2

入試の手ごたえは充分だった。落ちてるかもしれないなんてこれっぽっちも思っただけでなく、むしろ、点を取りすぎて新入生代表の挨拶なんてものを任されたら面倒だと、わざと何問か間違えたほどだ。

だから、体育館前の掲示板に張り出された合格者一覧の中に自分の番号を発見しても、とくになんか感情も湧かなかった。ああやっぱ、とそれだけ思っただけで、素早く辺りを見回した。自分の合否判定より、彼がどうなったかのほうが気になる。

もし、彼が落ちていたら……。そんなことを思うと、不安でたまらない。なんのために通学に二時間近くかかるこの高校を受けたのかわからなくなってしまった。

わたしは早足に掲示板から離れた。押し寄せる人波の中では、数メートル先の人すらよく見えない。少し離れたところから探したほうが良さそうだった。

人の少ないところに移動して、掲示板の辺りに彼がいないか目を凝らす。入試の日に見た彼の後ろ姿はいまでもはっきり目に焼きついている。視界の隅にでも入れば、すぐにわかる自信はあった。それなのに、一向に見つからない。もしかしたら、混雑する時間を避けて、少し人が減ったときに見に来るつもりなのかもしれない。

ケータイを開くと、妹から、「どうだった？」とメールが来ていたけど、いまは返信できる状況じゃない。風ではためくスカートを押さえながら、彼が来るのをじっと待ち続ける。

けつきよく、彼が現れたのは、掲示板前の人口密度がピーク時より半分ほどになったころだった。同じ中学の人もたくさんいるはずなのに、一人で来るのがあの人らしいな。話したこともないくせに、わたしはそんなことを思った。

彼が掲示板前で立ち止まるのを見て、わたしも足を進める。ぎりぎり怪しまれない距離まで近づいて、番号を探す彼の様子を横目で伺う。上下に忙しく動いていた彼の瞳がぴたりと一点で止まった。次いで、ずっと険しかった表情が柔らくなる。口許には、安心したかのような笑み。

ああ、合格したんだな。うれしそうに笑う彼を見て、わたしも、肩に入っていた力がバスタブの栓を抜いたように消えていった。

掲示板に張り出された自分の番号を写真に映すこともなく、彼は合否だけ確認するとすぐに離れていった。どこに行くのかな、思っている、さっきわたしがいたところの近くに、彼と同じ中学の人たちが集まっていた。さりげなくその前を通ってみると、

「受かったよ」

と、うれしそうに報告する彼の声が耳に入ってきた。

——よかったね、嶋くん。^{しま}

心の中でそう呟いて、わたしは校門へ向かった。その途中、色んな部活が勧誘チラシを配っていたけど、すでに入る部を決めているわたしは、「本命」のチラシだけを受け取った。人波に紛れて校門を抜けながら、貰ったチラシを見る。

『キミも公星野球部に入って、一緒に甲子園を目指そう!』

中心にでかでかと書かれた言葉を見て、わたしは笑いをこらえた。シンプルイズベストって言うけど、これはちよつとシンプルすぎない？

自分が籍を置くことになる部のセンスがちよつと心配になった。

そしてふいに、本当に四月からこの高校に通うんだな、と実感する。わたしは来た道を振り返って、最後にもう一度校舎を視界に収めた。

公立公星^{こうせい}高校。ここら辺の公立校の中では、野球部の実力はトップクラスだ。

嶋くんは高校でも野球を続ける。だからわたしも、マネージャーとして野球部に入る。

ずっとずっと憧れていた彼は、どんな人なんだろう。いままでは夢の中でしか会えなかった嶋くんと、これからは対等に話ができるのだ。

四月から始まる高校生活を思うと、胸が躍った。だけどそれと同時に、不安が頭をよぎる。

——本当に、三年間も騙し続けることができるのだろうか？

わたしが高校生活でなんとしてでも隠し通さないといけない秘密を思うと、高揚した心に少し影が差すのがわかった。

メールの送れない月曜日 1

1

「平野^{ひらの}お、いまの送球だと、足の速いバッターは内野安打だぞ！」

ノックバットを持つ野村^{のむら}先生が、蟬の鳴き声を打ち消すほどの大声でシヨートを守る平野くんを怒鳴りつけた。

公星高校のグラウンドでは、今日も野球部が朝練を行っている。選手たちは七時半から練習を開始し、顧問の野村先生も八時にはグラウンドに出て、数分前からはノックバットを握っている。七月九日月曜日、夏真っ盛りなだけあって、太陽がしっかりと輝く中での朝練だ。

そして、グラウンドに立っているのはなにも彼らだけではない。先輩たちが引退した先週から新たなマネージャー^{かわぐち ゆずか}長に任命されたわたし、川口柚香^{かみぐち ゆずか}も、太陽に焼かれながら健気に練習のサポートをしている。

個人練習がメインの朝練では、マネージャーは強制参加ではない。だけど、締めに行われるノックでは先生にボールを手渡すマネージャー^{かみぐち ゆずか}がいたほうがいいから、できる日は毎日朝練に参加している。こんなわたしってマネージャーの鏡だと思う。

「それじゃあラスト、嶋^しいくぞ。捕れたら終わりだ」

「はいっ！ お願いします！」

キャッチャーの嶋良次^{りょうじ}くんが返事をして、ミットを叩く。男の子

にしては少し高めだけど、気合の入った声は凛々しく、わたしは思わず聞き惚れてしまった。

嶋くんがホームベースの後ろに屈むのを見て、野村先生はフライを打ち上げた。

「キャッチ、後ろ後ろ！」

野手たちがボールの上があった方向を教える。嶋くんはマスクを外しながら後ろを振り返り、右後方に上がった打球を追いかける。だけど、ボールを見つけるのが少し遅れたせいか、タイミングはかなりぎりぎりだ。

——だめだ、捕れない。わたしがそう思ったとき、嶋くんが地面を蹴り、足からボールに突っ込んでいった。足につけた防具と地面がぶつかり合い、ががが、と派手な音をたてる。スライディングキヤッチを試みたんだ。

わたしの角度からは捕れたのかどうか見えなかったけど、立ち上がった嶋くんのミットにはしっかりとボールが納まっていた。

「ナイスキャー、キャプテン！」

「さすが嶋先輩っす！」

守備についていた部員たちが歓声をあげて、一斉に嶋くんのもとに駆け寄ってくる。わたしは立ったまま、黙ってそれを見ていた。あまりのことに、口に手を当てたまま動けなかったから。

嶋くん、今日もなんてステキなの！

＊

ノックのあとは、軽いランニングとストレッチ、グラウンド整備と続いた。わたしはマネージャーなので、選手に混じってトンボを持つようなことはせず、グラウンド脇の水道で練習で使用したボトルとキーパーを洗っていた。だけど、スポンジを泡立てながらも、視線はつい、嶋くんを追ってしまう。

高校球児らしい坊主頭と、大きな背丈。キャッチャーにしては少し細いけど、筋肉はしっかりついた腕と脚。それらとは不釣り合いかもしれないけど、どこか優しさを感じさせるつぶらな瞳。そして、常に周りを見ながら指示を出すリーダーシップ。

ああ、もう、見れば見るほど惚れる。わたしが朝練に参加しているのは、野球部のサポーターがしたいから——というのは建前で、単に嶋くんに会いたいからだ。そのためなら、早起きも辛くないどころか楽しみすぎて勝手に目が覚めてしまう。中学のときに一目惚れした彼は、同じ高校、同じ部になって一年以上たっても、わたしの心を掴んで離さない。

そんなことを考えながら洗っていたせいだろう。もうグラウンド整備は終わったようで、選手たちがトンボを片付けて次々とこっちへ向かって来る。洗い物を手伝うため……ではない。部室へ行くには、わたしのいる水道付近を通らないといけないのだ。

「おつかれーっす」

横を通り過ぎる部員が挨拶をしていく。そのたびにわたしはそつのない作り笑顔で、

「お疲れ様」

と返す。それを見た野郎どもはもれなく顔を赤くしたり、にやけたりする。まあ、無理もないことよね。

すらりと高い身長に、それを強調するようなスレンダーな体型。胸まで伸びたつやのある黒髪と、大きな目。それを縁取る長いまつげと形のいい眉。それらの上品なパーツの中でも一際目立つ、左の泣きぼくろ。わたしのようなパーフェクト美少女に微笑みかけられて、よろこばない男などいないのだ。

もう、けっこうな数の部員が通り過ぎた。嶋くんも、もうすぐここを通るはず。

コップのふちをこすりながらそんなことを考えていたら、た、た、た、と足音が迫ってきた。まさか、嶋くん？ 振り向くこともできず、わたしはますます必死にコップのふちをこする。

「おー、川口。今日も大変だなあ」

——ってお前かい！

そう言いたいのをこらえて振り返ると、そこには予想通り、ちんちくりんの童顔男がいた。

「選手みんなほどじゃないわ。藤井ふじいくんも、お疲れ様」

我ながら、そつのない素晴らしいコメントだ。だけどそれを聞いたアホンダラこと藤井かずき一樹は、にんまりと気味の悪い笑みを浮かべた。

「お前さあ、いい加減それやめろって。おれはとっくに気づいてんだぜ？」

「なんのこと？」

不思議そうな顔を作りながら、心の中で舌打ちする。こいつと話を
してイラつかなかったためしがない。これから言うこともだいた
い想像がつく。

「だーかーら、そうやって猫被るのだよ。クラスのやつらにもそう
やってっけど、お前ほんとは、もっと口悪くて好き嫌いはっきりし
てるだろ？」

ほらきた。案の定。適当に流そう。

「そんなことないわよ」

「えー、しらばっくれてんじゃねーよ」

「ところで藤井くん。早くしないと購買のパン売り切れるんじゃない
い？」

わたしが腕時計を見せると、藤井は、あ、と大きな声をだした。

「そうだ、今日はクリームメロンパンがある日なのにつ。じゃあな
川口、また教室で！」

一目散に走り去っていく。こっちは二度と会いたくないわ。

どうか購買のクリームメロンパンが売り切れていますように、と
祈りながら蛇口をひねる。そのとき、

「川口」

声をかけられた。心臓が口から飛び出そうになる。そうだ、藤井
のせいで頭から飛んだけど、彼はまだここを通っていなかったのだ。
必死に呼吸を落ち着けて、振り返る。

「嶋くん。お疲れ様」

「ああ、お疲れ。ありがとうな、いつもいつも」

いいのよ、と返す声が少し震えていて、気づかれていないだろうかと不安になる。こんな不意打ちみたいな形で話しかけられると、心の準備が追いつかない。

「嶋くんたちみたいにな、朝からグラウンドを走り回ってるわけじゃないから。ぜんぜん楽よ」

「そんなの関係ないよ。朝早くの練習に来るだけで大変なんだから。毎日ありがとな」

言いながら、嶋くんは少し笑った。

し、嶋くんが、わたしに向かって笑ってくれた！ 突然の笑顔攻撃に意識が遠のきそうになる。

嶋くんはわたしの足元にあるキーパーを指差して、

「これ、もう洗ったの？」

わたしは硬直した顔をなんとか縦に動かした。

「そっか。じゃあ、持って行くな」

ひょいと片手でキーパーを持ち上げ、そのまま部室のほうに歩いて行く。嶋くんが視界から消えると、やっとうれしさがこみ上げてきて、わたしは小さくガッツポーズをした。

「そしたら嶋くん、わざわざキーパーを部室まで持って行ってくれてね！　すごい感激して」

学生たちの憩いの時間、昼休み。わたしは、騒がしい教室の中で机を向かい合わせて一緒に弁当を食^{おほら}べる大原あかりに、今朝のことを話していた。

「しかもわたしに向かってちょっと笑ってくれて、もう、それだけでくらくなっちゃって！」

「そっかあー」

あかりは玉子焼きを飲み込んで、

「ユズ、今日は朝から幸せだったんだね」

「そう！　幸せだったの！」

サンドイッチを頬張りながら、何度も頷く。あかりは、よかったね、と言うようににっこり微笑んだ。

あかりは嶋くんと同じ中学の出身で、わたし同様、野球部のマネージャーだ。愛嬌のある顔立ちとふんわりした雰囲気^{きふき}を併せ持っていて、いつもにこにこ笑って人の話を聞いてくれる。

早朝授業があるから朝練には来られないけど、真面目にマネージャー業務をこなしている。ただ、あかりは純粹に野球が好きで、わたしと違って変な下心なしに野球部のマネージャーになった。嶋くんがいなかったら野球部になんて見向きもしない、それどころかこの高校にすら入ってなかったであろうわたしからすれば、本当に、尊敬に値する人だ。

それに加えて、高校で初めてできた友だちというのもあって、わ

たしはあかりのことがかなり好きだし、頼りにしている。こうして嶋くんとのことを話せて、なおかつ素を見せられるのはあかり以外にいない。

「今日は部活ないから、朝練でちよつとでも話せるといいなと思ってただけど、まさかこんなことがあるなんて」

「やったじゃん。あとでお礼のメールとかしてみたら？」

「メール？」

予想外の言葉に目を丸くする。あかりは鮭をしっかり飲み込んでから口を開いた。

「うん。今朝はありがとう、助かったよ、みたいなメール。あんまり長文じゃなくても、送らないのと送るのとじゃぜんぜん違うんじゃない？」

「そっか、そうよね」

優しくされたあとのお礼メール。感謝の気持ちも伝えられるし、うまくすれば雑談にもちこめるかもしれない。恋愛において、お礼メールは基本中の基本じゃないか。わたしとしたことが、浮かれすぎて忘れていた。

よし、そうと決まれば――。

「いま送る！」

残ったサンドイッチを一気に飲み込み、スカートからケータイを取り出して、新規メールを作成する。宛先に嶋くんを入力し、いざ、本文入力。

『今朝はわざわざキーパーを運んでくれて、どうもありがとう（ハ

0へ）ひとりでキーパーもコップも運ぶのは大変だったから、すごく助かりました（へーへ）v」

……うん。シンプルで、ちゃんとお礼も言えている。でも、これだけだとちょっと寂しいな。もう一言、なんか付け加えたい。

なにがいいかなと考えて、パツと浮かんだのは、「次も手伝ってくれたらうれしいな」だった。これでもし嶋くんが毎回手伝ってくれるようになったら、会話する時間もできて一石二鳥だ。だけど、月曜日から金曜日まで、週五日ある朝練のうち、わたしが来られるのは月、水、金曜日だけ。……まあ、五回中三回、半分以上と考えれば悪くないか。

『今朝はわざわざキーパーを運んでくれて、どうもありがとう（へ0へ）ひとりでキーパーもコップも運ぶのは大変だったから、すごく助かりました（へーへ）v これからも手伝ってくれるとうれしいな（笑）』

打ち終わったメールを読んで、うんうん頷く。けっこういいじゃん。わたしは見た目だけでなく、メール美人でもあるな。

「どう？　できた？」

空になったお弁当箱を包みながら、あかりが興味津々に訊いてくる。わたしは得意げにケータイを渡す。

「うわ、けっこう大胆だね」

「せっかくだから、これぐらいやろうと思って。わたしが業務連絡以外で嶋くんにメール送らないの知ってるでしょ？」

「ああ、そっか。ユズって意外と奥手だもんね」

「じっくり派と言ってよね。それに、どの道いま告白するつもりは

ないし」

野球部では部活内恋愛は禁止されている。わたしの言葉を聞いたあかりはにやっと笑った。

「じゃあ、部活引退したあとにはするつもりなんだ、告白」

「ううん。高校のうちはしないわ。するなら卒業してから」

「え、なんで？」

「どうせ嶋くん、引退してもずっと自主トレするに決まってるもの。そんなときに告白なんかすると困らせそうだし」

嶋くんは高校を卒業しても野球を続けるつもりらしい。就職か進学かはわからないけど、受けるなら野球推薦でだろうから、自主トレは欠かさないはずだ。

あかりは意外そうな顔でまじまじとわたしを見る。ユズはもつとガツガツしてると思ってた、とその瞳が語っていた。

——まあね、本音を言えば、そんな面倒なこと考えずにアタックしていききたいけど、高校のうちはできない。約束は守ると決めたのだ。今回のメールぐらいなら、まあ大丈夫だろうけど。

わたしは小さく咳払いして、ケータイと向き合った。

「とりあえず、メール送るわ」

もう一回メールを読み直してから送信ボタンに親指を置き、ゆっくりゆっくりと力を込めて、ボタンを……

「……………押せないッ！」

初めて嶋くんに個人的なメールを送る。しかも、これからも手伝

ってくれるとうれしいな、なんてちょっと大胆なことも書いてある。メールを打ったときはそうでもないけど、いざ送信となると、無性に恥ずかしくなってきた。親指に力が入らなくて、ボタンが押せない。

「あかり、こういうときってどうすればいい？」

「そんなこと言われても……」

苦笑い。くそ、それが悩んでいる友人への態度か！

「でも、ユズってこういうこと慣れてると思ってた。中学のとき、彼氏いなかったの？」

「わたしにつりあう人なんていなかったから、告白されてもぜんぶ断ってたのよ」

「そ、そうなんだ……」

「そう。とりあえずいまの問題は、このメールよ」

深呼吸を一つ。再びケータイを睨みつける。

だけどいつまでたっても送信ボタンは押せず、わたしとケータイのにらめっこは均衡状態が続き、指先は徐々に汗をかいてきた。昼休みはあと三十分。一通のメールを送るには充分すぎる時間のはずなのに、いまのわたしにはとても短く感じる。さあ、送信ボタンを押せ。押すんだ。………やっぱり、あと三秒たったら押そう。いち、にの、さんで押そう。よいいくぞ、せーの。

いち、にの……、

「うわあああああああ！」

「ええっ？」

突然、後ろのほうから悲鳴が上がった。びっくりして身体を震わ

せる。なに、誰の悲鳴？

「おれは、おれはなんてことをしてしまったんだああー！」

なんだ藤井か。じゃあいいや。

「ねえ、ユズ」

「ん？」

あかりが目を見開いて、わたしのケータイを指差している。

「いま、送信ボタン押さなかった？」

「うそ！」

慌ててディスプレイを見る。するとそこには、「送信完了しました」と表示されていた。

藤井の悲鳴に驚いた瞬間を思いだす。あのとき、驚いた拍子にボタンを押してたんだ！

「や、やった！ あかり、わたしやったわ！」

「おめでとう！」

あかりとハイタッチを交わし、熱く手を握り合う。よかった。なんだかんだで、かなり不安だったのだ。すぐくほっとした。

ひとしきり喜びをわかちあって一息ついたころ、あかりが言った。

「ユズ、藤井君にもお礼言っようよ」

「そうね」

いちおう、あいつのおかげで送信できたんだし、お礼は言ってお

かなくちゃ。

藤井は自分の席に座って頭を抱え、うつむいていた。こいつが急に変な声を出すのはわりといつものことだけど、こうしてあからさまに落ち込んでいるのはあまりない。ただ、どうせまたくだらないことだろうと決め込んでいるのか、周りの人は誰も話しかけていないけど。

「藤井君」

あかりがまず声をかける。わたしたちを見上げてきた藤井の顔には、悲壮感が漂っていた。う、と息がつまりながらも、わたしはあかりよりも一歩前に出て、藤井に頭を下げる。

「あの、藤井くん、ありがとうね」

「なにが？」

いまだかつて聞いたことのないほど低い声だ。

「藤井くんのおかげで、なかなか送れなかったメールを送信できたの」

だから、ありがとう。そう続けようとしたら、

「うわあああ、メール！」

急にそう叫び、また頭を抱えてうつむいた。

わたしとあかりは目を合わせ、お互いちょっと首を傾げる。こいつはいったいどうしたんだ。今日は普段より輪をかけておかしい。

あかりは藤井の肩をたたき、振り向かせた。

「藤井君、メールがどうかした？」

すると藤井は、幽霊のようになってしまった動きでポケットからケータイを取り出した。それを見たあかりが、あれ、と声をあげる。

「ケータイ変えた？」

「いや。これ、代用機」

そうなんだ。わたしはこいつのケータイを注意して見たことなんてないから、変わってるのにまったく気がつかなかった。言われてみれば、このあいだまで赤いケータイを持っていたような気がするけど、いま目の前にあるケータイは黒だ。

わたしは代用機を指差して尋ねる。

「それで、そのケータイになにかあったの？」

こくりと小さく頷いて、

「ケータイって、機種によってけっこう操作が変わるだろ？ 前のケータイだと顔文字のボタンは右上だったのに、新しいのだと左上になってた、みたいな」

「そうね。覚えはあるわ」

妹のケータイでメールを打つとき、送信ボタンの位置がわたしのものと違ってとまどったことがある。

「おれが使ってたケータイと、この代用機もけっこう違うんだ。おれのケータイだと『メール保護』のボタンだったところが、代用機だと『メール削除』になってんだよ」

喋りながら、だんだん藤井の声が震えていく。

あー、なるほど。なにがあったか、なんとなくわかってきた。

「つまり藤井くんは、保護しようとしたメールを間違えて削除してしまったのね？」

うわああああああああ。

再び藤井は悲鳴をあげ、頭を抱えてしまった。

わたしは基本的にあまりメールをしない人間だけど、藤井のこの落ち込みようと、わざわざ保護しようとしたということを考えれば、どういった人からのメールなのか想像はつく。

わたしとあかりは目を合わせ、お互いこくりと頷いた。

「元気だして、藤井くん。間違えて削除しちゃったなら、相手に素直に言って、送り直してもらえばいいのよ」

「そうだよ。代用機の操作に慣れなくて、って説明すれば、相手もわかってくれるし、あんがい、共感してくれるかもよ？」

「そうよね。代用機のあるあるネタで盛り上がるわよ」

「あー、いいネタだね。代用機あるある」

着うたが一昔前のしか入ってなかったりねー。あははわかるわかるー。

わたしとあかりが普段よりもテンション三割り増しで会話を繰り広げる中、藤井がぼそっと呟いた。

「……くないんだ」

「え、なに？」

「送れないんだ、メール」

どうして、とわたしが訊く前に、藤井は続けた。

「おれが削除したメール、メアド変更メールだったから」

＊

メアド変更メール。

読んで字のごとく、メールアドレスを変更したときに送るメールのこと。○○高校の××です。メアド変更したので、登録お願いします！ みたいなやつだ。

そのメールを削除してしまった。ということは、つまり。

「おれ、もう高橋たかはしさんにメール送れねえよ。どうしよう……」

藤井の声は重く、激しい落ち込みようが伝わってくる。わたしとあかりはどう言葉をかければいいかわからず、黙って突っ立っている。

高橋さんというのが誰かは知らないけど、この落ち込みようからして、藤井の好きな人と考えていいと思う。こいつとそういう話したことがなかったけど、ちゃっかりいたらしい。

なんとか言葉を絞りだし、藤井に話しかける。

「でも、メアド消しちゃったからって、それで終わりじゃないわ。その高橋さんに直接会って、改めて教えてもらうこともできるし」
「無理だよ。高橋さん、香川の人だから」

「香川？」

思わず声が出てしまった。香川なんて、飛行機で行く場所だ。

「藤井くん、その高橋さんとはどこで出会ったの？ 香川なんて、遠征でも行ったことないでしょ」

「向こうが来たんだよ。去年の夏に東京ドームに野球観に行ったとき知り合っただ」

東京ドームで野球か。あかりも相当な野球好きで、わたしも一度巨人対横浜戦に付き合わされたことがあるけど、藤井もそうだったとは知らなかった。

「席が隣で、おれも高橋さんも一人だったし同い年だったから、話してくうちに仲良くなって、メアド交換したんだよ。それでいま、オールスターのチケットが取れたから一緒に行こうってメールしようとしたときに、知らないアドレスのメールが来て、誰だと思ったら、高橋さんからで。まず保護しようとしたら……」

うっかり削除してしまった、と。

行き場のない思いを発散するように、ケータイをがつつ頭にぶつける藤井。わたしはその姿に同情を覚えながら、藤井がこうなるのも無理はないと思った。そんな出会いだったら共通の友人なんていないだろうから、誰かに高橋さんのメアドを訊き直すこともできない。

どうしたものかと考えていると、あかりが藤井のケータイを指差して、

「高橋さんから、一斉送信のメール来たことある？ あけおめメールとか」

「来たけど……」

「それにさ、藤井君以外にメール送った人のアドレスが載ってないかな？」

なるほど、と膝を打ちたくなる。

一斉送信のメールには、同じメールを送った人全員のアドレスが載っている。その中の誰かにメールを送れば、高橋さんの新しいメールアドレスを訊くことができるはずだ。

わたしは自分が早口になっているのを自覚しながら、藤井に話しかける。

「そうよ、藤井くん。いまから誰かにメール送ってみたら？」

「そうだな。やってみる！」

さっきまでのどんよりした動きから一変、藤井は興奮したようにケータイを操作し始めた。表情も少し明るくなっている。

だけど、その明るさはすぐに影を潜めた。

「駄目だ……。メールはあったけど、他のアドレスが載ってない」

「フィルターかけられてたってこと？」

あかりの問いに、藤井が頷く。

ああ、そうだ。いまは、一斉送信しても他の人のアドレスを見られなくする機能があるんだった。高橋さんもそれを使っているんだろう。

「わざわざフィルターなんてかけなくていいのに……」

あかりが眉間にしわを寄せて呟く。必死に他の方法を考えているんだろうけど、思いつかないのだ。

どうしよう、藤井にどんな言葉をかけたらいいだろう。もしわたしが同じ立場で、嶋くんのメアドを消してしまう、なんてことがあったら立ち直れないかもしれない。向こうからまた連絡をくれる根拠なんてないし。

ああでもないこうでもないわたしは頭を働かせていると、

「そうだ！」

ふさぎこんでいた藤井が、急に声をあげた。机に手を突っ込んでノートを取り出し、白紙のページを破ると、シャーペンでなにか書き込んでいく。わたしとあかりがぼかんとする中、藤井は得意げな顔でわたしたちに紙を見せた。

そこには、『I u v — g ^ | ^ . 』と、意味不明の文字があった。

「藤井くん、これはなにかしら？」

「ちらっと見た高橋さんの新しいメアドを、思いだせる範囲で書いたんだ。あと真ん中の辺りに、『r s t | e 』っていうのもあったな」

さっき書いた『I u v — g ^ | ^ . 』の下に、『r s t | e 』とつけくわえる。そのあと、藤井はおもむろに、わたしたちに頭を下げた。

「頼む！ この続きを、一緒に考えてくれ」
「え？」

予想外の言葉に、つい間拔けな声がでてしまった。

高橋さんのメアドの続きを考える？ それって、かなり厳しくない？ 力になりたいではあるけど、わたしは高橋さんのことをよく知ってるわけでもない。あかりも同じことを思ったのだろう、ちょっと眉を寄せて、困ったような顔をしていた。

そんなわたしたちにかまわず、藤井はケータイを見ながら、紙にまたなにか書き込んでいる。

「ヒントもあるんだ。これ、高橋さんのいままでのメアド」

さっき書いたメアドの下に、

メアド？ 『l u v - g ^ | ^ . b o n s a i k y o l | 3 | @』
メアド？ 『l u v - g ^ | ^ . v d n k | g o l d e n 1 6 @』

と書き加えられていた。

「メアド？はおれが最初に教えてもらったメアド。で、高橋さんは今年の一月にメアド？に変更したんだ」

「このメアド、二つとも似てるね」

あかりがそう言うと、藤井は満足そうな表情を浮かべた。

「高橋さん、自分なりの法則を決めてメアドを作ってるって言った。だから、それがどんな法則なのか突き止められれば、新しいメアドがわかるかもしれない」

そういうことか。なら納得だ。でも一つだけ、気になることがある。

「ねえ、藤井くん。なんで古いほうのアドレスも残してあるの？新しいメアドを登録したら、普通消さない？」

「ああ、なんとなく、昔のメアドも記念に残しこうと思って」

「そ、そうなんだ」

いったいなんの記念なんだろう。わたしがそう思ったのが伝わたらしく、弁解するように話をする。

「高橋さんに初めて会った日さ、メアド教えてって言ったら、今夜変える予定だから待ってって言われたんだよ。おれのメアドを高橋さんのケータイに登録しといて、夜に新しいメアドに変えたらメールするって。おれ、正直、体よく断られたと思ってたから、夜ホントにメール来たときめちゃくちゃ嬉しくてさ。それでなんとなく記念にっ」

「思い出のメールアドレスってことだね」

あかりの発言に、へへへ、と照れたように笑う藤井。こいつ、意外と恋愛には素直なのかもしれない。

藤井は真剣な表情に戻り、もう一度わたしたちに訊いてきた。

「それで、川口、大原。手伝ってくれるか？」

最初は無理だと思ったけど、高橋さんのメアドは、どんな法則があるのかパッと見てわかるものもいくつかある。これなら、とりあえず考えてみる価値はあるかもしれない。わたしとあかりは目を合わせ、こくりと頷いた。

「そうね。やってみましょう」

「力を合わせれば、なんとかなるかもしれないもんね」

「よっしゃ！ サンキュー、二人とも。じゃあさっそく、考えようぜ」

藤井がガッツポーズで宣言し、わたしとあかりが頬を緩めかけたとき、

「あれ、みんな集まってどうかしたのか？」

後ろから声が聞こえてきた。

心臓が動くのをやめて、息が止まる。

そういえば、今朝も似たようなことがあった。不意打ちは彼の趣味なんじゃないかと思う。

「なにかいいことでもあった？」

早足でわたしたちに駆け寄ってきたのは、他の誰でもない、嶋くんだった。

メールの送れない月曜日 2

3

「そっか、メアドか……」

事情の説明を受けた嶋くんが、こくこくと何度か頷く。

わたしたちは手近な空席から椅子を拝借し、藤井の席をぐるりと囲んで座っていた。藤井から見て正面にわたし、右手にあかり、左手に嶋くん。藤井の席は端っこなので、壁と机に挟まれる嶋くんがちよっと狭そうだった。

「それで、嶋君はどうしたの？ なにか私たちに連絡？」

あかりが尋ねる。わたしはどぎまぎしながら返答を待った。わたしのからのメールを見てなにか言いにくたのかな、なんて考えが頭をよぎる。

だけど嶋くんはあっさりこう答えた。

「数学の教科書忘れたから、一樹に借りに来たんだ」

肩の力が抜けた。なんだ、わたしに用があるわけじゃなかったんだ。ってことはたぶん、メールはまだ読んでないんだろうな。嶋くん、そんなにケータイ見る人じゃなさそうだし。

脱力するわたしの横で、嶋くんは藤井に話しかけた。

「高橋さんって、去年東京ドームで知り合った人だよな？」

「そう、その高橋さん。写メ見る？」

藤井がケータイを机に置く。そこには、巨人の二四番のユニフォームを来て、オレンジのタオルを持った女の子がカメラに向かって笑っていた。

セミロングの黒髪は毛先がカールしていて、大人っぽさを演出している。それに輪をかけるように唇の左下に濃いほくろが一つ。座っているから身長はよくわからないけど、細身であることは見て取れる。同い年だと言っていたけど、大学生と言われても充分通じそうだ。つまり高橋さん、一言で言えば

「美人だね」

そう、あかりの言うとおり、美人に分類してもいい顔立ちなのだ。わたしほどではないけど。

「確かに」

し、嶋くん？ そんな、しれっと同意しないでよ。ほら、もっと美人が目の前にいるじゃない、ほらほら！

「だろう？」

藤井、なに得意げな顔をしていやがる。べつにお前の彼女でもなんでもないだろうが！

「な、川口もそう思うだろ？」

「ええ。いままで見た中で一番美人だわ」

嘘つけ、という視線を向けてくるあかり。ふふん、いいのよ。嶋

くんの前では謙虚で控えめな女の子でいるんだから。

高橋さんが美人と認められて相当嬉しかったのか、藤井は機嫌良さそうに笑いながら嶋くんに頼む。

「良次。よかったら、考えるの手伝ってくれないか？」

「もちろん」

即答。昼休みはグラウンドでバットを振るのが日課のはずなのに。友だち想いの嶋くん、なんてステキなんだろう。身も心も本当にイケメンだ。

「じゃあちよつと、共通点を整理してみよう」

机の上に転がっていたシャーペンを取ると、嶋くんは三つのアドレスの『I u v - g ^ | ^ . 』をマルで囲んだ。

「高橋さんのメアドは、どれも最初はこれで始まっている」

わたしとあかり、藤井が頷く。ただ、後ろの絵文字はいいとして、『I u v - g 』はいったいどういう意味なんだろう。わたしがそう言っていると、藤井はすぐに答えた。

「ラブ・ジャイアンツだよ。高橋さん、大の巨人ファンなんだ」

「巨人かあ……」

横浜ファンのあかりが残念そうに肩を落とす。

「相当好きらしいぜ。なんでも、私服のシャツより巨人のレプリカユニフォームの方が多いって」

うええ、なにそれ。そんなにユニフォーム買ってどうするの、とわたしは思ったけど、藤井は、そういうところが可愛いんだよなあ、とにやけている。人の好みも色々だ。

「この絵文字にも、なにかこだわりがあるのかしら？ 藤井くんとメールするときとか、よく使う？」

「どうだろ？ おれとメールするとき、基本デコメなんだよな。：あ、でもその絵文字、高橋さんのトレードマークだって言ってたぜ」

トレードマークねえ。この絵文字、なんの変哲もない普通の顔だけど。気に入ってるってことでもいいのかな。

「二つ目の共通点だけど」

一つ目についてはこれ以上なにもないと判断したのか、嶋くんが次の話に移る。

「昔のメアドは、どっちも最後は数字で終わってるな」

メアド？の『1|3』と、メアド？の『16』を三角で囲む。

「ってことは、たぶん、新しいメアドも最後は数字で終わるってことだよな？ でもこの数字、いったいどうやって選んでるのかな」

あかりが首をひねる。確かに両者には、数字という以外になんの共通点も見出せない。メアド？の『1|3』は数字の一と三だと思っただけど、メアド？の『16』とは桁も違うし。

「これはあれだよ。巨人の背番号」

「背番号？」

ああでもないこうでもないと思わす藤井に聞き返してしまった。

「ああ。巨人の永久欠番の背番号」

あ、とあかりが声をあげる。

「王貞治おうさだはると長嶋茂雄ながしま しげおに、川上哲治かわかみてつはるだね！」
「なるほど。巨人ファンらしいな」

嶋くんまでわかったような顔をしている。あれ？ 話についていけないのわたしだけ？

「ちょ、ちょっと待って。つまり、この番号、一と三と十六は、ぜんぶ永久欠番ってことでもいいの？」

「そうだよ。『1』が王貞治、『3』が長嶋茂雄で、『16』が川上哲治。先週一緒に東京ドーム行ったとき説明したじゃん」
「え？ いや、あの。……ごめん、忘れてた」

忘れないでよー、とあかりが頬を膨らませる。正確には忘れてたんじゃなくて聞いてすらいないんだけど、それはまあいいや。

むくれるあかりから目をそらし、藤井に尋ねる。

「じゃあ、新しいメアドも最後は永久欠番の数字が入るはずって考えていいのよね？」

「たぶんな。他に残った永久欠番は、四番の黒沢俊夫くろさわ としお、十四番の沢村栄治むら えいじ、三十四番の金田正一かねだしょういちだから、そのうちの誰かだな」

なにも見ずに残りの永久欠番の選手が出てくる。一人で東京ドームに行くだけあって、こいつも相当な巨人ファンなんだろう。

嶋くんが、余白部分に『4黒沢、14沢村、34金田』とメモし、小さく息を吐く。

「問題は、どの番号が入るかだよな」

「そうよね。一つだけじゃなくて二つ入る可能性もあるみたいだし」

最初のメアドの数字は『1|3』で、王貞治と長嶋茂雄の二人組み。次のメアドでは川上哲治の『16』だけ。どの番号が入るかも大事だけど、何個入るかも考えないといけない。

「私、王貞治と長嶋茂雄と一緒にしたのはなんかわかるなあ」

メアドの紙を見ながら、あかりがポツリと言った。すかさず、藤井が同意してくる。

「ああ、おれもわかる！ この二人はニコイチだもんな」

ニコイチ？ と、またわたしが話についていけないのを察したあかりが説明を始める。

「王貞治と長嶋茂雄はね、現役時代、二人で三、四番を打つことが多かったんだよ。巨人が九年連続日本一になった原動力はこの二人で、頭文字をとって、『ON砲』とか『ON弾』とか呼ばれたりもしてた」

「へえ、そうなんだ。ぜんぜん知らなかったわ」

とりあえず凄い人だっているのは聞いてたけど、そんなニコイチみたいな感じだったんだ。まあきつと、野球マニアの中じゃ有名な

んだろうな。

「俺も、王貞治と長嶋茂雄が二人で活躍したから、高橋さんのメアドでもセットになってるんだと思う。で、大原。残った永久欠番組でそういう人たちはいる？」

「うーん、どうだろう？ 私、横浜ファンだから。それぞれの選手の基本的なことは知ってるけど、あんまり深くは知らないんだよね……。藤井君は？」

「おれも、名前は知ってんだけど詳しい活躍とかは微妙なんだよね」
「ばつが悪そうに頭をかく。それを聞いて、あかりはケータイを取り出した。」

「じゃあ、ちょっと調べてみるね」

真剣な顔で指を動かす。たぶん、ウィキペディアかなにかで調べているんだろう。

しばらくケータイをいじったあと、あかりは、あ、と声をあげた。

「ね、ユズ。今日って七月九日だよな？」

「そうだけど。それがどうかしたの？」

あかりが顔をあげる。瞳がきらきら輝いていた。

「うん。あのね、沢村栄治と黒沢俊夫の背番号が永久欠番になったのは、二人同時だったんだって。しかもそれが球界初の永久欠番で、認定された日は、一九四七年の七月九日！」

一九四七年の七月九日？ それってつまり、

「今日ってこと？」

「そう。これって偶然なのかな？」

あかりが早口になって意見を求めてくる。わたしたちの答えは揃ってノーだった。

「いや。偶然にしては、なんかできすぎてる気がするぜ」

「わたしも」

「俺もそう思う。なあ、一樹。もしかして高橋さんって……」

嶋くんは藤井を見て、言った。

「永久欠番の選手と関係がある日に、その選手の背番号が入ったメアドに変えてるんじゃないか？」

場の空気が少し高揚したのが肌で感じられた。説得力のある仮説に、それだ！　と言うように藤井は何度も頷く。

「そうだよ！　おれが東京ドームで始めて高橋さんに会ったとき、今夜メアドを変える予定だって言ってた。あれ、王貞治と長嶋茂雄に関係のある日だから、その日にメアドを変えるって決めてたんだ！」

「藤井君、その日って、何月何日だった？」

あかりが訊くと、藤井は机の上に置いてあるケータイに手を伸ばし、素早く日付を調べた。

「六月二五日だ」

あかりはケータイに向き直り、一分足らずで顔を上げた。いつも

より早口で興奮気味に、わたしたちに話す。

「六月二五日は、王貞治と長嶋茂雄が初めてアベックホームラン——いわゆる『ON弾』を打った日だって！」

「それじゃあ、一月十八日は川上哲治に関係あるか？　この日にメアド？に変えてあるんだけど」

あかりはまたケータイに視線を落とすと、しばらくしてから、満面の笑みで顔をあげた。

「その日は、川上哲治の背番号が永久欠番に認定された日だって。

嶋くんの考えたとおりだよ。高橋さんは、メアドに入る選手と関係のある日に、メアドを変えてるんだ！」

「つーことは、新しいメアドに入るのは、黒沢俊夫と沢村栄治の背番号——『4 | 14』ってことか？」

「うん！　それで間違いないと思う」

あかりが力強く親指を立てる。わたしたちは顔を見合わせて笑った。

まずは、第一関門突破だ。

4

後ろに入る数字は『4 | 14』。それは確定した。だけど、本当に難しいのはこれからだ。

わたしたちは、メアド？とメアド？の顔文字と数字に挟まれたと

ころに注目していた。メアド？は『bonsaikyo』、メアド？は『vdk|golden』。さあ、これはどういう意味だろう？ 比較的楽に共通点や意味を見出せる前半と後半に比べて、こっちは正直なんの見当もつかない。

「メアド？は普通に読むと『bonsaikyo』になるけど、いったいどういう意味なのかしら？ 高橋さんに盆栽の趣味があるとか？」
「いや、そんな話は聞いたことねえし、仮にそうだとしても、そのあとの『キョウ』の意味がわかんねえよ」

「メアド？は、後ろの『golden』はいいとして、『vdk』がわかんないね」

「なにかの略なんだろうけど、ぱっと思いつくものがないんだよな。あまり聞いたことのない並びだし」

はあー、と四人でため息をついてしまう。厳しい道のりだ。

藤井は不満そうに下唇を突き出し、メアドの書かれた紙を見る。

「一瞬だけ見た高橋さんの新しいメアドは、この真ん中部分に『rst|e』って入ってたんだけどなあ」

「真ん中部分の中でも、絵文字寄りか数字寄り、どっちだったか思いだせるか？」

考えるように腕を組み、目を閉じる。

「どっちだったっけなあ……。ただ、絵文字のすぐ後ろでも、数字のすぐ前でもなかったぜ。これは絶対だ」

絵文字の直後でも、数字の直前でもないところに『rst|e』。区切りをするように小さい線が入ってるから、『rst』と『e』はべつの言葉なんだろうけど……。

四人とも、しばらく無言で頭を悩ませる。誰もなにも思い浮かばず、沈黙が何十秒が続いたあと、嶋くんがぼしんと手を打った。

「とにかくいまは、昔のメアドからひとつひとつ考えていこう。メアド？の『bonsaikyo』は、川口の言うとおり、そのまま読むと『ボンサイキョウ』になるけど……」

言いながら、余白部分に『ボンサイキョウ』と書く。

「これ、どこで区切ればいいのかな？ ユズが言ってたみたいに『ボンサイ・キョウ』なのか、『ボン・サイキョウ』なのか、いまいち微妙だよな」

「でもなあ。『ボンサイ・キョウ』でも、『ボン・サイキョウ』でも、意味がわかんねえよ。『ボンサイ』つつつても、鉢に木い植える「盆栽」なのか、平凡な才能って書いて「凡才」なのか」

『ボン・サイキョウ』でも、「ボン」がなんのことかわかんねえし、と続ける。

わたしも自分なりに考えてみたけど、藤井の言うとおり、どこで区切ってもいまいちしっくりこないのだ。『ボンサ・イキョウ』とか『ボンサイキ・ヨウ』でも区切れるかもしれないと思ったけど、逆に混乱してしまった。

「こういう風にどこで区切るかわからないときって、普通、わかりやすいように途中でピリオドとかを入れないかしら？」

「あ、そうだね。私はそうするかも。嶋くんたちは？」

あかりの問いに、嶋くんは少し笑って答えた。

「俺は、あんまりそういうのわからないんだ。メアドにもこだわり

とかないし」

ああ、そういえば嶋くんのメアド、どう見ても初期設定のままだもんね。とりあえずローマ字と数字がずらっと並べられてるだけの。

「おれはあんま気にしねーかな」

藤井が軽い口調で答えた。

「メアドって、自分の自己満で決めるみたいなどこあるから。友達とかに意味通じなくても、自分さえわかればいいーや、みたいな」

そっか。そういう考えもあるのか。確かに藤井は、我が道突き進むみたいなどころがある。たぶん高橋さんも同じ考えで、だからわたしたちはこんなに頭を悩ませているのだ。

わかりきったことを再確認するような流れになってしまって、けつきよく話は進まなかった。他になにかあるかと考えていると、嶋くんが顎に手を当てながら言った。

「この真ん中部分も、なにか野球に絡めてあるとは思うんだ。例えば、後ろの永久欠番の選手と関係があるとか」

「それって、メアド？では王貞治と長嶋茂雄ってことか？」

「そう」

『ボンサイキョウ』が、王貞治と長嶋茂雄に関係がある？ ……
あ、もしかして！

「野球界を引退して、二人とも盆栽に目覚めたんじゃない？」
「ないない」

うわ、三人一斉に首振ったよ。あかりと藤井はいいけど、嶋くんにはまだはつきり否定されてちょっとショック。

「嶋君、この言葉がどう関わってくるの？」

あかりに問われ、嶋くんは、それはわからない、と言うように首を振った。そのあとで、メール？を指差す。

「ただ、これはわかる気がしないか？ 川上哲治に、『golden』」

あかりと藤井が、あ！ と驚き、ほんとだ、そういうことか、と口々に感嘆の声をあげる。本日二度目の、わたしだけわからない現象の発生である。まあべつにいいんですけどねー。

「あ、ごめん。ユズは川上哲治知らないよね？」

あかりがいまさら、氣遣うように言葉をかけてきた。

「うん。ぜんぜん知らない」

「でもけっこう有名だよ。聞いたことないかな？ ほら、ナントカの神様って言われてたって」

ナントカの神様？ そういえば最近、テレビで聞いたことあるな。……そうだ、あれは確か！

「トイレの神様だ！」

あかりと藤井、嶋くんまでもが、一斉に噴きだした。藤井なんか、ひーひー言いながら机をバンバン叩いている。

「そんなに笑わないでよ……」

なんか、周りの人からもちろちら視線を感じる。こんな形で注目されるのは屈辱だ。

あかりが必死に笑いを抑えながら謝ってくる。

「ご、ごめん、ユズ。怒らないで。川上哲治の異名は「打撃の神様」だよ。その名の通り一流のバッターだったんだけど、監督としてもすぐ優秀な人で、巨人の九年連続日本一のときは川上哲治が監督だったんだよ。そのV九時代、つまり巨人の黄金時代を築いた人だから『golden』なんだろうって」

「あ、そっか。そういうことなのね」

「そうだよ。べっぴんさんになりたくてトイレをぴかぴかにしてる人じゃねーから」

それは植村花菜だろうが。

「もうその話はいいいじゃない。とりあえず、メアドの真ん中も野球に関係のある言葉が来るってことで良いのかな？」

「他の意味がわからない以上、はっきりとは断定できないけど。とりあえず、そう考えておこう」

嶋くん、まだ言葉の節々が笑ってる。わたしは自分の顔が急激に熱を持っていくのがわかった。他の二人ならまだしも、好きな人にこんなに笑われるなんて。

嶋くんは笑いを振り払うように、おほん、と咳払いをして、

「それから、いま気づいたんだけど、このメアド、どっちも二二文字なんだよ。これもなにかあるかもしれないな」

「二二文字か……」

藤井がわたしに視線を向け、尋ねる。

「な、川口。メアドの規定文字数って、何文字だっけか」

表情は半笑い。……こいつ、また珍回答を期待してるな。

わたしはイラつきを抑えて、平坦な声で答えた。

「ケータイの機種とか、会社によって違うんじゃないかしら。それがどうかしたの？」

「たぶんだけど高橋さん、メアドは規定文字数いっぱいに設定すると思うんだよな。あるものはぜんぶ使わないと気がすまないってたし」

すかさず、私もだよ、とあかりが手をあげる。

「もったいないような気がするんだよね、文字数に余裕があると」

そうなんだ。わたしはぜんぜんそんなことないけど、あんがい、あかりみたいな人は多いのかもしれない。藤井も頷き、

「高橋さんもそうだと思う」

高橋さんのメアドは二二文字。そのうち、九文字は『l u v - g
^ | ^ . 』で、五文字は『r s t | e 』で、四文字は『4 | 1 4 』
で潰れる。つまり、

「新しいメアドを完成させるには、あと、四文字いれればいいということね」

「そういうことになるな」

嶋くんはメアド?の下に、

メアド? 『l u v - g ^ | ^ . ○○○○○○○○○4 | 1 4』

と書いた。

「丸一つで小文字一つだ。で、一樹。『r s t | e』はどの辺りにあった?」

「だいたい、この辺りだったかな」

言いながら、藤井がメアド?になにか書き加える。

メアド? 『l u v - g ^ | ^ . 【○○○○○○○○】○4 | 1 4』

すみつきカッコの中のどこかに、『r s t | e』が入るということだろう。

あかりが笑顔で言う。

「なんか、こうして書くとわかりやすいね。頑張ればできそうな気がするよ」

あかりの言うとおりだ。高橋さんの新しいメアドを推理するなんて無謀だと思ったけど、こうしてきちんと整理されれば、不思議とできそうな気がしてくる。わたしはもう一度、並べられたメアドを見直した。

メアド? 『l u v - g ^ | ^ . b o n s a i k y o 1 | 3』
メアド? 『l u v - g ^ | ^ . v d n k | g o l d e n 1 6』

メアド? 『l u v _ g ^ | ^ . ○ ○ **【** ○ ○ ○ ○ ○ **】** ○ ○ 4 | 1 4 』

あとはみんなで知恵を出しあって、この丸を埋めていくだけだ。

メールの送れない月曜日 3

5

昼休みの残り時間は二十分。この時間内に解決しないといけないわけではないけど、クラスの違う嶋くんが協力できるのは昼休みまでだ。できるのなら、少しでもメアドの穴を埋めておきたい。

「真ん中部分に永久欠番の選手と関係のある言葉が入るっつーことなら、今回のメアド?には、黒沢俊夫と沢村栄治と関係のある言葉ってことになるな」

藤井がシャーペンをくるくる回しながら言った。

「で、その中に『r s t | e』が入るんだよね……。これがいったい、どう関係してくるんだろう」

あかりが考えるように視線を宙に向ける。わたしもつられて同じようにしてみるけど、特になにかひらめくわけでもなかった。蛍光灯が眩しいぜ。

頭を悩ませるわたしたちの前で、嶋くんはなんでもないことのように言っただけだ。

「俺、たぶんわかったよ。この『r s t | e』の前後になにが来るのか」

「えー!」

蛍光灯から嶋くんにピントを合わせる。冗談を言っているようには見えない、自信ありげな顔があった。

「黒沢俊夫と沢村栄治の背番号は、球界初の永久欠番なんだろう？」

あかりと藤井が頷く。

「この二人をつなぐ最も大きなキーワードを、高橋さんがメアドに入れる可能性は高い。そう考えたら、『rst|e』の前後にある文字が見えてこないか？」

球界初の永久欠番ということを考えれば、『rst|e』の前になにかあるか見えてくる？

知恵をふりしぼり、考える。考えて考えて、そして、

「……あ、わかった！」

ぱしんと手を合わせ、声をあげた。……あかりが。

「ファーストだよ！ 球界初の永久欠番、ってことはつまり、日本で最初の永久欠番。だから、英語の『f i r s t』が入るんだ！」

興奮して、一氣にまくしたてる。よっぼどうれしかったみたいだ。当たってる？ と言うようにあかりが顔色を伺うと、嶋くんは小さく笑った。

「俺もそう思う」

「本当？ よかったー」

安心したように笑って、胸に手を当てるあかり。藤井は先に解かれたのが悔しいらしく、渋い顔をしている。わたしももしかしたら、同じような表情をしているかもしれない。

あかりにそんな気はないとわかっていても、嶋くんの笑顔を向けられているのを見たらなんとも言えない気持ちになる。できることならわたしが謎を解いて、嶋くんに、すごいな川口、好きだ結婚してくれ！ とか言われたかった。

「でも、嶋君。嶋君は『r s t | e』の前後が見えてくるって言ったけど、後ろにはなにが来るの？」

「ああ、それは……」

嶋くんが答えかけたとき、藤井が待ったをかけた。

「待て良次！ おれ、もう少しでわかりそうなんだ。あと三十秒待て！」

坊主頭を叩きながら必死に考えている。嶋くんは苦笑して、わかったよ、と返した。やっぱり優しい。わたしだったら無視して答え言ってるのに。

あかりにちよいちよいと肩をつつかれた。

「わかる？」

「ぜんぜん」

英単語で『e』から始まるのはなにがあったかな、とさっきから考えてるけど、あいにく、このメアドに当てはまりそうなのは思いつかない。素直に降参して、嶋くんの回答待ちだ。

「わかった！」

藤井が顔をあげ、机を叩いた。ばん、と大きな音が教室に響き、

クラスの大半が驚いて音の出所を見るけど、なんだ藤井かとすぐに自分の作業に戻る。大声を出しても机を叩いてもここまで反応されない人物も珍しい。

「けっこうシンプルだったろ？」

「ああ。日本人でよかったぜ」

男二人で笑いあうと、藤井は急にわたしとあかりのほうを見て、

「どうだ？ 川口と大原はわかったか？」

わからないよなあ、お前らは。藤井の顔にははっきりそう書いてあった。

くっそ、ムカつく。嶋くんにだけわからないなら諦めもつくけど、こいつがわかってわたしはわからないなんて、屈辱以外のなにものでもない。

素直にノーと答えるのも癪なのでわたしは黙っていたけど、あかりはあっさり首を横に振った。

「わかんない。教えて、藤井君」

「ふふん、いいだろう。そもそも、この『e』を難しく考えるのがいけねーんだよ。eから始まる英単語は……なんて持ったの他だ。これは、日本語のある言葉をアルファベットにただけなんだからな。そう、つまり、これが意味するものはっ……」

眉間にしわを寄せて歯を食いしばり、更に顔を小刻みに上下に揺らす。いや、変な演出はいいから早く言えよ。

「ダダーン！ すなわち、永久欠番の『e』だ。「永久欠番」という言葉をアルファベットにして、その頭文字の『e』だったんだよ」

「ああ、そっか！　そういうことなんだ」

感心した様に口を大きく開けて頷くあかり。わたしもすごく納得したけど、相手が藤井だからあんまり大きいリアクションはしない。なんか本当に、負けたみたいだし。

「そして、その後ろに来るのは当然、『k』だな。『永久』の『e』と、『欠番』の『k』。川口、お前はこの『e』を英単語として見てただろ？　だからわからなかったんだよ」

最大級のドヤ顔をわたしに向けてくる。お前だってさっき『first』わからなかったくせに。……なんて言えるはずもなく、無難な答えを返す。

「そうね。わたし、難しく考えすぎてたみたい」

私も、とあかりが笑う。この素直さ、演技じゃないのがうらやましい。

「『first』か。これで、八文字埋まったことになるんだけど……」

嶋くんがそう呟いたのが耳に入り、思わず振り向く。

「八文字も埋まったの？　すごいじゃない！　もう一息ね」

昼休みは残り十五分。この調子でいけば、時間内にメアドを突き止めることができるかもしれない。だけど、テンション右肩上がりのわたしとあかり、藤井と違って、嶋くんは喜びの声を上げず、首をひねった。

「……本当に難しいのはこれからかもしれない」
「え？」

わたしたちの視線を一斉に浴びながら、話を続ける。

「真ん中部分に入るのは、九文字だ。それに対して、『first
| e k』は八文字。メアドを完成させるには、あと一文字足りない」
メアド？の真ん中部分の丸を数える。………嶋くんの言うとお
り、九つあった。

「残り一文字というのは、下手に二文字、三文字足りないより難し
い」

嶋くんは腕を組みながら、変に暗く言っているわけでも、前向き
に言っているわけでもない、平坦な声を出す。

「俺は、『first | e k』は当たってると思うよ。いかにも高
橋さんがメアドに入れそうな言葉だと思う。だけど、それに一文字
加えるとなると、なにが来るのかまったく見当もつかない」

6

昼休みは残り十分を切った。

それでも、依然として最後の一文字がなんなのかわからない。

永久欠番を『e k』ではなく『e k b』にしてみたり、『e k』
と数字のあいだにピリオドを入れてみたりしたけど、どのアドレス
に送ってもすべてエラーメールが返ってきた。

正直、完全に行き詰っていた。

「あ、くそ。またエラーだ」

藤井がケータイに舌打ちする。さつきから適当に一文字付け加えてはメールを送っているけど、ことごとく空振りしていた。もう何回三振したかわからない。

「『first』ek』は間違えてるのかなあ？」

あかりがぼつりと漏らす。そんなはずない、とさっきまでは思っていたけど、だんだん自信がなくなってきた。なにか、他にもっとふさわしい言葉があるんじゃないかという気すらしてくる。

わたしは右隣に座る彼に尋ねた。

「ねえ、嶋くんはどう思う？」

顎に手を当てたまま一人静かに考えを巡らせていた嶋くんは、わたしのほうを見て、

「俺は、『first』ek』が間違っているとは思わないよ。ただ、最後の一字を突き止めるには、メアド？と？を完全に解読することが重要だと思う」

そう言われて、思いだす。そういえばわたしたちは、メアドの意味を完全に突き止めたわけではなかったのだ。メアド？は『bonsaikyo』が、メアド？は『vdk』の意味が、それぞれわかっていない。だけど……。

「でも嶋くん、そこまで解読する必要はあるの？ とりあえず野球

に關係する言葉、じゃ駄目？」

「駄目だと思う」

清々しいほどきっぱりと言ひ切る。

「さっきからこのあたりを見ていると、なにかひっかかるんだ。おかしい部分があるような気がするんだよ」

嶋くんは、普段から優しい、穏やかな口調で話す人だけど、いまは珍しく語尾が強くなっていた。その「ひっかかるところ」がわかりそうでわからないのがもどかしいみたいだ。

わたしも嶋くんにならない、メアドに目を向ける。

メアド？ 『l u v - g ^ | ^ . b o n s a i k y o 1 | 3 | @』

メアド？ 『l u v - g ^ | ^ . v d n k | g o l d e n 1 6 @』

嶋くんの言うひっかかるところは、『b o n s a i k y o』や『v d n k』だろう。わたしも注意して見てみるけど、ただただ意味がわからない。

「いったいこれ、どういう意味なんだろうね」

あかりも隣で首を傾げる。やみくもにメールを送る作戦は諦めたらしい藤井も、過去のメアドを真剣な表情で分析している。わたしも、諦めないで考えてみよう。

メアド？の『v d n k』はなにかの略称だろうけど、Vから始まるのを見るに、さっきの「永久欠番」みたいな日本語ではないだろう。やっぱり、野球に關係があつてVといえば、「ヴィクトリー」かな。でも、その後ろのDは？ 野球に關係ありそうなD。えーっ

と……。あー。

考え始めて三十秒で、もう壁にぶち当たった。見ると、あかりは指でこめかみをごりごりし、藤井は頭をかき、嶋くんは下を向いている。

みんな、明らかに行き詰ってるよ。わたしと一緒だ。

「……なあ、大原」

頭をかく手を止め、藤井があかりに尋ねる。

「本当に、王貞治と長嶋茂雄に盆栽の趣味はねーのか？」

「私は聞いたことないけど……。でも、そうだね。そう考えでもしないと意味わかんないもんね、これ。だんだん、私が知らないだけでほんとは二人とも盆栽好きだったんじゃないかって気がしてきたよ」

「だよなあー。ちょっとおれ、情報収集するわ」

藤井が再びケータイを手取る。ウェブに繋いで、巨人の永久欠番選手について調べるつもりらしい。じゃあ私も、とあかりもケータイをいじりだした。

「わたしもやるわ」

なんとなく流れで、わたしもケータイを開く。すると、俺もやろうかな、と嶋くんまでケータイを取りだした。

………ん？ あれ、なんか忘れてるような。

「あ、メールが来てる」

ケータイの画面を見た嶋くんが呟いた。
わたしとあかりが、弾かれたように目を合わせる。

そ、そうだった！ 完全に頭から飛んでたけど、わたし、嶋くん
にメールを送ったんだった。今朝キーパーを運んでくれたことへの
お礼を、最後にちよっと大胆な言葉を添えて！

「川口から？」

差出人の名前を見た嶋くんが、顔をあげてわたしを見てきた。
わたしは必死に平静を装う。

「あ、うん……。ぜんぜん、大したメールじゃないんだけど」
「そっか」

すぐにまたケータイに視線を戻す。黒目が左右に動き、文字を追
っているのがわかる。わたしはもう、高橋さんのメアドの解読どこ
ろではなかった。どくどくと猛スピードで心臓が動き、その速
さたるや、連続した一つの音になりそうなほどだ。文字を追う嶋
くんの瞳が、急に止まった。そのまま視線は動かなくなり、それな
のに、顔はだんだん険しくなっていく。

どうしたんだろう、というより、どこを見てるんだろう。まさか、
あの、最後の一文？ それをあんなに凝視して、眉間にしわを寄せ
ているの？

「川口っ」

「は、はい」

嶋くんがケータイからわたしに顔を向ける。意外なことに、目を

大きく見開いて、興奮冷めやらぬというような表情をしていた。そういうえば、いまわたしを呼んだ声も、高揚しているのを必死に抑えているかのような声色だった。

「これ、なに……？」

ケータイの画面を指差す。

嶋くんの人差し指の先には、なんてことない、ただの絵文字があった。

「これ？ 絵文字だけ……」

「そうじゃなくて。この、絵文字の後ろにあるやつ。これはなに？」

嶋くんがさつきより強く、メールの二行目の絵文字、『（＾ー＾）V』を指す。

なんでそんなにテンションが上がってるんだろう、と思いながら、わたしは左手の人差し指と中指を立てた。

「これも絵文字の一部。ピースよ」

左手を顔の横に持っていき、メールの中の絵文字と同じポーズをする。

それを見た嶋くんが、急におかしくなった。

あ、と声をもらし、高橋さんのメアドを見て、次にわたしを見て、もう一度メアドを見た。そのあとに、小さく、だけどはっきりと、こう言った。

「わかった……」

「え？」

なにが？ 野球部での集合写真はよく撮るから、わたしがピースしても可愛いことなんて、とっくの昔にわかってるはずなのに。もしかして、集合写真に写っているわたしをろくに見てすらいなかったのかな？ そんな、ショックだ。

「一樹」

そんなわたしの内心を知るはずもなく、嶋くんは真剣な表情で、こう続けた。

「わかったぞ。高橋さんの新しいメアドが」

メールの送れない月曜日 4

7

藤井とあかりは、まじかよ、とか、本当に？ とか言っ
て、喜びと驚きが入り混じっていた。

対してわたしは、驚き五割、残念五割。嶋くん、わたしの
ピースサインに見惚れたわけじゃなかったんだ……。

「で、良次。いったい、残り一文字はなにが入るんだ？」

藤井が身を乗り出しながら訊く。詰め寄られた嶋くんは藤井を押し返しながら、

「ダブリューだよ。小文字の『w』が、絵文字のすぐ後ろに入るんだ」

「ダブリュー？」

意味がわからないというように、オウム返しをする藤井。気持ち
はわかる。わたしだってぜんぜんわからないから。

「さっきの川口のメールを見て気づいたんだ。小文字の『v』を後ろにつけることで、ピースをしている絵文字を作れる。高橋さんのメアドにあった絵文字も、それと同じだったんだよ」

過去のメアドを見る。

メアド？は絵文字の後ろに『b』が、メアド？は『v』がある。
ということは、つまり、これって。

「この『b』と『v』は、絵文字の一部ってこと？」

嶋くんは大きく頷いた。

「メアド？は親指を立てている絵文字で、メアド？はピースをしている絵文字だ」

わたしは、頭の中に雷が落ちたような錯覚を覚えた。

なんてことだ。わたしたちはずっと、この二つを文章の頭だと認識していた。一番の難関、真ん中部分の最初の一文目だと思っていたのだ。真ん中部分の文章の意味がわからないはずだ。文字ではないものを勝手に文字だと勘違いしていたんだから。

でも、間違いに気づいたいまなら、きっと意味がわかるはずだ。わたしは、『b』と『v』をそれぞれ抜かして文章を読んでみた。

メアド？『onsaikyo』

メアド？『dnk.golden』

…………あれ、おかしいな。ぜんぜんわかんない。

「ああ、そっか、そういうことなんだ！」

「おれもやっとわかったぜ。高橋さんらしいなあ、ったくよ！」

残りの二人はわかった様子。嶋くんもうれしそうにニコニコ笑っている。

そんな、最後の最後で、またわたしだけ遅れている。

「あの、あかりさん」

「ん、なに？」

「どういう意味なの、これ？ 『オンサイキョウ』とか『ディーエヌケー』とか、ぜんぜん意味わかんないんだけど」

あかりは顔をくしゃつとさせて、弾むような声をだした。

「違うよ、ユズ。『オンサイキョウ』じゃなくて、『オーエヌサイキョウ』って読むの」

「オーエヌ？」

ついさっき、なにかで聞いたような気がする。あれは確か……。

「王貞治と、長嶋茂雄……？」

「そう。そういうこと！」

びしつとあかりが親指を立てる。

そうか、『オーエヌ』は王貞治と長嶋茂雄のこと。つまり、その二人は最強だと言いたかったんだ。後ろにある永久欠番ともしつかり関係している。

「じゃあ、メアド？の『dnk』は？ これは、どういう意味なの？」

「おいおい川口い。もう忘れたのかあ？」

お前には聞いてねえよ。なんて口にするはずもなく、

「なにを？」

「さっき大原が言ってただろ？ お前はトイレに夢中だったみてえだけど、川上哲治はナントカの神様って言われてたって」

わたしがトイレ大好きみたいな言い方はやめろ。周りの席の人たちが一瞬こっち見たじゃない。

……でも、癪だけどいまのヒントでわかった。

「打撃の神様ね。そっか、だから『d n k』なんだ」

打撃の神様をアルファベットで略して『d n k』。さっきの、永久欠番を略して『e k』と同じだ。

これで、ずっとわからなかった真ん中部分の謎は解けた。わたしたちの予想したとおり、永久欠番の選手と関係のある言葉が入っていたのだ。

「でも、なあ、良次」

わたしが理解したのを見て、満足したように腕を組んで目を細めていた藤井が急に真顔に戻り、嶋くんに尋ねる。

「なんで今回のメアドは『w』なんだ？」

それはわたしも気になった。膝の上に手を置いて、嶋くんの説明を聞く。

「一つ目のメアドでは、親指を立ててる絵文字。で、二つ目のメアドはピース。メアドを変えるごとに、立てる指の数が一本ずつ増えていってるんだよ」

「あ、なんだよ、そういうことか。めっちゃくちゃ単純だな」

それが逆に気づきにくくしたのかもな、と嶋くんがフォローする。今回のメアドは指を三本立ててるはずだから、『w』。たしかに、充分納得できる推理だ。きっと、高橋さんのメアドはこれで決まり

だろう。

「やったね、あかり」

疲れはしたけど、妙な充実感がある。きっとあかりも同じ気持ちだろうと思ったけど、隣に座るわたしの友人は、納得がいかない、というような顔だった。

「どうしたの、そんな顔して？」

「うん。だってさ、なんか変じゃない？」

あかりの言葉に、嶋くんと藤井も会話を中断した。

「なにが変なんだよ、大原。おれはばっちり納得だぜ」

「この、絵文字の中に入ったピリオドだよ」

絵文字を指差す。メアド？で使われている絵文字は『^|^・b』だ。さっきまでは、『b』も絵文字の一部だとは思わず、その前のピリオドで終わりだと思っていた。まったく、ややこしいピリオドだ、と思ったところで、あかりの言いたいことがわかった。

「確かに変だわ。どうして終わりでもないのに、ピリオドが打ってあるの？」

「ほんとだ。おれ、興奮してて変だと思わなかった……」

呆然とするわたしと藤井。しかし、嶋くんはその質問を予想していたようで、ためらわずこう言いきった。

「そのピリオドも、絵文字の一部だからだよ」

きよとんとするわたしたち三人に、補足説明をする。

「ほら、一樹。高橋さんはその絵文字を、自分のトレードマークだ
って言ったんだよね？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ、さっき俺たちに見せてくれた写真とその絵文字を見比べ
ると、わかると思うよ」

大人になぞなどをだす子どものように、にやっと笑った。

そんな笑いかたもするんだ、嶋くんかわいい、と感激しているわ
たしの横で、藤井がケータイを机の上に置いた。画面には高橋さん
の写真が表示されている。

高橋さんはやっぱり、わたしほどではないにせよ美人だった。こ
うしてまじまじと見てもその印象は変わらない。

次に、もう一度絵文字を見る。『[^] | [^] . b』。うん、絵文字だ。

そしてもう一度高橋さん。カールした髪はやっぱり大人っぽく、
わたしも今度やってみようかなと思う。それからやっぱり、わた
しの泣きぼくろには及ばないけど、高橋さんのほくろもなかなか印
象的だ。うん、唇の左隣のほくろは……って！

「わかった？」

嶋くんがさっきと同じ笑顔で尋ねてくる。わたしはこくこく頷い
た。

「そういうことだったのね」

「うん。さっき、メールの絵文字のことを訊いたとき、俺にピース

してくれただろ？　それでわかったんだよ。位置は違うけど、川口にもほくろがあるから」

苦笑する。あのときの驚いた顔は、そういう意味だったらしい。藤井とあかりも絵文字の意味がわかったらしく、やられたー、とか言って掌で顔を覆ったり、苦笑いと普通の笑顔の中間みたいな表情をしている。

わたしたちからすればやられたと思うけど、高橋さんからすれば、ごく自然なことだったに違いない。彼女には、唇の左隣のほくろが印象的だという自覚があったんだろうから。

あのピリオドは、ほくろだったのだ。自分の顔のパーツの中で欠かすことのできないほくろが入っているからこそ、高橋さんはあの絵文字を「トレードマーク」だと言ったのだ。まったく、こんなところに落とし穴があったなんて。

腕時計を見る。昼休み終了まで、あと五分。

「藤井くん。メール送ってみたら？」

「おお、そうだな。サンキュー川口」

藤井がメールの宛先欄に、アドレスを打ち込んでいく。

『l u v — g ^ | ^ . w f i r s t | e k 4 | 1 4 』

これでたぶん、間違いはないはずだ。そう思うのに、なんだか変に緊張してくる。それは藤井も同じのようで、本文に『メアド変更了解しました。ところで、オールスターのチケット取れたんだけど、一緒に行かない？』とだけ書くのに、何度か打ち間違いをした。

「それじゃあ……、送るぞ」

目を閉じて、送信ボタンに指をかける。わたしたち三人の視線が、ボタンを押す後押しになる。ほとんど躊躇う間はなく、藤井はメールを送信した。画面に「メール送信中」の文字が躍り、すぐに「送信完了しました」に変わる。

「送信、したね」

「あとはエラーメールが来ないのを祈るだけね」

「これでエラーだったら、マジでもうなんも思いつかねえよ」

「大丈夫だ……たぶん」

喋りながら、誰もケータイから目をそらさない。エラーメールは、メールを送信してから十秒足らずで来る。もう大丈夫という時間まで、気になってケータイから目をそらせないのだ。

沈黙の中で、一秒二秒と時間が過ぎる。周囲の席でお喋りをする人たちの声が入ってくるけど、それも右から左に抜けていく。時計の針が一つ進んだときに、ようやく、嶋くんが口を開いた。

「エラーメール、返って来ないな」

あかりが頷く。

「来ないね」

それでやっと、わたしたちは顔をあげ、目を合わせあった。みんなの頬が一斉に緩む。

「成功ってことで、いいのよね？」

「うん。エラーならとっくに返ってきているはずだ」

「藤井くん」

よかったね。そう続けようとしたとき。

藤井のケータイが光った。

画面を見る。新着メール一件受信しました。

喜びは一気に干上がり、代わりに不安が湧いてくる。まさか、エラーメール？ それにしては来るのが遅すぎるけど、でも、なにかの不都合で遅れることだってあるかもしれない。

藤井はケータイを取り、腿の上に置く。わたしたちの位置からは死角になって画面が見えない。ケータイを見る藤井の顔が、ぐしゃっと潰れた。

「大丈夫？」

あかりが声をかけると、藤井は無言でケータイを机の上に戻した。

『え、ホントにつ？ 絶対いく！』

本文は短いけど、周りはデコレーション絵文字で可愛く装飾されていた。一目見て、女の子のメールだとわかる。

「一樹、これって……」

こくりと頷いて、下を向いたまま、

「高橋さんからの返事」

不安と緊張が一瞬で消し飛んだ。藤井になんと言おうと一瞬考え

たけど、出てきたのはけっきょく、一番シンプルな言葉だった。

「藤井くん、おめでとう！」

あかりと嶋くんもそれに続き、おめでとう、と笑う。

藤井はずっとうつむいて、顔をあげない。わたしたちは三人で顔を合わせ、にっこりと笑って、この充実感をわかちあった。時間にすれば、ほんの二十五分弱。だけど、ものすごく濃い二十五分だった。

「みんな、マジでありがとな」

藤井が顔をあげる。嶋くんがわたしたちを代表して、涙ぐむ藤井の肩をたたく。

「いいよ、これぐらい。よかったな」

わたしとあかりも、笑顔で大きく頷く。

へへ、と藤井は顔をぐしゃぐしゃにして笑った。目元をぐしぐしとぬぐい、

「まったくお前らって奴は！」

机の中に手を入れて、袋にも入っていない、裸のままのメロンパンを取りだした。

「お礼に、おれのクリームメロンパンやるよ。誰から食べる？」

笑顔で半分ほど食べられたメロンパンをつきつける藤井に、わたしたちも満面の笑みで答える。

「いやそれはいらない」

「遠慮しておくわ」

「藤井君、食べていいよ」

「えー、なんだよー。川口、お前こういうとき気い遣って自分のお願いい言えないタイプだろ？　な、おれは笑わねえから、素直に食っていいんだぞ」

なぜわたしに矛先を向ける。

「本当に、いまお腹いっぱいだから。藤井くん、好きなんですよ？　わたしはいいから、ぜんぶ食べて」

「お前ら、いったいどれだけ優しいんだよ」

おれは幸せだぜ、とか言いながら、メロンパンにかぶりつく。
なんでこいつは裸のまま机に入れてたメロンパンを平気で食べられるんだ。

「じゃあ、俺はもう帰るよ」

嶋くんが苦笑しながら席を立つ。そうだ、もうすぐ昼休みが終わる。これから五限目の授業があるんだった。

使っていた椅子をもとの場所に戻す嶋くんを見ると、なんだか名残惜しくなってきた。今日は部活がないから、嶋くんとはしばらくくまともに話せない。

せめて、わたしのメールについて、ちょっとぐらい触れてほしかったな。わざわざメールでお礼までしなくてよかったのに、とか、その程度でもいいから。

藤井から数学の教科書を借りる嶋くんを見ながら、そんなことを

思っていた。あかりからも、なんとなくわたしを気遣うような雰囲気を感じる。

「川口、大原。またな」

「あ、うん。またね」

だけどけつきよく、なにも言えないまま手を振る。

でも、しょうがないよね。自分から、わたしのメール見てどうだった？ とか言うのも変だし。嶋くんの背中を見送りながら、負け犬の遠吠えのような言い訳を頭の中で繰り返す。

なんか虚しいな、わたしも席に戻ろうと立ち上がったとき、嶋くんが足を止めて、振り返った。

「あ、そうだ。川口」

そして、わたしのほうへ引き返してくる。

なんだろう。まさか……、と根拠のない期待が胸の中で膨らむ。

「さっきのメールのことなんだけど」

どきん、と心臓がはねる。嶋くん、わたしの真正面に立ってる。

吐息がかかりそうなほど近い、というわけではないけど、でも、近い。

喉の奥から、なんとか声を絞り出す。

「あれが、どうかしたの？」

嶋くんはばつが悪そうに頬をかいた。

「ごめんな。俺、今日まで気づかなかったよ。一人でキーパーもコップも運ぶのは、大変だよな」

あれはちょっと大きさに言っただけで、べつにそんな、大変と言うほど大変でもないのよ。

そう言おうとしたのに、口からでてきたのは、あ、とか、いや、とか、意味不明な言葉だった。

嶋くんはわたしをまっすぐ見据えて、はっきりと言った。

「これからは、ちゃんと手伝う」

頭の中で花火が上がった。

やった。嶋くんが朝、キーパーを運ぶのを手伝ってくれる。ということはつまり、二人きりの時間が必ず保障される！ かなり短い時間だと思うけど、そんなの関係ない。やった、やったー！

「――ように、みんなに言っておくから」

「え？」

自分の耳を疑ってしまった。この人、いまなんて言った？

「さっき一樹が、川口は遠慮してなかなか自分のお願いを言えないタイプだって言ってただろ？ それで気づいたんだよ。いままでは、俺たちに気を遣って大変だって言えなかったんだよな？」

「あ、うん。いちおう、ちょっとは……」

やっぱり、というように、嶋くんは唇を結んだ。

「ごめんな。だから、みんなに言っておくよ。川口が大変そうにしてたら、キーパー運ぶのぐらい手伝ってやれって。あのメールはそ

ういうことなんだよな？」

「いや、あのその」

「手伝ってくれるマネージャーがいるって、当たり前のことじゃないのに、みんなそれを忘れてるんだよな。俺がちゃんと言っておく。気づくのが遅れて、悪かった」

最後にもう一度頭を下げて、じゃあまた、と嶋くんは去っていった。

わたしは突っ立ったまま、教室から出て行く大きな背中を見送った。

これからは、ちゃんと手伝う。さっきの嶋くんの言葉が頭の中で何度も再生され、エコーのように響く。あのとき感じた幸福感は、一瞬にして崩れ去ってしまった。わたし、内心、すっごくはしゃいでたのに……。

しばらく動けないでいたわたしの背中を、誰かがぽんと叩いた。あかりだ。

「こ……、こんなことも、あ、あるっよ」

必死に笑いをこらえている。あかりはそのまま、肩を震わせながら席に戻っていった。

「あー、うまかった。……あれ、川口、どうした？ 変な顔して」

メロンパンを食べ終わった藤井が怪訝そうな顔をする。

あんたが余計なこと言うから変な勘違いされたじゃないのよこのアンポンタンが。ちよつといいやつかもなんて思った過去の自分をぶん殴りたい。

「なんでもないわ。じゃあね、藤井くん」

「あ、ちょっと待てよ」

机の中に手をつっ込み、紙パックのお茶を取りだす。

「これ、さっき飲んだんだけどさ。席に戻るついでに、捨ててくれね？」

無言で受け取る。サンキュー、と藤井が笑ったので、適当に愛想笑いを返した。

ゴミ箱の前に立つと、誰も見ていないことを確認して、パックを逆さに持ち、思いっきり握りつぶす。ストローの先からお茶の雫がこぼれる。そのまま手を離してゴミ箱に捨て、席に戻る。

昼休み終了のチャイムを聞きながら、わたしは大きなため息をついた。

藤井も藤井だけど、嶋くん……。

高橋さんのメアドを推理するときの嶋くんは、本当にカッコよかった。わたしからは思いも寄らないところからヒントを見つけ、意味を解読し、どんどん確信に迫っていった。純粹にすごいと思った。

だけど、だけどね……。

教室のドアが開き、先生がやってくる。取り出した教科書を机の上に置きながら、わたしは心の中で叫んだ。

なんでメアドの解読はできても、乙女心の解読はできないのよ！

＊

そのあと、授業が進むにつれて、気持ちはずだんだん落ち着いてきた。心のもやもやも、完全にとは言わないけど、まあ八割がたは払拭できた。

そんな中でわたしは、嶋くんのあの洞察力を思い出すと、ちょっと笑えないなと思った。

高校に入って一年と三ヶ月。

三年間隠し通すと決めた秘密が誰かにばれる気配はないけれど、まだまだ油断できない。

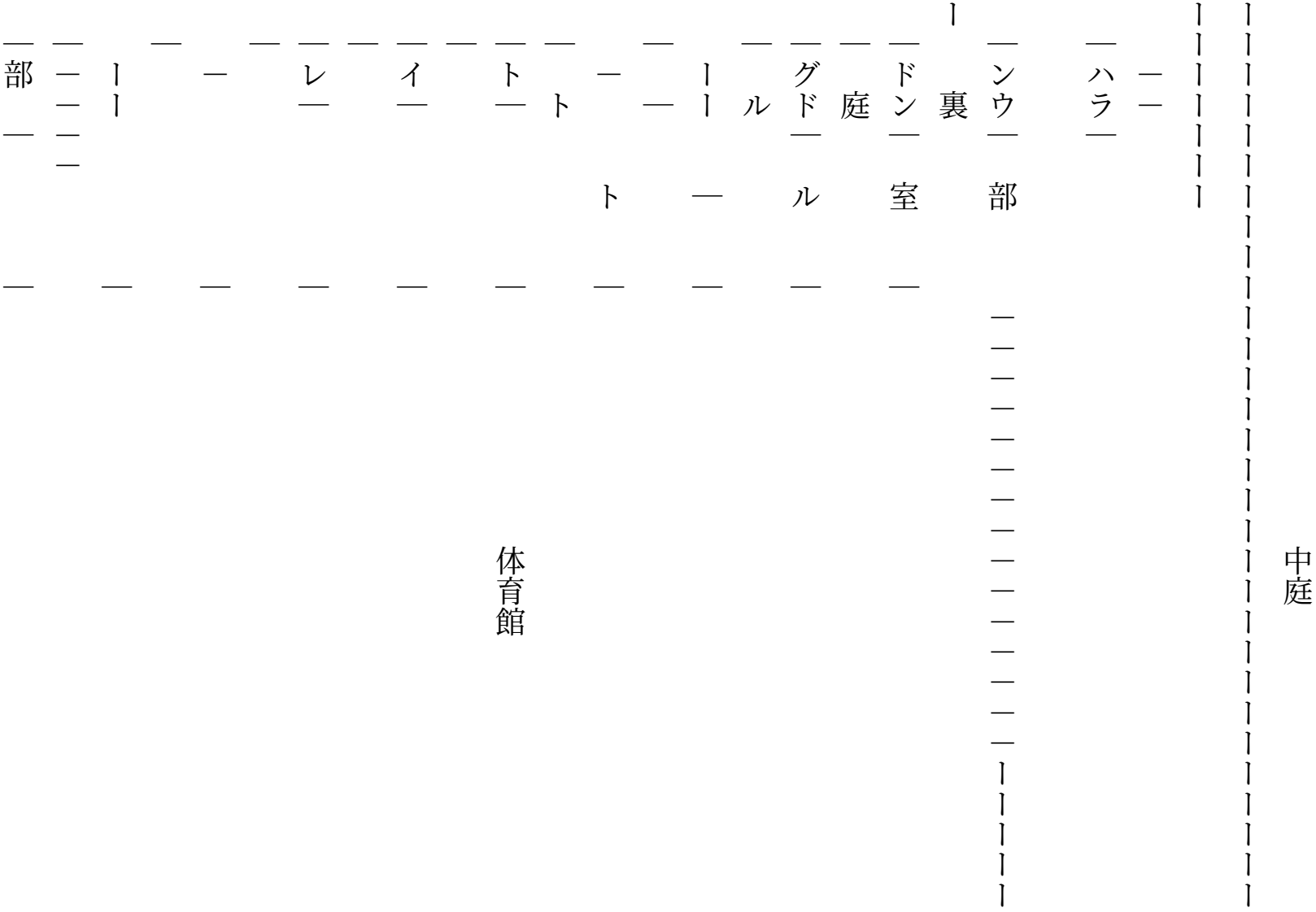
特に嶋くんは、一番気づいてほしくない人なのに……。

体育館周辺見取り図（前書き）

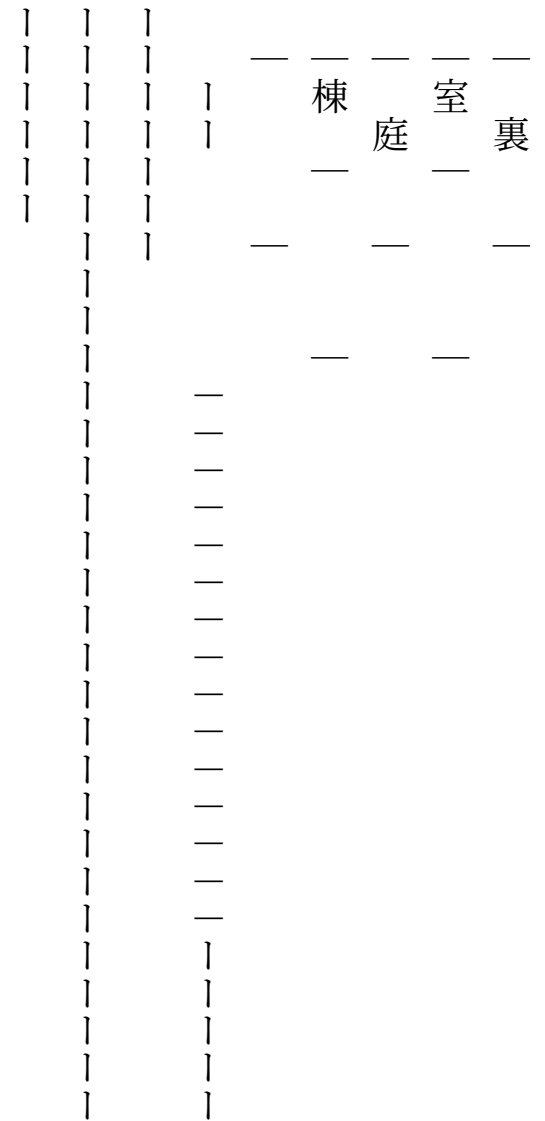
第二章は見取り図があった方がわかりやすいと思うので、下手ですが作成しました。

携帯の方は見づらいかもしれません……。すみません。

体育館周辺見取り図



グラウンド



雲に隠れる火曜日 1

1

物事には、なにごとにも限度ってものがある。

ケーキを作るのにある程度の砂糖は必要だけど、度を過ぎると甘くなりすぎて気持ち悪くなるし、言いたいことをすべて口に出すと反感を買うけど、我慢しすぎるとあとで思いもよらない形で爆発してしまう。

どんなことでも、限度を超えると裏目に出ってしまうものだ。わたしはいま、それを痛烈に実感していた。

「雨を降らしてくれなんて、言っていないっつの……」

火曜日の放課後、部室へ向かう途中のこと。
空から、ぱらぱらと雨が降ってきた。

二限目の体育で外に出たときあまりにも暑かったから、もうちょっと曇ってくれないかなあと思ったけど、曇りすぎて雨まで降られるのは迷惑だ。

わたしはため息をつきながら、鞆を頭に乗せて雨避けにする。すぐに止めばいいなと思ったけど、勢いはだんだん強くなっていく。グラウンドに出られないほどではないけど、一時間も練習すれば髪から雫が滴るぐらいには濡れそうだ。

＊

ジャージに着替えてグラウンドに出ると、バックネット裏のベンチには、既に後輩マネージャーの武田瑞樹たけだ みずきが座っていた。日除けパラソルで守られたベンチにはキーパーが置いてある。瑞希が先に作っておいてくれたのだ。

「キーパーありがとう、瑞樹」

「いえ、ぜんぜんですよ」

今日の瑞樹は長い髪を二つ結びにしていた。髪型だけ見れば大人しそうだけど、喋り方はハキハキしてて、声も大きい。先輩相手にも変に遠慮するタイプじゃないから、話してて気持ちの良い後輩だ。瑞樹はわたしの顔を見ると、少し眉をひそめた。

「ユズ先輩、もしかして眠いですか？」

「え？　なんでわかったの？」

「いや、なんか目がとろんとしてるから」

教室であかりにも同じことを言われた。少しは目が開いてきたと思ってたのに。わたしは素直に白状する。

「昨日ね、BSでやってた深夜映画がおもしろくて、遅くまで起きて観てたの。それで二時間ぐらいいしか寝てなくて」

「なんの映画観てたんですか？」

「トロン」

ぶ、と瑞樹が噴出す。

「だから目がとろんとしてるんですか？ あはは、なにそれ」
「わたしも、まさかこんなオチがつくとは思わなかったわ」

あかりには、トロンを覗て目がとろんだねと言われた。悔しいけど少し笑ってしまった。

瑞樹はちよつと冗談っぽい笑顔で、

「眠たいからって、練習中油断しないようにしてくださいよ。ボールが飛んできたら危ないですし」

「はいはい。大丈夫ですって」

身体は重いし目はあんまり開いてないけど、さすがにそれは大丈夫。わたしは余裕を持って、そう返事をした。

そのあと、部員が揃ったところで練習は始まり、キャッチボールに入るころには掃除当番で遅れていたあかりもやって来た。グラウンドに到着して最初に言ったのは、

「やりづらいね」

だった。雨の中の練習が、ってことだろう。わたしも瑞樹も、まったく反論しなかった。

昨日の夜も雨が降ったせいでグラウンドの土は湿っている。小さい水溜りもいくつかできていて、そういうところを歩くたびに靴やズボンのすそが汚れてしまう。でも、マネージャーのわたしたちはまだいい。本当に大変なのは選手のみなんだ。

湿った土の上を少し走るだけでスパイクの靴底にびっしり泥がついて、足がかなり重くなってしまふ。その泥を落とすには、スパイ

クを脱いで靴底を叩くか、スパイクを履いたまま飛び跳ねて、空中で両方の足をぶつけあうかする必要がある。わざわざスパイクを脱ぐ時間がないから、みんな後者の方法をとってるんだけど、グラウンドのあちこちで選手がびよんぴよん飛び跳ねてるのはちょっと面白い光景だった。

「後半は室内練習になるかもねしれせんね」

一向に止まない雨の中で、瑞樹が言う。パラソルの下にいるわたしたちはまだいいけど、濡れたままずっと練習する選手たちは風邪を引くかもしれない。野村先生はそういうところに気を配る人だから、途中で屋外練習を切り上げる可能性は充分ある。

「トレーニングルーム、押さえてたほうがいいわね」

あかりと瑞樹が頷く。

トレーニングルームは、体育館の二階にある筋トレ用の道具が一通り揃った部屋のこと。外で練習できないときはそこで筋トレをすることが多かった。ただ、利用するには事前に体育教官室で予約が必要だ。

「あたし行きましようか？」

すばやく事態を察し、瑞樹が手をあげる。じゃあお願い、と言おうとしたとき、

「やあつべええ！ グローブ体育館に忘れた！」

そんな悲鳴が聞こえてきた。顔を見なくても誰だかわかる。グローブを忘れるなんてアホなことをやらかし、しかもそれを大声で叫

ぶなんて、あいつしかない。

ちょうどいいや。わたしは体育館に向かおうとする藤井を呼び止めた。

「藤井くん。ついでに、トレーニングルームの予約入れてきてくれない？」

キャッチボールの相手を持たせるのが気がかりらしく、藤井は早口にオッケーオッケー、と答え、一目散に走り去っていった。

「藤井君、走ってるあいだに忘れたりしないかな？」

あかりが心配そうに呟く。わたしはそれに、大丈夫よ、と返した。

「さすがの藤井でも、そんな短時間で忘れたりしないって。『はじめてのおつかい』に出かける五歳児じゃあるまいし」

——と、思ったのは、見事に間違いでした。

グラウンドに戻ってきた藤井は、バックネット裏のあかりと瑞樹を見た途端、

「あ、トレーニングルーム忘れた！」

と叫んだ。わたしは送球ミスをしたボールを取りにいていたところだったからバックネット裏にはいなかったけど、それでも藤井の声はしっかり聞こえた。あいつの頭は五歳児レベルなのか。

頭が痛くなってくる。それと同時に、忘れかけていた眠気が急に蘇ってきた。

目を揉みながらバックネット裏に戻ると、あかりがわたしの名前を呼び、

「あとで時間を見て予約入れてきてくれない？」

と言った。わたしは頷き、眠たいとき特有のろれつの回らない声で、うん、わかったーと答えた。

2

キャッチボールのあとはノックが始まった。いつもなら、野村先生にボールを手渡すのと、たまにある送球ミスのボールを取りに行くぐらいしか仕事がないんだけど、今日は大忙しだった。

グラウンドがぬかるんでるせいでボールがすぐ汚れるから、どんどん雑巾で拭いていかないとボールが足りなくなる。だけど、雨が降ってるせいで送球ミスも倍増するから、それも取りに行かないといけない。わたしもあかりも瑞樹も、選手みんなに負けないぐらい動き回った。

そんなわけだから、トスバッティングが終わって十分間の休憩に入ると、三人とも口を揃えて

「疲れたー」

と言って、バックネット裏のベンチに座り込んだ。お喋りをする気力もなく、ぱらぱらと雨がパラソルを叩く音だけが響く。ファールゾーンに生えた樹の下で雨宿りをする選手たちも同じのようで、話をする人はほとんどいない。黙って座ってる人がほとんどだった。

そんな中でも、嶋くんだけは雨に濡れながら黙々とネットにボー

ルを投げ込んでいた。ときどき首を傾げて、握りかたを変えたり、ボールを離す位置を変えたりしている。

きつと、ノックのときに送球が逸れたのを気にしてるんだ。今度はスローモーションで腕を振る嶋くんを見て、わたしはそう思った。なにかしつくりこないことがあったり、反省点をみつけたりしたら、嶋くんはいつもこうやって休憩時間をつぶして確認する。練習のときはいつも一番大きく声を出してるし、本当に、どんなときでも手を抜かない人なのだ。

わたしは嶋くんのこういうところが一番好きなんだな。一心不乱にボールを投げ続ける彼を見て、そんなことを思う。顔は無意識にニヤけてたかもしれない。

急に、パラソルを叩く雨音が大きくなった。雨が強くなってきたのだ。土砂降りってわけではないから、練習はまだ続けるんだろうけど……、と思ったところで気づいた。

わたし、まだトレーニングルームの予約入れてない！ 早くしないと、他の部にとられる。

わたしはベンチから立ち上がり、あかりたちに声をかけた。

「ちょっと行ってくるね」

二人とも、いってらっしゃーい、と手を振って送りだしてくれた。グラウンドを出るとき、ちらっと腕時計を見る。四時三分。休憩は四時十分までだから、無理に急がなくても間に合う。

*

公星高校の体育館は、グラウンドに背を向けて建っている。しかも残念なことに、裏口や側面からの入り口がなく、あるのは正面玄関だけ。つまり、体育館の右側か左側を通して正面に回り、そこから中に入るしかない。

左側のルートは、右手に体育館、左手にはプレハブ二階建ての部室棟と、ハンドボールグラウンドがある。部室棟を通り過ぎると公衆トイレがあつて、次にハンドボールグラウンドが出てくるという感じだ。通称は『部室ルート』。

右側のルートは、通称『裏庭ルート』。その名の通り、体育館の裏庭を通る。その裏庭、樹や花が植えられていて少し見通しは悪いけど、さりげなく高級な黒土を使ってるらしくて、『他の土を持ち込まないでください』と大きく書かれた看板まで立てられている。庭は体育館の真ん中ぐらいの地点で終わって、そのあとは『部室ルート』と同じように、アスファルトの道を歩く。左手には体育館、右手にはフェンス。どのルートも、歩いて二分ぐらいで体育館に着く。

わたしは『部室ルート』を通して体育館に向かった。雨に濡れないように、体育館の軒下を通る。部室があるだけあつて、この時間でもけっこう人通りはあつた。知り合いも何人かいたから、頑張つて上品な笑顔を作つて挨拶を交わした。

部室と公衆トイレを通り過ぎると、左手にはハンドボールグラウンドが見えてくる。ちなみに、『ハンドボールグラウンド』って言うっても、アスファルトとか人工芝ってわけじゃない。わたしたちの使ってるグラウンドを小さくしただけの、土のグラウンドだ。ハンド部は火曜日が定休日だから、誰もいなかった。

そのハンドボールグラウンドを半分ほど進んだところで、『部室ルート』は終わり。右に折れて体育館の正面に回り、中に入ろうとしたとき、

「……ん？」

思わず声が出た。

正面入り口の辺りが泥で汚れてる。靴底にたくさん泥がついた人がこの辺りを通ったんだ。見ると、『裏庭ルート』へ続く道も泥で汚れていた。くっきり足跡がついてるわけではないけど、ちよんちよんと泥が続いている感じ。しかも、茶色い泥に混じって黒い土まである。

校内で黒い土があるところといえば、裏庭しかない。たぶんその人は、『裏庭ルート』を通ってここまで来たんだろうな。そう思いながら体育館に入ると、玄関の靴を脱ぐ場所も泥で汚れていた。さっきの人はどうやら体育館にも入ったらしい。誰だか知らないけど、ずいぶんいろいろ汚して回るやつだ。

わたしも靴を脱ぎ、体育館に入る。いちおう靴箱は設置されてあるけど、どうせすぐ出るんだから、いちいち入れなくてもいいや。他の靴はぜんぶ靴箱に収められてるのに罪悪感を感じないでもないけど、まあいいよね。

バスケ部のドリブル音を聞きながら、階段を上がる。二階には男女更衣室とトイレ、トレーニングルーム、体育教官室がある。トレーニングルームの予約は、体育教官室にある名簿に記入すればオッケーだ。

わたしは教官室のドアを叩き、失礼します、と言って中に入る。振り返ってきた体育教師たちに軽く会釈。頭を上げて、入ってすぐ

右手の机にある『トレーニングルーム利用名簿』に近寄る。

「あれ？」

間抜けな声が出た。それと同時に、めっちゃくちやがつくりきた。

トレーニングルームはもう予約されていた。それも、他の部活にじゃない。野球部にだ。代表者記入欄には藤井一樹とある。予約を入れた時間は四時四分。隣にあるデジタル置き時計を見ると、ちょうど四時六分になったところだった。

藤井が責任を感じて、休憩時間を潰して予約を入れにきてくれたのだ。わたしとすれ違わなかったのは、『裏庭ルート』を通って帰ったからだろう。けっこういいところあるじゃん、と思う。まあ、予約を入れに行く前にわたしたちに一声かけてくれれば、本当は一番よかったんだけど。

と、そこまで思って、ひらめいた。

あの、体育館前の泥。あれは、藤井が通った跡だったんだ。確か、藤井のスパイクは先週買い換えたばかりの新品だったはず。靴底のトゲがすり減っていないぶん、他の人よりも多く泥がつく。そんなスパイクで歩けば、当然、通ったところに泥はつく。体育館の正面入り口から部室ルートに続く道にあんな泥はついてなかったから、藤井は行きも帰りも『裏庭ルート』を通ったんだろう。

体育館まで来たのが無駄足になって、ちょっと切ない気持ちになりながらわたしは階段を下り、靴を履いて外に出た。

正面入り口の前は相変わらず泥で汚れていた。その少し右にある

蛇口で、体育教師の渡辺先生がしかめっ面でバケツに水を溜めている。傍らにはデッキブラシ。泥を水で流して、掃除するつもりらしい。

そういえば、この体育館の正面入り口の辺りには下水道がないから、泥とかで汚れても雨で流れないと聞いたことがある。この渡辺先生は神経質で有名で、管理している裏庭を少しでも荒らされてもかなり怒るらしい。こうして体育館の辺りを汚されるのも我慢ならないんだろう。相当イラついているらしく、顔をあげた渡辺先生とばっちり目があつたわたしが、こんにちは、と挨拶しても、

「まったく、野球部は……」

と、吐き捨てられた。

なによ、野球部だからなんだってのよ。文句があるならはつきり言えっつーの。

そんな悪態が口から出そうになるのを抑えて、わたしはそのまま、『部室ルート』を通してグラウンドに帰った。行きと違い、帰りは誰も知り合いに会わなかった。

＊

グラウンドでは、嶋くんは相変わらずスロージョギングのチェックをしていた。他の部員も体力が回復したみたいで、素振りをしている人や、キャッチボールをしている人もいる。

その中には藤井の姿もあった。樹の下でストレッチをしている。ちょうどスパイクの裏が見えたけど、黒土はついていない。たぶん、どこかで落としてきたんだろう。

「おかえり。遅かったね。どこまで行ってたの？」

バックネット裏に戻ると、でボールを拭いていたあかりが顔をあげた。冗談を言ってるわけではなさそうな感じだった。わたしは隣に座りながら答える。

「どこでって、普通に、体育館までよ。でも、藤井が先に予約入れてた」

「え？」

あかりが素っ頓狂な声をだした。驚いてるっていうより、わたしの言ってる意味がわからないって感じだった。とりあえず、ちゃんと一から説明する。

「だから、さっきあかりがわたしに、空いてる時間にトレーニングルームの予約入れてきてくれて言っただでしょ？ それでいま行ってきたら、もう藤井が予約入れてたのよ。わたしの着く少し前に。なんかちよつとがっかりしたわ」

次に代打で出すぞと言われて打つ気満々でネクストバッタースザークルで待機してたのに、前のバッターがサヨナラヒットを打って、けっきょくなにもしないまま試合終了するとこんな気持ちになるんだろうなと思った。

要点を正確に摘んだわたしの説明に、あかりはなぜか目を丸くした。何度か瞬きをして、こう答える。

「いや、私、ユズに予約してなんて頼んでないよ」
「え、うそ？」

髪を結び直す手が止まるわたしに、あかりはさらりと言っている。

「私がお願いしたのは、瑞樹だよ。ユズにはなにも言っていないよ」

頬っぺたに思いつきりビンタされた気分だった。必死に、あのときのことを思いだす。あくびを噛み殺しながらバックネット裏に戻ったそのとき、あかりは確かにわたしの名前を……。

「あ……」

呼んでなかった。そうだ、あのときあかりは確かに、瑞樹と言ったのだ。それをわたしが勝手に聞き間違えていただけだ。

「ごめん、わたしが勘違いしてた……」

「私に謝ることじゃないと思うけど……。でもユズ、そんな間違えるなんて、ほんとに眠たかったんだね」

「うん、まあ……」

自分の間抜けっぷりに呆れてしまう。わたしはもっと、「知的なオンナ」を目指してるはずなのに。

「それじゃあ、いま瑞樹がいないのも、体育館に行ってるからなの？」

「うん。ユズのちょっとあとに行ったよ。私と瑞樹は、ユズはトイレに行ったと思ってたから」

あかりの言うトイレは、部室棟の隣にある公衆トイレのことだろう。そりゃあ、遅かったね、なんて言葉が出てくるよね。向こうなら、歩いて一分ぐらいだから。

それにしても藤井め。どうせなら最初から予約入れておけよ。そしてたらこんなことにはならなかったのに。

なんてことを思ったけど、雨に濡れながら嶋くんのスローイング練習を手伝う藤井を見ると、まあ許してやってもいいかな、という気になった。

雲に隠れる火曜日 2

3

外での練習はほどなくして切り上げになった。雨は強くはならな
いけど弱まる様子もなく、これ以上やると風邪を引く可能性がある
と野村先生が判断したからだ。次の日曜日には練習試合もあるから
念のため、とのこと。

——予約を入れておいたのは、無駄じゃなかったな。
ダンベルやランニングマシンでトレーニングする選手たちを見
て、なんかよくわからない感慨に浸った。

いまわたしがいるのはトレーニングルーム。外で練習できないと
なると、投手陣はここに集まってシャドーピッチングやランニング
をする。野手陣はというと、屋根のあるところで素振りをしたり、
紙ボールでトスバッティングをしたり。場所を見つけてできる練習
をするって感じた。

「これ、ここに置いておくね」

シャドーピッチングをする石川くんの横に、水の入ったボトルを
置く。

室内練習ではみんなバラバラになるから、キーパーの水をボトル
に移し替えて、練習してる選手たちのところに届けるのがまず第一
の仕事だ。じゃあ第二の仕事はなにかというと、これはあんまり決
まってない。手助けを求められたらするって感じで、マネージャー
から自発的に動く仕事は、実はこのキーパー届けでだいたい終了。

あとは、とりあえず選手たちの近くにいて、手伝いをお願いされたいようにスタンバイしておく。

……けど、ここでは練習の手伝いはぜんぶ機械がやってくれるし、マネージャーはいなくていいよね。

わたしはそう判断して、トレーニングルームをあとにした。体育館を出て中庭を突っ切り、教室棟の一階と特別教室棟の一階をつなぐ渡り廊下に行く。この渡り廊下、幅は広いし屋根はあるので、雨の日は絶好の練習場所になる。今日もけっこうな数の選手たちがここで練習していて、隅にはあかりたちもいた。瑞樹は制服姿の女の子となにか話をしていたけど、わたしが到着する頃には、

「じゃあ瑞樹、また明日」

「うん。ナオもめげずにバイト頑張ってね」

と言葉を交わして、制服姿の子は校門の方へ歩いていった。

「友だち？」

わたしが訊くと、瑞樹はこくりと頷いた。

そのあと、あかりと瑞樹は昨日やってたドラマの話をしただけど、わたしは十メートルほど向こうで素振り続ける嶋くんをぼんやりと見つめていた。

なんだか、スイングが鋭くなったみたい。真剣な表情でバットを振る嶋くんを見て、わたしはそう思った。

二週間前の甲子園県予選で、嶋くんは相手ピッチャーの球威に押され、捉えたはずのボールをスタンドまで運ぶことができなかった。そのあとけっきょく一点差で試合に負けて、先輩たちは引退。その

日以来、嶋くんは以前にも増してバットを振るようになった。あれをホームランにできなかったのが、相当悔しかったみたいだ。

「ユズ先輩、まーた見てる」

瑞樹がからかうように笑いながら、肩に手を置いてきた。急に身体に触れられて一瞬びくっとしたけど、苦笑いで振り向く。

「わかる？」

「わかりますよ。めっちゃ露骨ですもん」

瑞樹は軽く周りを見回して、小声で訊いてきた。

「ユズ先輩って、なんでそんなに嶋先輩のこと好きなんですか？」

「えっ？」

そんなこと訊いちゃう？ てか、なんでも言われても、どう答えればいいのか困る。あかりも好奇心丸出しでこっち見てるし、はぐらかせない雰囲気だった。

「じゃあ、いつ好きになったんですか？ やっぱり野球部で練習する姿を見て？」

「あ、それは違う。好きになったのは野球部に入る前よ」

瑞樹は目を大きく見開いて、顔全体を使って驚きを表現した。

「じゃあ、クラスとかで好きになって、それで嶋先輩を追いかけてマネージャーになったんですか？」

だいたい当ってるけど、それも違う。わたしは首を振って訂正し

た。

「中学のときに好きになって、それで嶋くんを追いかけて公星に入ったの。マネージャーになったのは、まあ、そういうこと」

事実ではあるけど、なんか口に出すと恥ずかしい。あかりは聞いたことがあるから特になにも言わないけど、瑞樹は手を口許に当てて、えーっ、と声を出した。リアクション芸人になれるタイプだ。

「すごい！　　そういえばユズ先輩、家遠いって言ってましたもんね。同じ中学の人も、ほとんどいないんですたっけ？」

「うん、まあ」

ほとんどっていうか、わたしを除いたら一人しかない。その人とも話したことないから、入学したときは顔見知りゼロに等しかった。

瑞樹は声をひそめて、更に質問を続ける。

「でも、どこで嶋先輩と知り合ったんですか？　　中学違うんでしょ？」

「嶋くんが野球の試合に出てるのを偶然見かけたの」

あかりが、にっこりと笑って補足説明をする。

「たけひろ武広中との試合だよね」

以前あかりにこの話をしたとき、試合の様子をよく覚えていた。当時からマネージャーをやっていたあかりにとっても、かなり印象に残る試合だったらしい。

わたしが頷くと、瑞樹の瞳が輝きを増した。早く続きを、とその

顔は語っていた。

「中三の春先にね、わたし、ちょっと落ち込んで……。ぼんやりしながら国道を歩いてたの。そしたら、武広市民グラウンドの前を通ったときに、なんか声が聞こえてきて。野球の試合だなんてわかって、なんとなく立ち止まって、フェンスの向こう側から試合を観てたんだ。そしたら……」

あのときのことは、きつと、この先一生忘れない。

夕日の落ちかけたグラウンドで行われていた、野球の試合。守備についていたほうのチームには、明らかに「負け」ムードが漂っていた。守備についている野手もマウンドに立つピッチャーも、挙句の果てにはベンチにいる控え選手たちもまともに声を出してなくて、早く試合終わらねえかなと思ってるのがバレバレだった。朝会で校長の話聞く態度よりはまあマシぐらいのレベルだった。

そんな中で一人、キャッチャーの人だけはずーっと声を出して、みんなの士気を高めようと頑張っていた。グラウンドの中で、その人の声だけが響いていた。

「そのキャッチャーが、嶋先輩だったんですか？」

頷く。

でもあのときのわたしはひねくれていて、なんでそんな意味ないことしてんの、バカじゃないか、なんて思っていた。それでもなぜかその場を離れることはできず、一緒に歩いていた人もなにも言わなかったから、しばらく試合を観続けた。

なんとか守りを終えて攻撃に移ったとき、わたしはどうしてこのチームがこんなに諦めムードなのかかった。相手ピッチャーの投げる球は中学レベルとは思えないほどのものだったからだ。無理だよ、こんなの打てっこない。そう思うのも無理はない、むしろ当然のことだった。

思ったとおり、先頭バッターはあっさり三振。次のバッターも、まるで同じシーンを再放送したみたいに三球三振。

得点板を見ると、この回が終わるとコールドで試合終了だ。さあ、ラストバッターは誰かな。そう思って観ていると、打席に立ったのは、あの、一人だけ声を出していたキャッチャー——嶋くんだった。

「そのときにね、自分でもびっくりしたんだけど、なにか、期待みたいなものを感じたの」

「期待ですか？」

「うん。この人ならなにかやってくれそうな気がするって。ホームランを打つんじゃないかって、本気で思ったわ」

でもそれは間違いだった。

一球目、ストレートの振り遅れて空振り。二球目は、ストレートを意識しすぎて、ゆるいカーブにぜんぜんタイミングが合わなかった。

わたしは自分の期待がしぼんでいくのがわかった。そりゃそうだよね、そんなに都合よくホームランなんて打てないよ。

どうせ、次も空振りする。わたしは冷めた目に戻って、そんなことを思った。だけど、次の三球目、ストレートになんとかバットを当てた。完全に振り遅れだったけどぎりぎりでバットに当たり、ファールになった。続く四球目、五球目も同じだ。ボールに喰らいついて、ファールで粘っていた。

このまま終わってたまるか。なんとかして塁に出てやる。
そんな気迫が伝わってきた。

グラウンドの外にいるわたしにまでわかるぐらいだから、当然、ベンチの人たちにはもっと伝わっている。さっきまでろくに声も出していなかった人たちが、急に真剣な眼差しをバッターボックスに向けるようになった。

そして、マネージャーが一言、頑張れ嶋君、と声を出したのをきっかけに、ベンチから応援が始まった。頑張れ嶋、負けるな良次。そんな声が行きかって、バットがボールに当たるたびに、大歓声があがるようになった。

それに応える様に、バッターはだんだんタイミングが合ってきて、当てるのがやっとだったボールが、少しずつ前に飛ぶようになってきた。ライトに飛んだヒット性の当たりが辛うじてファールになったときは、なぜかわたしも自分のことのように悔しくなり、それと同時に、しぼんだはずの期待がまた膨らみ始めた。

この人なら、もしかしてヒットを打てるんじゃないか。打席に立つ背番号二番を見て、わたしはそう思った。

そして、次の投球で、とうとうボールはフェアゾーンに飛んだ。だけどそれはどう見ても当たり損ないの、ボテボテの打球だった。ショートが前進してボールを捕球する。タイミング的にはアウトだったけど、送球が少し横に逸れた。そのせいで、ファーストの人がベースを踏むのと、バッターが一塁ベースに頭から突っ込むのがほぼ同時だった。

アウトかセーフか。みんなの視線が審判に集まる。
審判は腕を大きく広げて、セーフと宣言した。

その瞬間、ベンチからあがった歓声は、ダイナマイトでも爆発したのかと思うぐらいの大きさだった。甲子園の出場が決まった高校でもここまでするかな、ぐらいの大きな大きな声で、選手たちはよろこびあった。

そしてなんといっても、ヒットを打った彼。記録上はヒットじゃなくてショートのエラーだし、審判によってはアウトにされていたかもしれないのに、それでも、腕を思いっきり突き上げて、一塁ベース上で大きな大きなガッツポーズで吼えた。なんて言ってるのかまったく聞き取れない、ただただ純粋な雄たけびだった。

「次のバッターが凡退してけつきよく負けたんだけど、そんなことはどうでもよかったわ」

どんなに恵まれない状況でも、ひたむきに、がむしゃらに頑張っていたけば乗り越えられるかもしれない。

あのガッツポーズは、わたしにそう思わせるには充分だった。

「じゃあ、そのときに見た嶋先輩が忘れられなくて、高校まで追いかけてきたってことですか？」

「うん、まあ、そういうこと」

わたしが首を縦に振ると、瑞樹はしみじみと息を吐いた。

「壮絶な人生ですね……」

そ、それはどうも。

「でもユズ、よく嶋くんの受験する学校がわかったよね」

ボトルで水を飲んでいたあかりが、口許を拭いながら言った。そういうえば、前にあかりにこの話をしたとき、言ってなかったつけ。

「友だちのいところに、あかりたちと同じ中学に通ってる子がいたから。訊いてもらったのよ」

「あ、そうじゃなくてさ。嶋くんずっと、公星と武広のどっちを受けるか迷ってたんだよ。受験届けを出す当日に公星に決めたって言ってたから、よくわかったなあって」

「あ、ああ。そういうことね。もちろんあの……女の勘よ」

「うわ、すごい！ 勘ですか」

瑞樹は感心したように両手の掌を合わせた。

「きっと、嶋先輩を想う気持ちが導いてくれたんですよ！ すごい、ユズ先輩」

そんな絶賛されるようなことでもないんだけど……。つか、瑞樹って意外とロマンチスト？

あかりは興奮する後輩を見て笑ったあと、そのままの顔でわたしを見上げてきた。

「でも、残念だなあ。武広中との試合はよく覚えてるけど、ユズが観てたのは気づかなかったよ」

気づいてればもっと早く友だちになれたのにね、と言いたげだった。わたしは、気づかれなくてよかったな、と思いつつ、作り笑いを返す。ごめんねあかり。

ちなみに、あの試合で嶋くんに真っ先に声をかけたマネージャーはあかりだったらしい。

「私もどうにかして空気を変えないとって思ってたんだけど、どうしたらいいのかわかんなくて。そしたら、嶋君のあの粘りでしょ？ 気づいたら、声出して応援してた」

と、前にこの話をしたとき、あかりは言っていた。

「まあ、そんなところだからさ、わたしの話は。二人はなんか、そういう感じの人、いないの？」

瑞樹はまだ色々と質問したそうな顔をしてるけど、これ以上話すと言っちゃいけないことまで言ってしまうそうで、強引に話を逸らす。あかりも瑞樹も大好きだけど、どうしても言えないことだってあるのだ。

「私のタイプはねえ」

えへへ、って感じの笑顔を浮かべるあかり。あー、知ってる知ってる。何度聞かされたことか。

「あだ名は『番長』で、髪はリーゼント。ブログは基本短文で、最後は必ず『ヨ・ロ・シ・ク!!』で締めるような人かな」

「あかり先輩、どんだけマニアックな趣味してるんですか！ てか、そんな人いるんですか？」

「いるんだよねえ、これが。気になったら『ハマの番長』で検索してみてね」

「は、はあ……」

困惑気味にそう答える瑞樹。

とりあえず、あかりのことはいいとして……。

「瑞樹はどうなの？　好きな人とかいないの？」

「いないんですよ、これが。そういう人がいなくても、いまは普通に楽しいですし」

そう言ったあと、練習する部員たちにちらりと視線を向けて、

「あ、でも、野球部の中だったら藤井先輩みたいな人がタイプです」
「ええっ？」

思わず、そんな声をあげてしまった。ふ、藤井だと！

「アレのどこがいいの？」

「アレって……。ユズ先輩、さりげなく毒舌ですよ。あたし、ああいう感じの一緒にいて飽きなさそうな人がいいんです。常に新鮮な気分がいれそうだし」

「そうなんだ……」

あいつ、ただうるさいだけなのに。ものは言いようだ。

そのときに、ふと気づいた。藤井はさっき、嶋くんの隣で素振りしてたはずなのに、いつの間にかいなくなってる。

「あかり。藤井はどうしたの？」

「ああ、靴下変えるって部室に行ったよ。水虫になりそうでキモチわりいって」

「ふーん」

我ながら気のない返事をする。なんとなく訊いてみたけど、そんなに興味のある話題じゃないし。そんなわたしの態度がおかしかったのか、瑞樹が軽く笑った。

「ユズ先輩って、藤井先輩が嫌いなんですか？ さっきからひどい扱いしてますよね」

「そういうわけじゃないけど……」

嫌いまではいかないけど、うざいやつだとは思ってる。口を開けばわたしをイラつかせるし、いちいち声とリアクションが大きいし、名前が一樹だし。うざい要素を挙げていけばキリがない。

瑞樹はわたしの内心を見透かすようににやつと笑った。

「じゃあもしかして、あれですか？ ユズ先輩、トレーニングの予約を入れた行ったとき、藤井先輩とすれ違ってても気づかないふりしてたとか？」

そんなことしてない。そもそも、

「わたし、藤井とはすれ違ってないわよ」

会ってもいないなら、無視することすらできない。それぐらいの軽い気持ちで答えたんだけど、瑞樹は眉を寄せた。

「なんかの冗談ですか？」

「まさか。こんなことで冗談言わないわよ」

わたしが至って真面目だと知った瑞樹は、ぱちぱちと何度か大きな瞬きをした。

「あたし、『裏庭ルート』から体育館まで行ったんですけど、藤井先輩とすれ違わなかったんです。あたしがグラウンドを出たときは、まだ藤井先輩は帰ってきてなかったのに。だからきつと、先輩は『

部室ルート』を通過して運動場に帰ったんだなって思ってたんですけど……」

わたしを見上げてくる。ちょっと考えて、やっと意味がわかった。瑞樹は、わたしが『部室ルート』を通過して体育館に行ったことを知っている。だからさっき、わたしと藤井が途中ですれ違ったと思っていたんだ。だけど……。

「会ってないわ」

わたしは体育館に向かったときのことを思いだしながら、はつきりと断言した。

「わたし、藤井には会ってない。どこでも」

「あたしもです。会ってません」

瑞樹が首を横に振る。事態を把握したあかりが、え、と呟き、わたしたち二人に尋ねてくる。

「じゃあ、藤井君はどこを通過してグラウンドに帰ってきたの？」

雨が渡り廊下の天井を叩く音をBGMに、わたしと瑞樹が綺麗に声を揃えた。

「わかんない」

雲に隠れる火曜日 3

4

わたしがグラウンドを出て体育館へ向かったのが四時三分。藤井が体育教官室でトレーニングルームの予約を入れたのが四時四分。

「あたしがグラウンドを出たのは、ユズ先輩が行ったちよつとあと、たぶん、二分後ぐらいです。でも、あたしがグラウンドから出たとき、まだ藤井先輩は帰ってきてませんでした」

そりゃそうだ。体育館からグラウンドまでは歩いて約二分かかる。藤井が予約を入れた一分後に瑞樹はグラウンドから出たことになるから、普通に考えて、そのときはまだどっちかのルートを歩いている途中だろう。

「なのに、どうして誰も藤井に会ってないの？」

わかりません、と言うように、瑞樹が首を傾げる。

「あたし、『裏庭ルート』では誰にも会いませんでした。……あ、正面入り口の辺りで泥を落としてる渡辺先生とすれ違いましたけど、それだけです」

正面入り口の辺りで渡辺とすれ違った、か。じゃあちようど、わたしが帰りの『部室ルート』に入ったときぐらいに瑞樹は体育館に来たんだ。わたしがもう少し遅いか、瑞樹がもう少し早ければ、体育館前で鉢合わせしてただろうな。

「『裏庭ルート』についた足跡はどうだった？ 藤井の足跡が行きと帰りの両方ついてたとか、なかった？」

「ええっと……、わかりません」

瑞樹は困ったように笑った。

「いちおう、体育館前と同じように、軒下の辺りに足跡はあったんですけど……。あの足跡、綺麗に靴底の形がわかるような足跡じゃないじゃないですか？ だから、行きの足跡なのか帰りの足跡なのか、よくわかんないんです」

「ああ、そっか」

藤井の足跡は、スパイクについた泥がちょんちょん落ちてるだけの、本当なら「足跡」と言っているのかよくわからないものだ。そんなんだから、行きの足跡か帰りの足跡かはもちろん、片道か往復かもわからない。落ちてる泥の量を見て、一回通ったのか二回通ったのかなんて、わたしたちには判断できないし。わかるのは、最低一回は『裏庭ルート』を通ったってことだけだ。

「ユズ先輩はどうでした？ 『部室ルート』に藤井先輩の足跡は残ってなかったんですか？」

「実はそれも、よくわからないのよ。『部室ルート』は人通りが多くて、アスファルトがもとと泥で汚れてるから。藤井の足跡があっても、わからないと思うわ」

「そうですか……」

歯が痛いのを堪えるような顔で、瑞樹は宙を睨む。その隣で、あかりが表情を明るくした。

「もしかして藤井君、トイレに行ってたんじゃない？ 予約を入れ

たのは四時四分だけど、そのあとすぐ体育館から出たとは限らないわけでしょ。ユズが教官室にいるときに藤井君はトイレから出て、グラウンドに帰ったんだよ」

「そのあとに『部室ルート』を通過して帰ったから、あたしに会わなかったってことですね？」

「そう。それなら、辻褄が合うんじゃない？」

難しい数学の問題が解けたときのような笑顔でそう訊いてくる。うれしそうなあかりには悪いけど、わたしはかぶりを振った。

「あかり。残念だけど、それは違うわ」

「なんで？」

「わたしが体育館に入るとき、入り口に藤井の靴がなかったの」

あのとときの玄関の様子を思いだす。靴を脱ぐところは泥で汚れてはいたけど、靴は一足もなかった。これははっきり覚えてる。

「藤井君の靴がなかったって、ユズ、靴箱をぜんぶ見回したの？」

「それはしてないけど。でも、わたしたちは、トレーニングの予約を入れたただけなのよ。わざわざ靴箱に入れなくていいやって、コンクリートのところに脱ぎっぱにしない？ わたしはそうしたけど……」

瑞樹に視線を向ける。

「あたしも脱ぎっぱにしました」

「でしょ？ わたしたちと同じ立場だったら、ほとんどの人は靴箱に入れないんじゃないかな」

そして、藤井は考えるまでもなく「靴箱に入れない」側だ。あか

りもそれはわかってるみたいで、納得したように頷いた。

「そうだね。じゃあつまり、ユズが体育館に着いたときには、藤井君はもう外に出てたってことか」

「ますます不思議ですね」

瑞樹の言うとおりでた。それじゃあ尚更、わたしは瑞樹がどこかで会ってなくちゃいけないのに。

改めて、体育館周辺の構造を思いだす。

正面入り口を出ると、右に行けば『裏庭ルート』、左に行けば『部室ルート』。すぐ正面には中庭がある。

この中庭、裏庭みたいに地面が土で花が咲いてて、ってわけじゃなくて、単なるだっ広いコンクリートの広場なんだけど、他に呼びようがないから「中庭」と呼んでいる。

そこまで考えて、ピンと来た。

「体育館から出た藤井は、中庭に誰か知り合いを見つけたんじゃない？　そこでしばらくダラダラ喋ってて、そのあいだにわたしが体育館に入る。で、わたしが外に出てくる前に藤井はその人と別れて、『部室ルート』を通過してグラウンドへ。これでどう？」

わたしは『部室ルート』を歩いているとき、注意して中庭を見てたわけじゃない。眠たくて目がしょぼしょぼして、下を向いて目頭を押さえながら歩いたりもしていた。そんなんだから、中庭に誰かがいても気づかなかっただろう。話し声は、雨音にかき消されて耳に入らなかったのだ。

我ながら、この推理にはけっこう自信があった。だけどあかりは、

さつきわたしがしたように、はっきりと首を振って否定した。

「それはないよ、ユズ」

「なんでよ？ 藤井って、なんだかんだでけっこう友だち多いから、そういうことありそうじゃない？」

「それはそうだけどさ、ちよつと考えてみてよ。あのときは、雨が降ってたんだよ」

そんなことは言われなくてもわかってる。それで話し声が聞こえなかったって思ったんだから。

わたしがそう反論する前に、あかりは人差し指で宙を指した。

「雨が降ってるときってさ、こんな風に、天井があるところで話さない？」

「あ……」

そうだ、あかりの言うとおりだ。現にいま、わたしたちだって、渡り廊下の天井で雨除けしながら喋ってる。誰だって不必要に雨に濡れたくはない。

「中庭に藤井君の友だちがいたとしても、お喋りをするんだったら、天井のあるところ——体育館の入り口の前でするはずだよ」

そんなところに藤井がいたら、わたしが気づかないわけがない。完璧に思えた推理は、あっさりと覆された。

「あつという間に、白紙ね……」

「うん。どうやったんだろうね、藤井君」

あかりと一緒に頭を抱える。こんな謎が解けたところでなにか貰

えるわけでもないんだけど、気づいてしまったからには放っておけない。わかんないままにしておくなんて、気持ち悪すぎる。

雨音に負けないぐらいの大きさに、ぱしんと手と手を合わせる音が響いた。瑞樹だ。先輩マネージャーたちの視線を受けながら、後輩は鼻息荒く言った。

「あたし、わかりました。藤井先輩が、どこを通ってグラウンドに帰ったのか」

＊

「いいですか？　まず、『裏庭ルート』の構造を思い出してみてください」

もう完全に謎が解けた気になっている瑞樹は、ドラマや小説の中の探偵のようにもったいぶって話し始めた。

「初めの半分ぐらいは庭で、あとの半分は普通にアスファルトだね」「そうですね。この庭がくせ者だったんです！」

庭にアクセントを置いて、力強く言い放った。

「庭に生えた樹が邪魔で、『裏庭ルート』は少し見通しが悪くなるんです。そのせいであたしは、藤井先輩に会ってないと思ってたんですよ」

「え？　ちょ、ちょっと待ってよ」

推理の続きが予想できて、ついストップをかける。

「つまりあれってこと？ 瑞樹は本当は藤井とすれ違ってたけど、樹が邪魔で見えなかったって言いたいわけ？」

いくらなんでも、それは無理がありすぎる。ジャングルじゃないんだから。

瑞樹は、ち、ち、ち、と人差し指を振って、

「そんなわけないじゃないですか。でも、言い方が少し悪かったですね。あたしは藤井先輩と会ってはいません。ただ、見えるはずのところにはいたんです。それが、樹が邪魔で見えなかったんですよ」

んん、こういうことだ？ 首をひねるわたしの横で、あかりが少し自信なさげに言った。

「つまり、瑞樹が裏庭を歩いているとき、藤井君はその先のアスファルトの部分にいたってこと？ 樹が邪魔で見えなかったけど、二人とも『裏庭ルート』を通ってたって言いたいのか？」

「そうです！」

満面の笑みで肯定する。わたしは間髪いれず、問題を指摘する。

「でもそれだと、瑞樹が裏庭を抜けたときに会っちゃうじゃない」「そう、そこなんですよね。問題はここからです」

いいですか、と言って、顔を近づけてくる。

「藤井先輩は『裏庭ルート』を通してグラウンドに帰るつもりだった。でも途中で引き返して、『部室ルート』から帰ったんです！」「えーっ？」

わたしとあかりが声をあげる。ちょっと声が大きくなってしまつて、近くで腹筋をしてた平野くんがこっちを見た。曖昧な笑顔を返す。

平野くんが筋トレに戻るのを見届けてから、瑞樹に向き直る。声を抑え気味にして、

「なんでそんなことを？　まさか、ただの気まぐれで、なんて言わないでしょうね？」

「当たり前じゃないですか、ユズ先輩」

いまにも、まあまあ落ち着きたまえよワトソンくん、とでも言い出しそうな調子だった。

「藤井先輩が引き返して『部室ルート』を通ったのは、単なる気まぐれとか、散歩がしたかったからとか、そういうんじゃないやしません。ニョウイを感じたからです」

一瞬、瑞希の言う『ニョウイ』がなんのことかわからなかった。頭の中でしばらく考えて、やっと『尿意』に変換される。

「藤井先輩は尿意を感じ、トイレに行きたくなった。だけど、『裏庭ルート』にはトイレがない。最寄のトイレは、体育館二階の男子トイレ。体育館に引き返すべきかと考えたとき、思ったはずですよ」

すう、っと息を吸って、一息に言った。

「体育館に入って、また靴を脱いで階段を上ってトイレに行くよりは、部室棟の隣にある公衆トイレに行ったほうがいい、と」

「あ、そうか！　そういうことね」

部室棟の隣にある公衆トイレ。確かに、わざわざ体育館のトイレに行くよりは、そっちを使うほうが手っ取り早い。あかりもしきりに頷いている。

「そうだね。私でもそうする。だから藤井君は、来た道を引き返してもう一度体育館の前を通り、『部室ルート』からグラウンドに帰ったんだね」

「そう、そういうことです。藤井先輩が『裏庭ルート』にいるときに、ユズ先輩は体育館に入ったんです。そして、あたしが裏庭を抜ける前に藤井先輩は来た道を引き返して角を曲がり、『裏庭ルート』から姿を消した。これで、すべての辻褄が合います！」

えっへん、と胸を張る瑞樹に、ぱちぱちと拍手するあかり。謎はすべて解決した、というような雰囲気だった。

だけど、わたしはなにか違和感を感じていた。なんだろう、なんか見落としてる気がする。

体育館から出るときのことを思いだす。

靴を脱ぐところは相変わらず泥で汚れてて、入り口付近も、来たときと変わらず、藤井の足跡があって……。

「あー！」

違和感の正体がわかった。突然声をあげたわたしに、あかりと瑞樹が驚いたような目を向けてくる。その視線を見返しながら、一気にまくし立てた。

「瑞樹、違う！ あのととき、藤井は正面入り口の前を通ってない！」
「え、な、なんでですか？」

「足跡よ。藤井は、汚れたままのスパイクで体育館まで来てた。だから、正面入り口のあたりは泥で汚れてた」

「それは、知ってますけど……」

「わかる？　つまり、藤井が『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』を通ったのなら、正面入り口から『部室ルート』に続く道にも、藤井の足跡が残ってなくちゃいけないのよ。でも、それはなかった」

わたしが体育館から出て『部室ルート』に向かうとき、渡辺に悪態をつかれてムカつきながらも、ちゃんと足元は見ていた。そこに藤井の足跡はなかったのだ。体育館前は、『部室ルート』と違って汚れてなかったから、藤井が通ったのならすぐにわかるはず。水で濡れてもいなかったから、渡辺が洗い落としたということもない。

絶句している瑞樹の横で、あかりがわたしを見上げて言った。

「また、ふりだしってこと？」

わたしは小さく頷いた。

「残念がらね」

雲に隠れる火曜日 4

5

各々自由に喋りすぎて疲れたから、マネージャー用のボトルで水分補給をすることにした。

「……はい、ユズ」

「ありがと」

あかりからボトルを受け取る。適度に冷えた水がさらさら喉を通っていくのが気持ちいい。飲み終わると、瑞樹に渡す。

「藤井君、いったいどうやったんだろうね？」

「さあねえ……。ってか、藤井遅くない？」

わたしたちがこうして話し始めてから、もう十分は経っている。部室に靴下を替えに行ったんなら、とっくに帰ってきてもいい時間帯だ。

「ほんとだね。どうしたんだろう？ どうやったのか訊きたいのに」

「だめ。そんなことしないで」

ほとんど条件反射で反対する。あいつに答えを尋ねるなんて、プライドが許さない。

「そう言っても、私たちじゃもう無理そうじゃない？」

「んなわけないでしょ。もうちょっと考えればぜったいわかる」

瑞樹がボトルのキャップを閉めながら、ユズ先輩ってこんなに負けず嫌いでしたっけ、とあかりに小声で訊いているのが聞こえてきた。

ええそうです。普段はあんまり表に出せないけど、筋金入りの負けず嫌いです。しかも負ける相手が藤井っていうのが一番納得いかない。これが嶋くんならむしろ話すことができてうれしいぐらいなのに。

「川口、部室の鍵貸してくれないか？」

「あかりが持つてるよ」

「あ、そうなんだ。じゃあ大原、鍵貸してくれ」

「さっき藤井君に貸したよ。たぶんまだ、部室にいるんじゃないかな」

「一樹に？　　そういえばあいつ、まだ戻ってきてないな。わかった。サンキュー、二人とも」

「うん、じゃあね……って、嶋くんッ？」

考えるのに夢中になって気づかなかった。わたしに話しかけてきたの、嶋くんじゃん！

いま気づいたように（本当にいま気づいたんだけど）名前を呼ばれた嶋くんは、そうだけど、というように振り返った。

「あ、いや、ごめん。……なんでもない」

だけど、わたしはつい、はぐらかしてしまう。こんなときに雑談の一つでもできるようになればかなり変わるはずなのに。そんなわたしの心情を知っているあかりが、背中を向けた嶋くんを呼び止めてくれた。

「ね、嶋君。ちょっと待って」

一瞬わたしを見て、目を細くする。あかりがなにを言おうとしているのか、なんとなく予想がついた。

「私たち、三人で考えてもどうしてもわからないことがあったんだ。昨日の藤井君のメアドのときみたいにな、少し考えるの手伝ってくれない？」

「ああ、いいよ。なに？」

「すごい不思議なことがあったんだよ。……ね、ユズ」
「え？ う、うん」

このタイミングでわたしにバトンを回すのか。
わたしは声が上がらないように抑えながら、嶋くんに例のできごとを説明し始めた。

「あのね、嶋くん。実はさっき……」

視界の隅で、あかりと瑞樹がにやにやしてるのが見えただけ、気にする余裕は無かった。

＊

話を聞き終えた嶋くんは、なるほどな、と言って、考えるように下を向いた。

「よかったですね、ユズ先輩」

うわ、びっくりしたあ。油断していたわたしの耳元に、瑞樹が突

然顔を寄せてきた。無邪気な一年生はにやりと笑って、こう続ける。

「これで謎が解ければすっきりしますし、嶋先輩ともいろいろ話せるじゃないですか」

「それはそうなんだけど……」

こんなことで嶋くんの練習時間を削ってしまっているのかな？

早く練習を再開したいけど、断りきれずにいやいや考えてくれてるんじゃないか——と思うと、ものすごく申し訳ない。

「ね、嶋くん」

もういいから、練習再開していいよ。

そう言おうとしたとき、嶋くんが顔を上げた。

「川口が体育館から出てきたとき、水道で渡辺先生がバケツに水を溜めてたんだよね？」

「え？ うん、そうだけど」

「そして、武田が角を曲がって体育館の正面に行くと、バケツを持った渡辺先生が掃除をしていた」

「はい、そうでした」

瑞樹とわたしは顔を見合わせる。いったいなんの確認だろう？

そんなわたしたちに、嶋くんはなんでもないことのようにさらりと言った。

「わかったよ。一樹がどこを通ってグラウンドへ帰ったのか」

「えっ？」

マネージャー三人、綺麗にハモった。

「いまのでわかったんですか、嶋先輩？」

「たぶんね。これは、一樹が野球選手だから起こったことだよ。マネージャーだったら、『裏庭ルート』で普通に武田とすれ違っていたと思う」

野球選手だから起こったこと？ 意味がまったくわからない。

混乱するわたしたちに、嶋くんは軽く手を振った。

「でも、俺も百パーセント自信があるってわけじゃないんだ。たぶん当たってると思うけど、確定ではないというか……」

「あ、そうなんですか。じゃあやっぱり、藤井先輩が帰ってきたときに訊くしかありませんね」

それしかないのか。くっそ、悔しい。心の中で舌打ちするわたしの横で、嶋くんはゆっくり首を振った。

「いや、俺の考えが正しいかどうかは、ハンドボールグラウンドに行けばわかるよ」

「え、なんでここでハンドボールグラウンドが出てくるんですか？」

「それはちょっと、話すと長くなるんだけど……」

「じゃあ嶋先輩、いまから行ってみてくださいよ！ 部室に行くつもりだったんなら、通り道じゃないですか」

嶋くんが、いいけど、と頷くと、

「じゃあさ、ユズも行ってきてよ、ハンドボールコート。嶋君と一緒に」

「え？」

どさくさに紛れて、あかりがそんなことを提案してきた。

「ああ、そうですねえ！　さすがにマネージャーが揃って離れるわけにもいきませんから、あたしとあかり先輩は残つときます。つてわけで、ユズ先輩、行つてきてくださいよ」

してやったりと言わんばかりに、瑞樹まで便乗。こいつら、連携よすぎるだろ！

「や、でも、嶋くんが……」

「ね、嶋君もいいでしょ？　ユズが一緒でも」

「俺はぜんぜんいいけど」

いいのかよ！　いや、断られたらショックだけどさ。でも、いいのかよ！

躊躇うわたしの背中をあかりが肘でさりげなく押して、嶋くんの隣に並べる。それを見守る瑞樹の顔には、なんて言うか、人をイジるとき特有のにんまり顔が張り付いていた。先輩に向かってこのヤロー。

「じゃ、行こうか」

嶋くんが歩きだす。そうなったからには、もう、ついていくしかない。後ろを振り返ると、瑞樹だけでなくあかりまであのにんまり顔を浮かべて、

「いってらっしゃーい」

と、朗らかに手を振ってくれた。

雨に濡れないように、できるだけ屋根のあるところを歩いた。だけれど、そんなに都合よく広い屋根があるわけじゃない。一人で歩くなら平気でも、二人だちょっとぎりぎりかな、ぐらいの幅が多い。

つまり、二人で歩いているわたしたちは、自然と距離が近くなってしまう。

そのせいで、わたしは嶋くんとともに話せなかった。緊張して声が出ないし、人とすれ違うたびに、いまの人がクラスメイトだったらしようと不安になったりした。早くハンドボールコートに着け、と呪文みたいに頭の中で繰り返ししていた。

なにを話すでもなく歩いて、体育館が見えてきたとき、やっと嶋くんが口を開いた。

「川口は、正面入り口を出てすぐ渡辺先生に会ったんだよね？」

「うん、そうだけど」

そっか、と言ってまた口を閉じる。嶋くんから話しかけてくれて、なんとなく気が楽になったわたしは、ずっと気になっていたことを訊いてみることにした。

「ねえ、嶋くん。どうしてハンドボールコートに行けばわかるの？ 教えられる範囲でいいから教えてくれない？」

「ああ、いいよ。さっき川口たちの推理を聞かせてもらったけど、たぶん武田は、かなり惜しいところまでいったんだと思う」

瑞樹が？ 確かにわたしたち三人の中では一番納得いく推理だっ

たと思うけど、それでも矛盾点があったはずだ。

いまは口を挟まず、黙って嶋くんの話聞くことにする。

「武田の考えたとおり、一樹は最初『裏庭ルート』に来て、途中で来た道を引き返して、『部室ルート』からグラウンドに帰った。でもそれは、トイレに行きたかったからじゃない。『裏庭ルート』の途中で渡辺先生に会ったからだよ」

「渡辺先生に？」

「そう、渡辺先生に」

ちよっただけ得意げに笑って、嶋くんは話を続けた。

「渡辺先生って、裏庭を管理してるだろ？ だから、裏庭の方へ歩いていく一樹を呼び止めたんだよ。普通のスニーカーならまだしも、あるとき一樹はスパイクを履いていた。そんなもので庭を通られたら、せっかく手入れした土が荒れてしまうから」

そっか。確かにあの渡辺が、スパイクで裏庭を通ろうとするやつを見過ごすはずがない。呼び止めてなんやかんやと文句をつけるのが目に見えている。

「じゃあ、藤井は渡辺にいちやもんつけられて、仕方なく『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』から帰ったってこと？」

「ああ、そうだよ」

いかにもありそうな話だ。正面入り口の前でわたしを見たとき、まったく野球部は、と苦々しげに吐き捨てたのも、直前に藤井を見たから出た言葉だったと思えば納得できる。

でもまだ、大きな謎が残ってる。中庭を歩きながら、わたしはその疑問を嶋くんにぶつけた。

「でも、嶋くん。それだと、足跡はどうなるの？ 藤井が『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』へ行っただんなら、その通り道に足跡みたいに泥が付いてるはずじゃない。でも、それはなかったのよ」

「それにもちゃんと理由があるよ。裏庭を通るなど注意された一樹は、体育館の方へ引き返した。だけど渡辺先生は、体育館の入り口を泥で汚されるのも嫌だった。だから、体育館前を汚さないように通れって言ったんだ。で、川口だったら、そう言われたらどうする？」

ふざけんじゃねえクソジジイ、って言って、無視してそのまま帰る。

なんて言えるはずもなく、とりあえず無難だと思われる答えを返した。

「ごめんなさいって謝って、どこかでスパイクの泥を落としますって言うかな」

「たぶん一樹も、そう答えたんだと思う。で、考えてみてほしいんだけど、『裏庭ルート』でスパイクの泥を落とせそうところってある？」

えーっと、アスファルトの上に落とすのはさすがに非常識だから、それ以外の場所。ってことは、裏庭しかないな。

……………いや、待てよ。

裏庭の立て看板を思いだす。あれには、他の場所から持ってきた土を混ぜないでくださいと書いてあったはずだ。スパイクにはグラウンドの土がついている。裏庭に泥は落とせない！

「どこにもないわ。『裏庭ルート』には、スパイクの泥を落とせる

ところはない……」

「そう。渡辺先生がいるから、看板を無視して裏庭に泥を落とすことはできない。そうなるともう、泥を付けずに体育館前を通る方法は一つしかない」

わかった？　　と言うように、嶋くんがこっちを向く。わたしは小さく頷いた。

「スパイクを脱いで体育館前を通ったってことね」

中庭を通ることもできるけど、それだと雨に当たってしまう。靴下は濡れちゃうけど、屋根のある道を行ったほうがいいと判断するのが普通だ。

いま思えば、藤井が、水虫になりそうで気持ち悪いと靴下を替えに行ったのも、このとき濡らしてしまったからなんだ。よく考えると、スパイクを履いたままだと水虫になりそうなほど――つまり、指先までは濡れない。穴の空いたスパイクならともかく、藤井のは新調したばかりだったんだし。

「野球選手だから起こったこと、っていうのは、スパイクを履いたからね？　スニーカーなら、渡辺に注意されることもなく裏庭を通れたし」

「うん、そういうこと」

前方にハンドボールグラウンドが見えてきた。嶋くんはそれを指差し、

「たぶんだけど、一樹は体育館の前を通ったあと、ハンドボールグラウンドでスパイクの土を落としたと思うんだ。グラウンドに帰っ

てきたとき、スパイクに泥はついてなかったから」

＊

藤井がスパイクを叩いて泥を落とした跡は、一瞬で見つかった。グラウンドの端っこ——体育館から一番近いところに、茶色い泥の中に混じって黒土があった。裏庭を通ったせいで、靴底に黒土が付いていたのだ。この色は、ハンドボールグラウンドにはまずありえない。

「すごいね、嶋くん」

ハンドボールグラウンドから離れて、体育館の側面の軒下で雨宿りをしつつ、わたしは言った。

「ラッキーだったんだよ。俺、一年のときは渡辺先生が体育の担当だったから、どんな人なのかよく知ってたし」

「そんなことないよ」

嶋くんの言葉を首を振って否定する。わたしだって渡辺がどんなやつか知ってたけど、ぜんぜん気づかなかった。あかりも瑞樹もだ。わたしたちが三人揃って考えてもわからなかったことを、嶋くんはあっさり解いてみせた。これは胸を張ってもいいことだ。

「わたし、嶋くんの推理を聞いてるとき、純粹に、すごいなって思ってたんだから。こう、謎がするする解けていく感じがして」
「サンキュ。なんか、そこまで言われると照れるな」

本当に照れくさそうに笑って、頬をかく。そんな嶋くんの姿に、わたしは思わず、口を滑らせてしまった。

「それに、すごく、かつ」

ここまで言って、あとの言葉は条件反射で飲み込んだ。すぐにかっこよかった。

そんな大胆な言葉、言えるはずない。一片の嘘もない本音だけど、恥ずかしすぎて言えない。

「か？」

嶋くんが不思議そうな顔で聞き返してくる。

どうしよう、なんて言ってごまかそう。俯いて、必死にそんなことを考える。だけどだんだん、無理に取り繕う必要はないのかな、なんて思えてきた。これはわたしの本音なんだから。それに、嶋くんはきつと、そんなことを言われても不快に思う人じゃない。

「あのね、嶋くん！」

意を決して顔を上げ、嶋くんの瞳を真っ直ぐ見据える。嶋くんは一瞬、びっくりしたような表情になったけど、視線をそらさず、わたしと目を合わせてくれた。ぴりっとした、だけどどこか暖かい雰囲気の中で、わたしは続く言葉を言い切った。

「わたし、嶋くんのこと、すごく、かつ」

「あつれえー、良次に川口じゃねえか！ なにしてんだよ、こんなところで」

——はずだったのに、後半の言葉は、無駄にでかいその声によっ

て完全にさえぎられた。

「一樹！ いままでなにしてたんだ？」

「予備の靴下どこに置いたのかわかんなくて、ずっと探してたんだよ。こっそり平野の筆箱の中に入れといたの忘れててさあ。で、お前らはなにしてたんだ？」

無遠慮にずかずかとわたしたちのほうに歩いてきて、藤井はそんなことを尋ねた。嶋くんは少し困ったように、あ、いや、と口ごもり、

「そういえば、川口。ごめん、最後のほう聞こえなかったんだけど、なんて言った？」

「あ、それはさ、あれだよ。あの……」

わたしの口は、勝手に動いて言葉を発した。

「すつごく、感動したって言ったの！ 嶋くんの推理がどんどんつながっていくのが、感動したって！」

「なんだ、そういうことか」

わざわざかしこまって言わなくてもいいのに、というような笑顔。そしてすぐ、藤井に向き直る。

「部室の鍵貸してくれ。バッテリーの本取りに行きたいんだ」

「ああ、ほら」

鍵を受け取ると、サンキュ、と言って、嶋くんはそのまま部室に歩いていった。

わたしはその背中を、なんとも言えない気分で見送った。さつき

までのいい雰囲気はどこに？

「あれ？ で、なんで川口まで一緒にいたんだ？」

藤井はいまさらそんなことを訊いてくる。答える気はさらさらない。わたしは空気の読めないチビを置き去り、そのまま練習場所に向けて歩きだした。

「あ、おい川口！ おれを置いてくなよー」

「……うつせえよ、アホ」

「あれ？ いま、おれのことアホつつた？ うわー、やっぱりお前、ほんとは口悪いいなあ」

あー、うつせえうつせえ。テメエがイラつかせるからこうなんだろうが。

後ろでギャーギャー騒いでるうざいのを放っておいて、わたしはそのまま、早歩きであかりたちの元へ帰っていった。

顔に傷つく水曜日 1

1

朝、駅に向かって歩いていく途中、植え込みに咲く花が目についた。花びらが六枚の白い花だった。

純粹一途に恋する乙女ことわたし、川口柚香は、歩道にしゃがんでその花をそっと手に取った。

もちろん、花占いをするためだ。同じ野球部の彼——嶋良次くん
に片思い中のわたしとしては、根拠のない占いでもいいから、とりあえずなにかに励まされたいのだ。

息を止めて、そっと一枚目の花びらに手を伸ばす。嶋くんはわたしのことが……

「好き」

ぷちっ、と花びらをちぎる。続いて、二枚目の花びら。嶋くんはわたしのことが……

「大好きっ」

花びらをちぎる。三枚目に手を伸ばす。嶋くんはわたしのことが……

「この世界中の誰よりも大好き！」

ちぎる。

そんな感じで花占いを繰り返し、最終的に、嶋くんは家に帰るとわたしに会いたくて会いたくて震えるという結果になった。非常に

よろしい。

朝からこんなステキな占い結果が出て、今日はいいい日になりそうだな。わたしは上機嫌に鼻歌を唄いながら、駅に向かった。

——その予感とは程遠い一日になるとも知らず。

2

昼休み、お弁当を食べ終えたあと。

わたしは英語の予習をし、あかりはプロ野球の選手名鑑を読んでいた。隣の席に座ってはいるけど、それぞれ自分のことに集中していて特に会話は交わしていない。教室内もなんだか静かで、一言で言えば、穏やかな午後のひとときだった。

そんな静寂を破ったのは、わたしから見て斜め前の席から聞こえてきた、

「あっ！」

という声だった。それに続いて、かしゅん、となにかが床に落ちる音。

なんだろう、とわたしは教科書から顔を上げた。声を上げたのはクラスメイトの佐藤夕子^{さとう ゆうこ}さんだった。左手の人差し指を押さえている。机には乱暴に開けられたスナック菓子の袋が置かれていた。

「どうしたの、佐藤さん？」

なんとなくただごとではなさそうな雰囲気だったので、あかりと一緒に席を立てて佐藤さんに近寄る。そしたら、ぎょっとした。佐藤さんが押さえている指から血が流れていた。それも、けっこうな量が。

「大丈夫ッ？　とりあえずこれ、使って」

ポケットからハンカチを取り出す。佐藤さんは、ありがと、言
ってハンカチで人差し指をくるんだ。黄色の生地に、じわじわと赤
が染み込んでいく。

「どうしたの、それ？」

「ちょっとミスっちゃって。お菓子の袋がなかなか開かなくてイラ
イラしたから、筆箱に入ってるカッターで開けようとしたら、強く
切りすぎちゃって。指まで切っちゃった」

どんだけ力強く切ったんだよ。

あかりが屈んで、机の下に落ちていたカッターを取る。さっきの
音は、これが床に落ちた音だったのだ。

あかりは出血が続く佐藤さんの人差し指を見て、心配そうに眉を
寄せた。

「保健室に行って、手当てもらったほうがいいね」

＊

公星高校の校門をくぐると、目の前には大きな建物が三棟、川の
字に並んでいる。左から、教室棟、特別教室棟、理科室棟だ。三つ
の棟を過ぎるとコンクリートの広場、通称中庭が広がっていて、そ
の先には体育館がある。

保健室があるのは理科室棟の一階。わたしたち二年四組の教室は
教室棟の三階にあるから、まあまあ遠い道のりだ。

「えー！　じゃあヨシノリ、自分ひとりでお菓子食べるために、彼氏とお喋りするの切り上げたの？」

「ちよっとお、そんな大きい声で言わないでよ」

教室棟の正面玄関を出て理科室棟へ向かう途中、あかりと佐藤さんがそんな会話をしていた。

ちなみに佐藤さん、自己紹介のときに「好物はヤクルトです」と言っていて以来、あかりから「ヨシノリ」と呼ばれている。休み時間に一緒に喋ってるのもよく見るし、けっこう二人の仲はいい。

対してわたしは、佐藤さんとそこまで話したことはない。もちろん、朝教室で会えば笑顔で挨拶はするし、なにか話をされれば愛想よく受け答えるけど、必要以上に話しかけることはない。もつともそれは、他のクラスメイトにも言えることだけど。例外はあかりぐらいだ。

「あのお菓子、なかなか売っていないレア物でさあ。今朝寄ったコンビニでやつと見つけたんだよね。誰にも邪魔されずに一人で食べようと思ってたのに……」

「天罰だね、天罰」

けらけらと笑うあかりに、佐藤さんがメンチを切る。この二人のノリはいつもこんな感じだ。

「彼氏よりお菓子を優先する女子高生っていない？　ねえ、ユズ？」

「そうねえ。わたしだったら、一緒に食べるかな」

口に出した瞬間、しまったと思った。予想通り、佐藤さんは驚いたように、

「え、なに、川口ちゃん、彼氏いんのッ？」

ものすごい喰いつきっぷり。こんな言い方をしたら当たり前だ。蟬の鳴き声をバックに、わたしはやんわり首を振った。

「ごめん。もしいたらの話よ。いないわ、彼氏なんて」

「へえー、意外。川口ちゃん、男子に人気あるのに」

ふふん。知ってる知ってる。

「そんなことないよ。わたし、あんまり男の子と話さないし」

「あー。まあ、川口ちゃんはお淑やかだもんね。たぶん男子からしたら、高嶺の花なんじゃないかなー」

高嶺の花。なんていい響きだろう。わたしぐらいの美少女になら、当然与えられるべきポジションよね。

特別教室棟の前を通る。校門のすぐ右に売店があるおかげで、辺りにはパンやジュースを持った生徒がたくさん歩いている。

「あ、そうだ。そういえばさ」

佐藤さんは何かを思いだしたように、好奇心で輝く瞳をわたしに向けた。

「川口ちゃんって、六組の嶋良次のこと好きなの？」
「え？」

自分でもびっくりするぐらい間抜けな声が出た。次いで、あかりに目をやる。なにも喋ってないよ、というふうに首を振った。

「あの、佐藤さん。なんでそう思ったの？」

「一昨日の昼休みさ、なんか野球部の会議みたいなことしてたじゃん？ 教室で」

藤井のメアド騒動のことだ。佐藤さんは、あれを野球部の話し合いだと解釈したらしい。

「そのとき、嶋良次もいたでしょ？ で、川口ちゃんの様子が、ないんかいつもと違って見えたんだよね。妙に緊張してるっていうかさ。こりゃおかしいぞと思って」

「そうなんだ。意外とみんな、見てるのね」

「うん。……まあ、嶋良次ってけっこう目立つし」

なんとなく含みのある言い方。意味はわかる。

ミーハーな女子高生にとって、野球部のキャプテンというブランドはかなり大きい。最近になって急に、教室の隅で交わされる「カッコいい男子会議」で嶋くんの名前が挙がるようになったのは知っていた。

「アタシ以外にも、同じこと思った人はいるみたいだよ。いまちょっとした噂になってんだ」

「噂……」

それはぜんぜん知らなかった。あかりも同じなようで、知り合いがテレビに出演したことを聞かされたような表情をしている。

——でもこれって、よく考えたらチャンスじゃない？

生ぬるい風ではためく髪を耳にかけながら、わたしは考えをめぐらせる。

キャプテンになった途端、嶋くんにキャーキャーするミーハー層でも、相手がわたしとなれば敵いっこないと身を引くはず。前々から、あっちの人たちには黙っていてほしいと思っていたのだ。牽制するには絶好の機会じゃないか。

わたしは笑顔を作り、大きく頷いた。

「その通りよ。わたし、嶋くんのことが前から好きなの」

「おお、やっぱり！ マネージャーとキャプテンの恋って、素敵じゃん。アタシ、影ながら応援してるよ」

出血してないほうの手で握りこぶしを作る。小さいとはいえ、いちおう怪我をしてるってことを忘れさせるような元気さだ。

理科室棟に着く。中に入ると、冷房のおかげでだいぶ涼しかった。一番奥にある保健室目指して廊下を歩きながら、佐藤さんは楽しそうに、

「ってか川口ちゃん、もう告っちゃったら？」

「ヨシノリ、気が早すぎだよ……」

あかりが呆れたようにため息をついた。

「野球部は部内恋愛禁止なんだから、すぐには告白なんてできないよ」

あれ、ちょっと、あかりさん？　せっかく牽制しようとしたのに、それ言っちゃうと意味ないじゃん。

佐藤さんは目を大きく見開き、

「えー、もったいない！　川口ちゃんなら、ぜったい即オッケーもらえるのに」

変な嫌味や皮肉は微塵も感じられない口調だった。うれしい気持ちを隠して、胸の前で手を横に振る。

「そんなことないよ。わたし、不安でいっぱいだもん」

「大丈夫だって。そりゃ、嶋良次ってちょっと硬派っぽいけど、川口ちゃんならいけるよ」

ふふふ。いいぞいいぞ。もっと言えもっと言え。

「そうかなあ？」

「そうだよ。だって川口ちゃんぐらい可愛い子って滅多にいないもん」

それまで佐藤さんのナチュラルな褒め言葉に舞い上がっていたわたしは、いまの言葉で一気に現実に取り戻された。

わたしが可愛いことは、わたし自身が一番よくわかってる。家に帰ると毎日、再現率バツグン、天然素材百パーセントの姿見で全身チェックしてるんだから。顔も可愛いし、スタイルだっていい。肌だって綺麗だ。

でも、だからこそ。

「……わたしの場合、顔は武器にならない」

意図せず、思ったことがぼろりと口から出てしまった。佐藤さんはもちろん、あかりまで目を丸くする。

「いや、川口ちゃん、そんなことないよ。嫌味とかじゃなくてさ。めっちゃくちゃ可愛いから」

「そうだよ。ユズがそんなこと言うなんて、珍しい」

「ごめん。あの、そういうことじゃないの」

わたしは早口に弁解した。

「嶋くんって、内面を重視する人だと思うの。だから、外見なんて関係ないだろうなーって」

「いやー、でも、男だし。顔は大事だよ。川口ちゃん可愛いんだから、自信持って」

「あ、ありがとう」

ごめんね。自信は大いに持ってるよ。

気がつくと、保健室はもうすぐ近くだった。階段を過ぎればすぐそこだ。

「ヨシノリ、もう血は止まった？」

「うん、いちおう」

あかりと佐藤さんの声にまぎれて、誰かが階段を下りてくる足音が聞こえた。なんとはなしに目を向けてみる。

その途端、背筋がひやりとした。

二階から、一人の男子生徒が下りてきた。中肉中背で、髪は長くも短くもない。銀色のフレームの眼鏡をかけていて、目はちよつと釣り目気味。間違いない。

熊代^{くましろ}くん^{たかやす}だ。この学校で唯一、わたしと同じ中学から来ている、熊代隆康^{たかやす}くん^{たかやす}だ。

なんで彼がここに？

「どうしたの、ユズ？」

あかりに軽く背中を叩かれた。それでやっと我に帰る。なんでもクソもない。理科室棟に生徒がいるのは当たり前じゃないか。

「ごめんあかり、なんでもない」

熊代くんはそのまま保健室とは逆方向に歩いていった。すれ違うとき会釈ぐらいはされるかもしれないと思ったけど、特にそういうことはなかった。当然か。わたしたちは同じ中学だったけど、話したことは一度もないんだから。

なんとか気持ちを落ち着けて、あかりたちと保健室へ。白いスライドドアは綺麗に閉められていた。失礼しまーす、とお決まりのセリフを言って、ドアを開ける。

「あれ、尾花先生おばなじゃないですか」

室内を見たあかりが、驚いたように声を出した。

養護教諭の真弓先生まゆみと一緒に中央の長椅子に腰掛けていたのは、社会教師の尾花先生だった。少しぽっちゃりしてるのが可愛いと、生徒から人気のある三十代半ばの男教師だ。どうやら、二人で話をしていたらしい。生徒の姿は見えない。

尾花先生はちよんちよんとこめかみを人差し指で突いた。

「ちょっと頭痛がしてね。薬を貰いに来て、そのあと少し話を」

ふーん。……ま、そんなこともあるのかもしれないけど。

それじゃあ僕はこれで、と挨拶して、尾花先生は保健室から出て行った。スライドドアが閉まる音を合図にしたように、

「あなたたちは、どうしたの？」

先週まではかけていなかった縁なし眼鏡を押し上げて、真弓先生がそう訊いてきた。歳は二十代の後半。どういうわけかだいぶ日焼けしていて、それをごまかすためか、いつもより濃い化粧をしている。ちなみに、『真弓』というのは苗字だ。下の名前は知らない。佐藤さんが前に出て、怪我した指を見せる。

「カッターで指切っちゃったんです。出血はいちおう止まったんですけど」

真弓先生は、そこまで近づく必要ある？　と思うぐらい顔を近づけて傷口を見た。

「そこまで深くないわ。消毒して絆創膏を貼れば大丈夫」

ちょっと待ってて、と言いついて残して、キャスター付きの戸棚のほうに歩いて行く。たぶん、薬箱を出すつもりなんだろう。立ちっぱなしもあれなので、わたしたちは保健室の中央にある長椅子に腰掛けた。

部屋の右側にはカーテン付きのベッドが三つ並べてあって、中央には机と長椅子。左側には薬品の入った戸棚とミニ冷蔵庫、奥のほうには裏口とトイレがある。室内にトイレが備えついているのはちよつと珍しいかもしれないけど、それ以外は特に変わらない普通の保健室だ。

「てかさ、ありがとね、二人とも。特に川口ちゃん」

佐藤さんが申し訳なさそうにハンカチをわたしに見せる。

「ハンカチ貸してくれたのに、こんな血だらけにしちゃったし。洗

つても落ちなかったら弁償する」

「そんなことしなくて大丈夫よ。同じものが家にあるし」

「マジで？ 川口ちゃんて、ほんといい子だよね」

あかりがにやっと笑って、肘で突いてくる。なによ、その冷やかすような顔は。

薬箱を取ってきた真弓先生が、わたしたちとはテーブルを挟んで反対側の椅子に座った。

「ちょっと染みるだろうけど、我慢してね」

取り出したガーゼに消毒液を垂らす。それを見た佐藤さんが、う、と微かに声をもらした。気持ちわかる。あんなに大量の消毒液を染みこませたガーゼがいまから自分の傷口に当てられるなんて、想像するだけで痛い。

「さ、手を出して。すぐに終わるから」

「は、はい」

佐藤さんがちょっと震える声で返事し、人差し指を差し出す。真弓先生は眼鏡を押し上げて、ゆっくりとガーゼを近づけていく。

「あー、あだだだ！ あいたた痛い痛いッ！！」

保健室に佐藤さんの悲鳴が響き渡る。が、頑張れ、佐藤さん！ 負けるな、佐藤さん！

「……はい、消毒終わり。ごめんね、痛かったでしょう？」

「いえ、ぜんぜんデスヨ」

「ヨシノリ。無理あるから、それ」

真弓先生は絆創膏を取り出すと、佐藤さんの指に鼻が付きそうになるぐらい顔を近づけて、慎重に貼っていった。

「オッケー。しばらくしたら治るわ」

やっと絆創膏を張り終えた真弓先生が顔を上げる。漫画なら、きらっと輝く汗が一筋頬を伝いそうぐらいいい表情をしていた。最後に、絆創膏を貼り直すときは傷口を充分に乾かしてから貼ること、などの軽い注意事項を聞いて、わたしたちは立ち上がった。

「それじゃあ、真弓先生。どうもありがとうございました」

三人で会釈する。真弓先生も笑顔で手を振ってくれた。外に出ようと、スライドドアに手をかけたとき……。

がちやりと音を立てて、ドアが開いた。わたしたちの正面にあるスライドドアが、ではない。奥にある裏口のドアだ。

「ごめんユキエ、遅くなっちゃった。でもちゃんと買ってきたから」

ショートカットの女の人が、駅ビル内の百貨店のビニール袋を提げてやってきた。歳は大体、真弓先生と同じぐらいに見える。ユキエっていうのは真弓先生のことだろうけど、この人いったい誰？

「ほんとありがとうね、エリ。大変だったでしょ？」

「そりゃもう。暑いだけならまだしも……」

真弓先生と謎の女の人の会話を聞いていたわたしの背中を、あかりがとんと叩く。

「どうしたのユズ？ 行こ」

「ああ、うん。ごめん」

保健室を出て廊下を歩く途中、あかりに小声で訊く。

「ね。さっきの人誰だっけ。なんか、真弓先生とすごい親しそうだったけど」

「え、^{はら}原先生のこと？ カウンセラーの先生だよ。特別棟の二階にあるでしょ、カウンセラー室」

あかりはまじまじとわたしの顔を見て、

「つか、先週の保健体育の授業で来てたじゃん。渡辺先生の手伝いで」

「……えーっと、そうだったの？」

「そうだよ。もう忘れたの？」

「あはは。……うん」

ちゃんと人の顔は覚えなよー、とあかりがため息をつく。なにも返せる言葉がないので、笑って受け入れた。

「ま、原先生、普段は眼鏡かけてるのに今日はかけてなかったもんね。それで印象変わってて、わかんなかったんじゃない？ ところでさ……」

廊下を歩きながら、佐藤さんはどことなく照れくさそうな顔をわたしに向けた。

「アタシ、人のこと苗字で呼ぶの苦手なんだ。柚香って呼んでいい？」

わたしは笑顔で頷いた。

「もちろん。でも、柚香じゃなくてユズでいいよ。そっちのほうが短くて呼びやすいでしょ？」

「まじで？ やったね！」

うれしさをぶつけるように、佐藤さんは体当たりで入り口のドアを開ける。その強さたるや、半ばタックルの領域。怪我の原因といい、佐藤さん、力加減するの苦手？

「アタシのこと夕子でいいから。――じゃ、アタシ先に教室行くね！ お菓子パーティーしようよ。準備してるから！」

そう言って、理科室棟を出ると、佐藤さん改め夕子ちゃんは全力ダッシュで教室棟へ向かっていった。わたしはその後ろ姿を見て、思わず笑ってしまった。

「なに？ お菓子パーティーって、さっきのあのお菓子だけでやるの？」

「まあ、ヨシノリはけっこう、ノリに任せる人だから。……でも、よかった」

わたしを見上げて、あかりは口許を緩める。

「ユズって意外と人見知りじゃん？ だから、ヨシノリに嶋くんの話したの、なんかうれしかったよ」

「あ、ああ。まあね」

「うん。ヨシノリもさ、ユズと仲良くなりたいなーって前から言ってたんだ。それでさっきもあんなによろこんでたんだと思う。これ

からもっと話してさ、友だちになりなよ!」

顔をくしゃっとさせて、満面の笑顔。屈託のない笑みという言葉がこれ以上似合う表情はない。

あかりは、どうしてわたしが嶋くんのことを打ち明けたのか気づいていないのだ。人見知りの友だちがクラスメイトに心を開いたんだと解釈して、素直によるこんでくれている。まさか、周りの同級生を牽制するためだとは、夢にも思っていない。

「……うん、頑張るわ」

わたしはそう返しながら、心の中で小さくため息をついた。

顔に傷つく水曜日 2

3

昼休みの時点でわたしの精神状態はあまりいいものじゃなかったけど、本当の悲劇は部活中に訪れた。

日が落ち始めてきた六時十五分ごろ、選手の間みんなは自主練をしていた。六時半からベースランニングが始まるから、それまで余った時間は各自好きなトレーニングを、ということだ。

わたしたちマネージャー陣はバックネット裏のベンチに座って、ほつれたボールを縫ったりスコアブックのデータをまとめたりしていたけど、それらの作業はあまりはかどっていなかった。なぜなら……。

「なんで今日、こんなに気持ち悪い暑さなんですかねえ？」

ひぐらしの大合唱が響く中、瑞樹が心の底からうんざりしたようにそう吐き出す。わたしとあかりは緩慢な動作で首を縦に振った。

日が落ちてきて直射日光が弱くなったぶん、かえって身体に張り付いてくるねっとりした蒸し暑さが強調されている。断つても断つてもデートに誘ってくる勘違い男みたいな不愉快さだ。こんな中で作業に集中できるわけがない。

「せめてもうちょっと爽やかな空気になってほしいよね……」

ぼんやりした顔でボールを縫いながら、あかりが愚痴をこぼす。

「反則ですよ。せっかくお団子にしたのに、空気自体がもあつとしてたら意味ないですよ」

我慢できない、と言うように瑞樹が頭を振る。言うとおりに、今日の瑞樹はお団子ヘアだった。頭に血が上りやすいせいで髪の高い位置で結べないわたしからしたら、羨ましいヘアースタイルだ。

「あたしたちでこれだから、動いてる選手たちはもっとキツイでしょうね」

「そうよね。熱中症にならないといいけど……」

言いながら、わたしはライト側のファールゾーンに目を向ける。そこに設置されたネットに、嶋くんがボールを投げ込んでいた。

さっきやった試合形式ノックでは、ランナーが盗塁する場面もあったけど、嶋くんはきっちりセカンドベースでランナーを刺していた。昨日は送球が荒れていたらしいけど、すぐに修正できるのがすごい。いまボールを投げ込んでいるのも、調子のいいときのスローイングを忘れないためだろう。ほんと、どこまでも真面目で努力家だ。

暑さに負けかけていたけど、そんな嶋くんを見ているとわたしも頑張らなくちゃという気になってきた。グラウンドには水の入ったボトルがいくつか置かれている。そろそろ水が無くなるころだから補充しよう。わたしはスコアブックを閉じ、立ち上がった。

「ボトル回収してくる。……あ、いいよ瑞樹。休んでて」

あたしがやりますよと立ち上がりかけた後輩を制する。いつも率先して雑用をやってくれる一年生に甘えっぱなしじゃ申し訳ない。……それに、嶋くんの近くにもボトルがあるから、回収ついでに軽く話ができるかもしれないし。

一つ二つとボトルを回収し、三つ目、嶋くんの近くにあるボトルに近づく。ゆっくりと腰を落としてボトルを拾いながら、ボールを投げる嶋くんを見る。手拔きの「て」の字も感じられない真面目な表情。かっこいいなあ、もう。その奥に藤井さえ見えなければ、写真に撮って部屋に飾りたいぐらいなんだけど。

嶋くんが一息ついたのを逃さず、わたしは声をかけた。

「嶋くん、頑張ってね」

「ん？ ああ、ありがと」

会話終了。またボールを投げ始める。……まあ、練習中はこんなもんよね。

さっさと次のボトルを回収しよう、と嶋くんは背を向ける。さあ、次は……。

「危ねえ、川口ッ！」

後ろからそんな声が聞こえてきた。なんだろう、と振り返った瞬間――。

左頬に衝撃が走った。絶えられず、顔がのけぞる。手に持っていたボトルがぜんぶ地面に落ちる。頬を手で押さえたままふらふらと後ろに何歩か後退して、わたしはグラウンドにうずくまった。左頬の衝撃が徐々に痛みに変わっていき、それに伴って熱を帯びていく。

頬にボールが当たったんだ。わたしはやっと、それを理解した。わかった途端に痛みが三倍ぐらい増した気がする。目からは涙が溢れてきた。

「ユズ！ 大丈夫？」

あかりの声が聞こえてきた。次いで、背中をさすられる感触。

「大丈夫っ？ 息はできてる？」

小さく頷く。

「そっか。よかった」

ほっとしたように言う。ぜんぜんよくない。すごい痛い。顔の骨折れてるかもしれない。

周りに人が集まってくるのが足音でわかる。ひそひそと交わされる会話に混じって、よく通る声が聞こえてきた。

「大原、保健室に連れていってくれ。俺もあとで行くから」

野村先生だ。あかりはわたしの肩に手を回した。

「歩ける？ 一緒に保健室、行こ」

なんとか立ち上がって、あかりに支えられて歩く。グラウンドから出る直前、

「あかり先輩。これ」

と、瑞樹が氷の入った袋を渡してきた。あかりはそれを受け取り、わたしの左頬に当てる。キンキンに冷えているはずなのに、痛みや痺れのほうが圧倒的に強くて、あまり冷たさが感じられなかった。

「ありがとね、瑞樹。それから、ごめんね。あとよろしく」

「任せてください。ユズ先輩、あたしもあとで行きますから」

気遣ってくれる瑞樹に、わたしは小さく頷くのが精一杯だった。

＊

「……うん、骨には異常ないと思うわ。腫れもそんなにひどくないし」

長椅子に座るわたしの顔をしばらく観察して、真弓先生はそう結論を出した。

「左耳が聞こえ辛いとか、そういうこともないのよね？」
「はい。それは大丈夫です」

左頬に氷袋を当てたまま、わたしは答えた。
時刻は六時半を少し過ぎたころ。保健室内にいるのはわたしたちだけ。

ボールが当たった直後に比べて、痛みはだいぶ和らいできた。それにしたがって、徐々に気持ちも落ち着いてきた。

「嶋君に感謝しないとね、ユズ」

隣に座るあかりがほっとしたような笑顔で言った。

「平野君とキャッチボールしてた藤井君が暴投して、それがユズに当たったんだけど、その直前に嶋君が手で弾いて勢いを殺してたんだよ。そのまま当たってたら本当に骨が危なかったかも。けっこう強い送球だったから」

「そうだったんだ……」

嶋くん、わたしのためにそんなことを。うれしい、と思う気持ち半分、藤井のヤローはいったいどれだけわたしに危害を加えれば気が済むんだあんチクショウと憤る気持ち半分。手放しに喜べないし、怒れもしない感じだった。

「大丈夫だとは思うけど、数日たっても痛みが引かないときは病院に行ってみて。領収書があればお金は学校から下りるから」

「はい。どうもすみません」

「もう少ししたら、湿布を貼りましょうね」

そう笑って、真弓先生は立ち上がって冷蔵庫の方へ向かった。訊くならいまいかない。わたしは顔から氷袋を離し、あかりに向き直った。

「あかり。わたしの顔、どうなってる？ 痣とかできてない？」

あはは、とあかりは笑った。……どう見ても、言い難いことをごまかすときの笑い方で。

「……うん、できてる」

わたしはがっくりと肩を落とした。

「あ、でも、アレだよ？ 腫れはあんまりひどくないんだよ」

なによそれ。つまり、痣はけっこうひどいってことじゃない。

「心配しなくても、一週間もたてば内出血は治まるわ。それまでは湿布で隠すことね」

真弓先生が、お茶の入ったコップをわたしたちの前に置く。あたりは、どうもありがとうございます、とお礼を言っていたけど、わたしはそんなことをする余裕がなかった。

一週間も、顔に痣が。わたしの、誰もがうらやむこの顔に、痣が。シヨックで気絶しそうだった。しかも、それを隠すために顔に湿布を貼ってなきゃならないなんて。わたしの美貌が台無しじゃない。

「でも、あなたたち野球部だったのね。お昼に来たときも、日焼けしてるなとは思ってたけど」

わたしたちの反対側の椅子に座って、真弓先生は言った。

ちなみに、わたしの名誉のために言っておくけど、わたしはそこまで日焼けしていない。通販で定期購入している高価な日焼け止めを休憩時間ごとに塗り替えてるし、そもそも太陽に当たる機会が他の部員よりは少ないから。一見して外の部活をやっているなとわかるのはあかりのほうだ。

「私も今年、姪っ子が野球部に入ったのよ。まだ小学生なんだけどね」

「へえ、女の子で野球部って珍しいですね。私は昔から野球好きでしたけど、自分でやろうって思ったことないですよ」

「まあ、その子は男勝りだからね。漢字の一に姫かづきって書いて『一姫』っていうんだけど、もう、名前とは真逆のおてんば娘になっちゃって。このあいだの日曜に初めて試合の応援に行ったんだけど、あんなに暑い中でよく動けるなと思ったわ」

「もう慣れちゃいましたよ。ね、ユズ？」

首を縦に動かす。

「そうなの？　すごいわねえ。私なんか、一試合観ただけなのにあ

っという間に日焼けしちゃって。普段日に焼ける機会がないから、余計参っちゃったわ」

「あー、あんまり日に当たることがないならきついですよ。私は中学でもマネージャーしてたんですけど、最初の頃は大変でした。汗もすごかったんじゃないですか？」

「そうなのよ。まあ、汗は最初から覚悟してたから、化粧もしないですっぴんで行ったんだけどね。ここまで焼けるとは思わなくて」

思わぬ盛り上がりを見せるあかりと真弓先生の隣で、わたしは会話に参加することもせずぼんやりしていた。

一週間、顔に、痣。一週間、顔に、湿布。

その事実がわたしのテンションを絶賛ガタ落とし中だった。すぐには立ち直れそうもない。

雑談に勤しむ養護教諭と野球部マネージャーの隣で、負のオーラを発するもう一人のマネージャー。そんな構図が数分続いたあと、やや乱暴に裏口のドアが開かれた。

「ユズ先輩！　大丈夫ですか？」

もう一人のマネージャーの登場だった。瑞樹は着替えもせずジャージのまま、大量の鞆と制服を持っている。あかりが驚いたような表情で訊いた。

「私たちの鞆と制服、持ってきてくれたの？」

「はい。ベーランが終わるともう部活終了したんで、すぐ帰れるようにと思って」

靴を脱ぎ、保健室内に入ってくる。ちなみに、『ベーラン』はベースランニングの略だ。

「骨とかには異常ありませんでした？」

「大丈夫みたい。心配してくれてありがとう」

「本当ですか？ よかったあー」

胸に手を当てて、大げさに息を吐く。最初の頃は、この大げなさリアクションはわざとやっているのかと疑ってたけど、最近これが瑞樹の素だとわかってきた。人のことで一喜一憂できるというのは、少し羨ましいではある。

「ありがとね、瑞樹」

「いえいえ。あ、そうそう」

鞆と制服を机に置くと、瑞樹は今日の夕飯を告げるかのような気軽さで言った。

「もうすぐ、野村先生と藤井先輩と嶋先輩が来ますよ。あたしは走って先に来たんですけど」

……え？

思考が一瞬フリーズする。いまからここに来る？ 誰が？ 野村

先生と、藤井と——嶋くんが？

「真弓先生、湿布！ 湿布貼ってください、いますぐ！」

「え、どうして？ もう少し冷やしてからの方がいいと思うけど」

そんな悠長なこと言ってられるか！ 野村先生は、わたしの怪我の具合を確認するために近づいて来るだろう。そのとき、先生のそばに嶋くんがいたら……。

痣のできた顔なんて、嶋くんに見せられない！

「いいから早く！　いますぐ貼ってください湿布をお願いします！
湿布をッ！」

「わ、わかった。わかったから、落ち着いて。ね？」

わたしの剣幕に圧倒されたらしく、真弓先生は腰をあげた。若干、興奮してナイフを振り回す危ない人を見るような目になってたけど、それはこの際どうでもいい。

息を整えながら裏口に目をやる。まだ開く気配はない。よし、いいぞ。先生がわたしの顔に湿布を貼り終えるまでは、そのままでヨロシク。

ぼん、と両肩に手を置かれる。右肩はあかり、左肩は瑞樹だった。

「ユズって、なんだかんだで乙女だよね」

「カレに傷を見られるなんてイヤ！　ですか。かわいいですねー」

二人して盛り上がっている。もう、言い返すのも面倒くさい。お願い、真弓先生。早く湿布持ってきて。なんか変な汗かいてきたから。

そんなわたしの想いが通じたように、先生は早々と戸棚から湿布を取り出し、戻ってきた。

「じゃあ、貼りましょうねー」

「お願いします」

顔から氷の袋を外す。先生は手元のタオルを取って、袋の水滴で濡れたわたしの左頬をぬぐった。

そして、黒縁眼鏡を押し上げながら、小声でこんな質問をぶつけてくる。

「ねえ、川口さん。もしかして、野球部に好きな人でもいるの？」

「えッ？」

「ああ、やっぱりそうなんだ」

「あの、いやべつにそんなことは……。あの……」

軽く深呼吸。声を小さくして、続ける。

「なんでわかったんですか？」

先生はくすつと笑って、

「そりゃあわかるわよ、あなたの態度を見たら。野球部に好きな人がいるから、顔の痣を見せるのが嫌だったのね」

わかるわかる、と笑い混じりに言って、湿布のフィルムを剥がす。

「私もね、こないだの野球観戦で……」

続く言葉を、真弓先生は飲み込んだ。裏口のドアが開いたからだ。

「失礼します」

野村先生が入ってくる。それに続いて、藤井も。そしてその後ろには、嶋くん。二人ともまだユニフォームだ。

「あ、先生。すみません、けっきょく部活に戻れなくて」

あかりと瑞樹が立ち上がって、嶋くんから隠すようにわたしの前に立った。その隙に、真弓先生が湿布を貼る。

「いや、それは構わんよ。ところで川口、大丈夫か？」

「はい。痛みももうほとんどないです」

あかりと瑞樹にありがとうとアイコンタクトして、近づいてくる野村先生にひよいと顔を見せる。もう湿布は貼ってあるから、痣は見えない。

「軽い打撲ですね。一週間もすれば治ります」

「そうですか。それはよかった」

野村先生の表情が緩む。縦にも横にも大きい身体で顎鬚まで生やしている四十半ばの野球部顧問は、一見すると厳ついけれど、よく見ればけっこう優しい瞳をしている。

その野村先生の後ろから、ばたばたと騒がしく足音をたてて、藤井が近寄ってきた。

「川口、まじ、ごめんな！　ほんっつとに悪かった！」

わたしの前に立つなり、手を合わせて深々と頭を下げる。ま、女の子の顔にボールをぶつけたってことを考えれば、最低限の誠意よね。

「大丈夫よ、藤井くん。わたしはもうなんともないから」

「ほんとにかあ？」

顔をあげてそう訊いてくる。演技ではなく本気で責任を感じていそうで、普段ちゃらんぽらんないつつがあまり見せない表情だった。完全にイラつきが消えたわけではないけど、まあ許してやってもいいかな。

「ほんとにほんと。もうぜんぜん痛くないわ」

藤井は、よかったあ、と胸をなでおろしたあとで、鞆から財布を取り出した。

「ちょっと待ってろよ。お詫びやるから」

「え？ いや、お金なんていらないわよ」

「なに言ってるんだ。おれ、そんなに金ねえよ」

財布からぐしゃぐしゃのレシートを出して、机の上の鉛筆を取り、裏になにか書く。そして、

「これ、肩たたき券！」

「……………」

でかでかと『一回五分』と書かれたレシートを渡された。藤井の後ろで、瑞樹と真弓先生が必死に笑いをこらえている。

「ご希望なら、肩もみ券にもなるんだぜ？」

「そ、そうなんだ。ありがとう……」

いちおうポケットの中にしまっておく。家に帰ったら捨てよう。こいつに肩触られるの嫌だし。

「川口。本当に大丈夫なのか？」

「あ、うん」

ずっと藤井の後ろで黙っていた嶋くんが、やっと口を開いた。元気ですよとアピールするために、わたしは大きな笑顔を作る。

「もう痛くないわ」

「そっか。でも、ごめんな。俺がボールを捕れてれば……」
「え？ そんなことないよ」

嶋くんのおかげで軽症ですんだのであって、なにも謝ることなんてない。むしろ、わたしがお礼を言わなくちゃいけないのに。

「だが、まあ、なんともないならよかったよ」

わたしたちの会話は、野村先生がそう言ったことで断ち切られた。

「骨になにかあったら、本当に一大事だったからな。……ただ、歩くのが大変なら、家まで送ってくぞ」

「いえ、そこまでしていただかなくて大丈夫です！」

慌てて首と手を振る。家までは遠いし、なにより、ついでに両親に挨拶を……なんてことになったら笑えない。

先生はふっと口許を緩めて、

「そこまで元気なら大丈夫だな。じゃあ、俺はもう帰るよ。お前らも、長居すると悪いからもう帰れ」

「そうっすね。でもその前に、着替えていいっすか？」

藤井が半笑いでユニフォームの袖をつまむ。

野村先生はちらりと真弓先生に目をやった。

「じゃあ、保健室はもう閉まる時間だから、他の場所で着替えろ」
「いえ。ぜんぜん大丈夫ですよ、着替えてからで。私も特別急いでるわけじゃないですし」

真弓先生は気さくに笑って左右に手を振った。野村先生はまだ少

し遠慮がちだったけど、そうですか、と納得してくれたようだ。

「お前ら、あんまりゆっくり着替えて先生に迷惑かけるんじゃないぞ。……じゃあ、すみません、私はお先に失礼します。真弓先生、どうもありがとうございました」

ぺこりと頭を下げて、野村先生は来たときと同様、裏口から外に出て行った。

戸が閉まるのとほぼ同時に、嶋くんがぼしんと手を打つ。

「じゃあ、俺たちも着替えよう。真弓先生、ベッドを借りてもいいですか？」

カーテンを引いて、更衣室代わりにしようということだろう。

「どうぞどうぞ。じゃあ私はそのあいだ、外に出ておくわ。そうしたら、みんな一斉に着替えられるわよね？」

「はい。どうもすみません」

「いえいえ。じゃあ、終わったら呼んでね」

テーブルの上からケータイを取って、保健室から出て行く。

保健室には野球部が五名残された。嶋くんは鞆と制服を手に立ち上がると、

「俺たちがベッドで着替えるよ。着替え終わったら呼んでくれ」

行くぞ、と藤井の背中を叩く。カーテンを閉める直前、覗かないでくださいねー、と瑞樹が笑顔で釘をさした。

わたしたちも各々制服を取って、着替えを始める。その途中で、あかりがぼつりと言った。

「真弓先生って、ちょっと変わってるよね」

「どこが？ 普通にいい人じゃない」

「ああ、うん。いい人だとは私も思うけど……」

あかりは急に口を閉じ、じっとわたしを見つめてきた。わたしはシャツのボタンを閉めながら見返す。

「なに？」

「……もしかしてユズ、気づいてない？」

訊きながら、あかりはちょんちょんと鼻の頭を叩いた。

「なにそれ、どういう意味？」

「やっぱり……」

あかりは小さくため息をつく、続けてこう言った。

「眼鏡だよ。真弓先生、昼といまとでぜんぜん違う眼鏡になってた」

顔に傷つく水曜日 3

4

真弓先生の眼鏡が昼と夜とで変わっていた。

考えもしなかったことを言われ、わたしは思わず訊き返してしま
った。

「え、そうなの？」

「うん。いまは黒縁の眼鏡だけど、お昼は薄いピンク色の縁なし眼
鏡だったじゃん」

お昼の真弓先生を思いだす。あのときかけていたのは………そ
うだ。あかりの言うとおり、縁なし眼鏡だった。そして、さっきわ
たしの顔に湿布を貼ってくれたときは黒縁の眼鏡。ぜんぜん気づか
なかった。

すでに着替え終わっている瑞樹が、ケータイを片手に話に入っ
てくる。

「偶然ですね。あたし、さっき保健室に来る途中でカウンセラーの
原先生に会ったんですけど、薄いピンク色の縁なし眼鏡かけてまし
たよ」

「うそ？」

訊き返すあかりに、こんなことで嘘つきませんよ、と瑞樹は答え
た。

「でも原先生、お昼に見たときは眼鏡かけてなかったよ」

「え？　じゃあもしかして、真弓先生がお昼にかけてた眼鏡って、

原先生のだったんですか？」

「だと思う。しかもそれ、伊達眼鏡だったし」

わたしは驚いて、リボンを結ぶ手を止めてしまった。

「え、伊達だったの？」

「うん。だって真弓先生、お昼は明らかに見づらそうにしてたじゃん。ヨシノリの指を見るとか、すごい顔近づけてたし」

ああ、言われてみればそうだった。夕子ちゃんの傷を見ると、そこまでしないでいいだろう、ぐらいの距離で観察していたっけ。対して、さっきわたしの顔を見るときは、そんなに近づかなくても見えていた。つまり、昼休みにかけていた眼鏡は伊達で、いまのは本物ということだ。

「原先生、伊達眼鏡だったのね……。でも、なんで真弓先生はわざわざ伊達眼鏡を借りたのかしら？」

真弓先生は先週まで眼鏡なんてかけていなかった。だから、伊達でもいいからとりあえず眼鏡をかけていないと落ち着かない、なんてことはないと思うんだけど。

「それもわかんないよね。そもそも、本物の眼鏡はどうしたんだろう。壊れちゃったのかな？」

「壊れたって、なんで？ あ、瑞樹、エイトフォー借して。……ありがと」

「うっかり割っちゃったとか、壊れる理由はいろいろあると思うよ。で、原先生、お昼に保健室に来たとき、頼まれたもの買ってきたよーって真弓先生に言ってたでしょ？ あれって、眼鏡を買ってきたってことじゃないかな？」

エイトフォーを振りながら、わたしは疑問をぶつける。

「でも眼鏡って、気軽におつかいに頼めるようなものじゃない？ 普通、かける本人が直接買いに行くものでしょ」

「ああ、そっか。視力検査とかもあるもんね」

首をひねるあかりの横で、瑞樹がジャージをたたみながら、

「てか、真弓先生、なんで急に眼鏡にしたんでしょう。伊達眼鏡で見づらそうにしてたってことは、先週までコンタクトだったってことですよ」

「そうよね。コンタクトを買い忘れたのかしら？」

「ますます謎が深まるね……」

あかりが顎に手を当てる。うん、その通りだ。でも、それより。

「あかり。早く着替えないと」

わたしも瑞樹も、もう着替え終わっている。わたしただけならまだしも、嶋くんと藤井に加えて真弓先生まで待たせているのに、悠長にお喋りをしている時間はない。

「あ、ごめん。急ぐね」

あかりは慌てて、ワイシャツのボタンを閉め始めた。まったく、着替え終わってからゆっくり考えればいいのに。

上着にエイトフォーを吹きかけているわたしの背中を、とんとんと瑞樹が叩く。振り返ると、そっと耳打ちされた。

「嶋先輩に、ボールから守ってくれてありがとうございますって言いました？」
「ううん、まだ」

さっき言おうとしたけど、途中で野村先生が喋ったからタイミングを逃してしまったのだ。

「じゃあ、帰りにちゃんと言ってくださいよ」

片目をつぶって、こう続けた。

「二人つきりになるチャンスがあると思いますから」
「え？」

どういうこと？

瑞樹は意味ありげに笑って、わたしから離れていった。訊いても教えませんよ、と言外に語っている。

ちらりとカーテンの引かれたベッドを見る。あの向こうで、嶋くんはいま着替えている。いや、たぶんもう着替え終わって、わたしたちからの合図を待っているはずだ。

二人つきりって、ほんとに、嶋くんと二人つきりになるの？ でも、瑞樹の冗談かもしれないし。いや、だけど、瑞樹ってこんな冗談は言わない子だと思うし。……ああ、もう！

考えれば考えるほど落ち着かなくなってくる。なんとか冷静になろうと椅子に座り、息を吸って吐いてを繰り返す。大丈夫だ。落ち着け、落ち着け。嶋くんのいるベッドを見る。……うん。

結論。ここで落ち着くのは無理。

「ちょっとトイレ行ってくる」

鞆から香水を取り出し、保健室内のトイレに入る。ドアを後ろ手に閉めて、はー、と一息。

瑞樹のやつ、変なこと言ってる。予告されると余計に緊張するじゃない。いや、突然二人つきりにされても緊張するんだけど。

——ってか、普通にいいトイレだな。初めて入った保健室のトイレを見渡して、わたしはそう思った。

芳香剤はいい香りだし、洋式の便座も綺麗に保たれていて、手洗い場もそこそ広い。歯ブラシが立てかけてあるのを見るに、真弓先生は食後にここで歯を磨いているんだろう。

せっかく入ったんだから手ぐらい洗おうかな。そう思って洗面台の前に立ったとき、

「あれ？」

歯ブラシが立てかけてあるコップの隣にあるものを見て、そんな声を出してしまった。

そこには、掌サイズの長方形の箱が二つあった。これには見覚えがある。お母さんも、確か同じものを持っていた。

……どうしてこれがここに？

わたしは「右目用」と書かれたほうを手にとって蓋を開ける。

予想通り、中にはプラスチックケースが収められていた。そのプラスチックケースの中身がなんなのかは見なくてもわかる。コンタクトレンズだ。

保健室のトイレに、コンタクトレンズの箱。しかも側面には、ご丁寧に『真弓幸恵様』と書かれている。これは間違いなく、真弓先生のコンタクトだ。

どういうこと？ コンタクトがあるんなら、どうしてお昼はあんなに見づらそうにしてたの？ なにかの拍子で眼鏡が割れてしまっ

たなら、コンタクトをつければいいのに。

保健室のトイレの中で、わたしはしばらく立ち尽くしていた。

5

着替えを終えたあと、藤井が保健室に戻ってきた真弓先生に日焼けの理由を訊いたのがきっかけで、しばらく雑談をした。内容は主に、先生が姪っ子の一姫ちゃんの野球観戦に行ったときのこと、小学生でも意外と本格的なフォームで投げるとか、汗をかきすぎてペットボトルの水を三本も飲んでしまったとか、そんなことを話した。

時計の針が七時を過ぎたところ、真弓先生にもう一度頭を下げ、わたしたちは保健室を辞した。

「うわ、もう暗くなってる」

外に出るなり、あかりが驚きの声を上げる。言うとおりの、もうすっかり日が暮れていた。保健室はずっとカーテンが閉められていたからわからなかったのだ。

「なんか不思議な感覚よね」

夕方に保健室に入って、出たらもう夜。ちょっとしたタイムスリップをしたような気分になる。

「空気は相変わらず蒸し暑いですけどね」

隣で瑞樹がぼそっと呟いた。

わたしたちマネージャーは、基本的に三人揃って帰る。と言っても、電車通学のわたしたちと違って、瑞樹は徒歩通学だからすぐに

別れるんだけど、いちおう校門までは一緒だ。嶋くんや藤井は、近くにいる適当な人と並んで帰ることが多い。

そんなわけだから、保健室を出てすぐ、女子三人男子二人で固まって、二つのグループの間にはなんとなく距離が空いた。いちおう五人並んではいるけど、妙な溝がある。

……なによ瑞樹。二人つきりになる気配なんてないじゃない。

隣を歩くお団子頭を軽く睨む。それに気づいた瑞樹は、わたしに向かつて意味ありげな笑み。そんなに心配しないでくださいよ、大丈夫ですから。そう言われているような気がした。

「あ、尾花先生」

あかりが前方を指差した。見ると、特別教室棟からぽっちゃり体型の男教師が出てくるところだった。

「お疲れ様です。いま帰りですか？」

嶋くんがそう声をかけると、尾花先生は苦笑して、

「小テストの採点が溜まっててね。って、どうしたの、それ？」

わたしを見た途端、先生の表情が急変した。今度はわたしが苦笑いを浮かべる番だ。

「ちょっと、ボールが当たって。でもぜんぜん、大した怪我じゃないです」

「そっか……。痕が残らないように、今日はちゃんと冷やして寝るんだよ」

うわあ、尾花先生、優しい。嶋くんもこれぐらい気の利いたセリフを言ってくれるといいんだけど。

「はい。少しでも痕が残ると大変なので、ちゃんと冷やします」
「少しでもか……。やっぱり、女の子は顔になにかできると相当気を遣うんだね」

わたしとあかり、瑞樹が揃って首を縦に振る。

「相当遣うよ。ねえ、瑞樹？」

「はい。毎日お手入れしてます」

「目立つところにきびができたなら、絆創膏で隠したりね」

わたしがそう言うと、尾花先生は遠くを見るような視線で、ぽつりと呟いた。

「そんなに必死に隠さなくても、ありのままでいいのに」

「はい？」

「……あ、ごめん、なんでもない！」

はっとしたような表情で、ぶんぶんと手を振る。

「ごめん。じゃあ、また明日。部活で忙しいのはわかるけど、ちゃんと宿題はやっておいてね」

尾花先生はそそくさとそう告げて、中庭のほうへ歩いていった。先生が去ったあと、嶋くんは苦々しい顔で呟いた。

「帰ったら、世界史のプリントやらないと……」

隣で藤井が、おれも、とぼやき、あかりも唇を噛みながら頷く。
宿題は早めに終わらせておくものでしょうが、あんたら。

特別教室棟を過ぎて校門が見えてきたとき、瑞樹が唐突に声を上げた。

「あ！ ユズ先輩、そういえばあたし、校門出てすぐのコンビニに親が迎えに来てるんです。すみません、今日はそれで帰りますね」

明らかに、横を歩く男子二人にも聞こえるように声を大きくしている。まさか……、と思っていると、あかりまでこんなことを言い出した。

「そういえば、瑞樹の家の近くに本屋さんあったよね。私、買った雑誌があるんだよねー」

「そうだったんですか？　じゃあ、そこまで送りますよ。あかり先輩も乗ってください」

「いいの？　やったー。あとさ、藤井君と瑞樹の家、同じ方向じゃなかった？」

「あ、そうでしたね。藤井先輩も乗りますか？」

な、なんだこの不自然なほどスムーズな話運び。こいつら、わたしがトイレに入ってる間に打ち合わせしてる！

「え、まじで？」

藤井、うれしさを隠し切れない笑顔でガッツポーズ。お前、ぜったい期待してただろ！

そして、あかりはどさくさに紛れてこんなことを頼む。

「じゃあ、嶋くん。駅までユズと一緒に行ってくれない？　ユズ、

けっこう怖がりだからさ。一人じゃ不安なんだって」

「え、ちよっと、あかり……」

「ああ、うん。わかった」

顔を伺う間もなく、嶋くんはあっさり了承する。

なにそれ、ほんとに、駅まで嶋くんと二人っきりなの？

校門に差し掛かった。ああ、学校から出ちゃうの、なんて思う間もなく、三秒足らずで校門を抜ける。コンビニは右、駅は左だ。

つまり、ここからわたしと嶋くんは二人っきり……。

「じゃあユズ先輩、そういうことで」

「ちよっと待って」

離れようとする瑞樹の腕を掴み、顔を寄せる。

「どうしたんですか？ いちおう、親を待たせてるのは本当ですから、急がないとまずいんですよ。いまさら怖気づいたなんて言わないでくださいよ」

「違うわよ。あの、瑞樹……」

正直に言えば、いま、不安でいっぱいだった。緊張もしている。

でも、嫌だと思う気持ちは微塵もなかった。それどころか、大きすぎる緊張や不安に隠れてはいるけど、うれしいと思ってるらしい。

そう、やっぱり、なんだかんだで好きな人と一緒に帰れるというのはうれしいことなのだ。わたしはいま、身をもってそれを実感していた。

だから、気を回してくれた後輩には、ちゃんと言っておかないといけない。

「ありがとね。ほんとに」

瑞樹は一瞬きよんとしたけど、すぐに笑って、わたしの肩を叩いた。

「それは、嶋先輩に言ってください。……じゃあ、ユズ先輩、嶋先輩、また明日！」

元気に手を振って、瑞樹たちはコンビニに歩いていった。しばらく三人の背中を見送ったあと、嶋くんは鞆を肩に掛け直した。

「俺たちも行こうか」

「あ、うん」

並んで歩きだす。

うわあ、なんだろう、これ。すっごく緊張する。緊張するんだけど、なんか……楽しい。

隣を歩く嶋くんを横目で盗み見て、わたしはこっそり気合を入れる。

こんなの、滅多にない機会だ。どうせなら思いっきり楽しもう。

6

学校から駅までは、徒歩でだいたい七、八分。普段はこの近さをありがたいと思うけど、今日ばかりは、もっと遠ければいいのと思う。

「へえ。嶋くんのお兄さん、社会人野球してるんだ」

「うん。そこまで強いチームじゃないんだけどね」

嶋くんと歩き出して一分弱。のんびりと続けていたとりとめのな

い話は、いつのまにか家族の話題に移っていた。

「ポジションは？」

「センター。で、打順は一番。俺と違って足速いから」

「え？ 嶋くん、そんなに足遅くないと思うけど」

「ぜんぜん。あっちは比べ物にならないくらい速い」

ちょっと悔しそうに口をとがらせる。かわいい。

駅までの道のりは、公星の生徒がちらほら見受けられた。普段なら、嶋くんと二人で歩いてるのを見られるのが少し恥ずかしいと思うかもしれないけど、今日はなぜかぜんぜんそんな気がしない。逆に、見せつけてやろうとすら思う。

「肩も強くてさ。バックホームの練習に付き合おうと、すごい球がくるんだよ」

「嶋くんだって、外野守るときいい送球するじゃない。それより速いの？」

「うん。向こうのほうがぜんぜん速い。投げ方とかそんなに変わってる様子はないのに、とにかくいい送球なんだよね」

なにが違うんだろうというように、何度か腕を振る。すぐに終わってくれればいいんだけど、なにか考えが浮かんだらしく、鞆からボールを取り出して投げマネを始めた。当然、会話は中断される。

わたしは嶋くんに見えないように足元の小石を蹴った。

あかりと話していると、ああ、この子は本当に野球が好きなんだと思う。だけど、嶋くんの場合は違う。この人は本当に野球のこ

としか頭がないんだなあ、だ。

本気で甲子園を目指している嶋くんにとって、他のことは二次なのだと嫌でもわかる。一緒に帰れるのはうれしいけど、もうちょっと、わたしのことにも興味を持ってよ。

投球フォームに満足したらしく、ボールをしまってから、嶋くんは尋ねてくる。

「そういえば、川口はいる？ きょうだい」

「……あ、うん。いちおう、妹が一人」

「妹かあ。似てる？」

「まあ……、似てるとはよく言われるかな。嶋くんは？」

「俺はあんまり兄貴に似てるって言われないんだよな。弟もいるんだけど、そっちともぜんぜんだし」

「あ、知ってる。勇太郎ゆうたろうくんだよな。元気？」

話題が逸れたことにほっとして、つい勢いで言ってしまった。やば、と思ったときはもう遅い。嶋くんは目を丸くしていた。

「あれ？ 俺、勇太郎の話したことあったっけ？」

「あ、ううん。あの……あかりから聞いたの」

苦しい言い訳にも、特に不審に思った様子はなく、へえ、と軽く頷いた。よかった。

これ以上この話題が続かないように、わたしは話を変えた。

「そういえば、今日は部活、早めに終わったんだね。いつもはもう少しと遅くまでやるのに」

「ああ。野村先生が早く川口の様子を見に行きたいから練習は早めに切り上げたんだ。みんなも川口のこと心配してたよ。だけど、大人数で押しかけるのも迷惑だからって、俺たちだけで行くことにしたんだ」

「なんか、申し訳ないな。気を遣ってもらったみたいで」

「まさか。そんなことないって」

そうかなあ？ とか返しながら、わたしは、嶋くんが来てくれたのはキャプテンとしての責任感からか、個人的な感情からなのか、どっちだろうと考えていた。

隣の美少女がそんなことを考えているとは露とも思っていないだろう嶋くんは、ふと思いだしたように訊いてきた。

「そういえば、川口。なんであんなに湿布を貼ってほしがってたんだ？」

「え？」

考えに没頭していたわたしは、質問の意味がよくわからなかった。

「保健室に入る前さ、中から川口の声が聞こえてきたんだよ。早く湿布貼ってください、って。あれ、どうしたんだ？」

「え！ あ、あれのこと？」

聞こえてたのかよッ！

「うん。なんであんなに焦ってったのかなって」

まさか、あんたが来るからだよと言えるはずもなく、わたしは必死に言いわけをする。

「あの、なんとなく、早く貼ったほうがいいなあ、なんて思っちゃって……」

「でも、打撲ってある程度は冷やしてから湿布を貼ったほうがいいんだよ」

「知ってるけど、なんかさっきは、早く湿布を貼らないと大変なことになるしそうな気がして……」

理由になってないような気がするけど、嶋くんは、そうなんだ、の一言で軽く流した。なんかおかしいとは思わないのだろうか。思わないか、この人は。

ちりんちりん、と後ろからベルが鳴る。自転車だ。わたしと嶋くんは慌てて脇に寄って、自転車の通る道を空けた。けど、この歩道実はけっこう狭い。自転車が通るスペースを空けるために、わたしたちはお互いの身体が触れそうになるぐらい密着して歩かないといけなかった。

どうしよう、今日、いつもと違ってゆっくり汗を拭く時間もなかったから、汗臭くないかな？ それに、顔に湿布も貼ってるし。いちおう香水はつけたけど、こんなことなら、瑞樹のエイトフォーもっと噴きかけておけばよかった。残り少ないからって変な遠慮とかしないで、ぜんぶ使えばよかった。

タイヤが回る音を残して、自転車が通り過ぎる。嶋くんはわたしから離れていって、元の距離感に戻った。

自転車が通り過ぎるのは、換算すれば二、三秒だったはずなのに、緊張のせいで異様に長く感じられた。それなのにいま、嶋くんと離れるときはすぐ名残惜しく感じた。こんなに接近する機会なんて滅多にないのに。どうせなら、わたしが嶋くんの汗の臭いを嗅いでやればよかった。

ちらりと隣の嶋くんを見る。なにごともしなかったかのように、涼しい顔で視線を前に向けていた。恥ずかしそうな様子とか、うれしそうな感じはぜんぜんしない。

……こんなに可愛い女の子と身体が触れそうなら接近したんだから、もっとよろこんだっていいじゃない。

「いまの人、すごかったね」
「えっ？」

前を向いたままの嶋くんが唐突に口を開いた。なんのことかわからないわたしは戸惑う。

「自転車に乗ってた人だよ。見なかった？」

「ごめん、見てなかった。なにか変わったことあったの？」

「あの人がかけてた眼鏡、フレームが虹色だった。すごい派手」

笑い混じりに言う。虹色のフレームの眼鏡……。確かにそれは、あんまり見ない。

「わたしも見ておけばよかった」

「うん。あれはほんとに、見る価値あったよ」

その眼鏡が相当ツボだったらしく、嶋くんは声を出して笑いそうになるのを必死にこらえていた。

無邪気というかなんというか。野球をしてるときは一生懸命声を出してみんなを引っ張ってるのに、いまはそんな面影が微塵もない。そんな嶋くんに、すっかり毒気を抜かれてしまった。さっきまで感じていた不満とかどうでもよくなってくる。嶋くんの笑いが納まったころ、わたしは、じゃあもう一つ眼鏡の話をしてやろう、という気になっていた。

「ねえ、嶋くん。眼鏡って言えば、面白い話があるのよ」

「え、どんな話？」

「うん。あのね、さっき保健室で――」

＊

わたしが一連の真弓先生の眼鏡と視力のことを話し終わると、嶋くんは興味深そうに、へえ、と呟いた。

「原先生は実は伊達眼鏡で、それをわざわざ借りる真弓先生か……。確かに、変な話だな」

「でしょ。しかも、真弓先生がコンタクトをつけないのもおかしいわよね。すぐく見づらそうにしてたのに。なにか理由があるのかな？」

大通りを歩きながら、わたしたちはそれぞれ頭を悩ませる。駅までの道のりはもう半分を過ぎていた。

赤信号で立ち止まったとき、嶋くんが訊いてきた。

「先週まで、真弓先生は眼鏡をかけていなかったよな？」

「ああ、うん。そうね。かけてなかったわ」

「そっか……」

嶋くんは顎に手を当てて、視線を下に向けた。一昨日の昼休み、藤井の頼みで高橋さんのメアドを考えると、こんなポーズを取っていた。きっと、考えるときの癖なんだ。

信号が青になる。並んで歩き出す。

「コンタクトってさ、普通、眼鏡をかけたくない人がやるものだよね？」

横断歩道を渡り終えたあと、そう訊いてきた。

「うん。眼鏡が似合わないとか、スポーツをする人とかに多いと思う。……あ、でも最近になって、コンタクトの上から伊達眼鏡をかける人も増えてるわよ」

「え、なんで？」

「ファッションの一環でかな。最近のファッション誌とかでも伊達眼鏡をかけた人が多くてね。流行りのオシャレ道具みたいになってるから」

「女子って、眼鏡もおしゃれの道具にするのか。すごいな」

いや、いまだき、男子でも伊達眼鏡ぐらいかけると思うんだけど。大通りに入ったせいで、がぜん人通りが多くなってきた。道行く人にお店の勧誘チラシやポケットティッシュを配る人もいるし、居酒屋の勧誘の声も聞こえる。その中を歩く女子大生を見て、わたしはもう一つ伊達眼鏡の使い道を思い出した。

「あと、すっぴんをごまかすために伊達眼鏡をかける人も多いわよ。ほら、あっちを歩いてる人みたいに」

「すっぴん？」

不思議そうな顔を向けてくる嶋くん。わたしは説明する。

「ちょっとギャルっぽい人が多い学校とか大学とかだと、普通にみんなお化粧してるでしょ？ で、朝起きられなくてお化粧する時間がない日は、すっぴんのままだと恥ずかしいから伊達眼鏡をかけてごまかす人が多いの。ウチの学校はお化粧禁止だからぴんと来ないかもしれないけど」

すっぴんをごまかす、と嶋くんは小さく繰り返した。

「それって、大学生とかじゃなくて、普通の女の人もやるかな？」
「え、どうだろう？ 四十代とかになると、どうなるかわかんないけど……。でも、二十代とか三十代前半なら、やる人もいるんじゃないかな」

「そっか……」

そう呟いて、嶋くんはまた、顎に手を当てて視線を下に向けた。転ばないかなと心配になったとき、顔を上げてわたしを見た。

「わかったよ。真弓先生の一連の行動の理由が」

顔に傷つく水曜日 4

7

今日はつまみが二十パーセントオフです！　へいへい、席が空いてるのはいまの内だよー！

居酒屋の勧誘にかき消されないようボリュームを上げて、わたしは嶋くんに尋ねた。

「本当にわかったの？」

「うん」

こくりと首を縦に振る。あまりにもあっさりしていたので、本当なのかな？　と逆に疑わしくなってしまう。

「あの、嶋くん。真弓先生はすっぴんを隠すためにずっと眼鏡をかけていたと言わないわよね？」

「言わないよ。そもそも真弓先生、ずっと化粧してたろ？」

ああ、よかった。女性が化粧してるのかどうかは見てわかるんだ。

「じゃあ、どうしてすっぴんをごまかすのに伊達眼鏡っていうのでわかったの？　なにか関係あるの？」

「あるよ。大アリだ。でもその前に、川口の誤解をとかなきゃ」

誤解？　わたしがなにを誤解してるっていうんだらう。

………は、まさか！　キミは俺が野球にしか興味がないと思ってるみたいだけど、実は違うぜ的なアレか？　本当はキミにも興味しんしんだぜ、ずっと好きだったんだぜみたいなのやつか？

「わかった！ 誤解でもなんでもって」

「あ、うん……。なんでそんなに興奮してるんだ？ えっと、川口が誤解してることは、真弓先生の眼鏡についてだよ」

ですよねー。そんなわけないですよねー。

「さっき川口は、お昼は伊達で、放課後は本物になってたって言っただろ？」

「言ったわ。でもそれ、間違ってる？ 目の悪い真弓先生が見づらそうにしてたから伊達で、見やすそうになってたから本物って考えるのが普通だと思うんだけど」

「そうだよな。でも、今日の場合はちよつと違うんだよ」

嶋くんはここで言葉をいったん区切り、少し強い口調でこう続けた。

「昼休みにかけていたのが本物で、放課後にかけていたのが伊達なんだ」

「えっ？ でも、わたしたちが昼休みに保健室に行ったとき、真弓先生は本当に見えづらそうにしてたのよ。本物の眼鏡なら、視力が上がってよく見えるようになるはずでしょ？」

「なるね。普通の状態で眼鏡をかけるなら」

「普通の状態であって……」

嶋くんは人差し指を右目の下に当てた。

「真弓先生は昼休みも放課後も、ずっとコンタクトをつけていたんだよ。だから、本物の眼鏡をかけていた昼休みは視力が下がって、伊達眼鏡をかけていた放課後は正常な視力になったんだ」

「いや、おかしいでしょ。普通、コンタクトの上から眼鏡はかけないわ」

わたしの反論に、待って、というように掌を見せながら、嶋くんは言う。

「そう考えた方が自然じゃないか？ 昼休みにかけていた眼鏡は原先生の物だったんだ。川口たちは普段から原先生が伊達眼鏡をかけていたと考えたみたいだけど、学校でずっと伊達眼鏡をかけている人ってあんまりいないだろ？」

まあ確かに、わたしも原先生が伊達眼鏡をかける理由がよくわからなかったけど……。

「けど、だからってそれだけが理由じゃないでしょ？ 教えて、嶋くん。どうして真弓先生はコンタクトの上から眼鏡をかけてたって思うの？」

「そうしないといけない理由が……眼鏡をかけないといけない理由が、真弓先生にはあったんだよ。真弓先生、このあいだの日曜に姪っ子の野球の試合を観に行ったらって話してたろ？」

頷く。

「真弓先生は言ってたんだよ。そのときは、汗が凄いだろうって予想してたから、化粧もしないですっぴんで行ったって」

「ああ、うん。それはわたしも聞いたわ」

先生ぐらいの歳になると、すっぴんで外に出るのは勇気のいることのはずなのになあ、と思ったのを覚えている。高校生でも、すっぴんが嫌で伊達眼鏡をかける人がいるのに。……あ。

「伊達眼鏡！　そのとき先生は、伊達眼鏡をかけてたってこと？」
「たぶんね」

楽しそうに笑う嶋くん。そのまま、話しを続ける。

「すっぴんのまま行くのは少し気が引けたから、真弓先生はコンタクトレンズの上に伊達眼鏡をかけて試合観戦に行った。そのまま姪っ子のチームを応援して、そして……日焼けした」

日焼け。そう、野球の試合は長いから、一試合観戦しただけでけっこう焼ける。実際、真弓先生ははっきり日焼けしていた。

……そうか、そういうことね。

わたしは隣を歩く嶋くんを見て、言った。

「つまり真弓先生は、眼鏡焼けをしてしまったってことね？」

嶋くんは笑顔で頷いた。

＊

眼鏡をかけているときに日焼けすると、眼鏡を外していてもくつきりとフレームの形が浮き上がってしまう——いわゆる『眼鏡焼け』と呼ばれる焼け方をすることがある。

真弓先生は、その眼鏡焼けをしてしまった。だから、意地でも眼鏡を外さなかったのだ。

「たぶん、学校に来るときはコンタクトの上から伊達眼鏡をかけていたんだけど、昼休みまでの間で、なにかの拍子で壊れるかしてしまったんだと思う。だから、昼休みに原先生に伊達眼鏡を買いに行

ってもらったんだ。その間、自分は原先生から眼鏡を借りてね」

嶋くんの推理を聞きながら、昼休みのことを思い出す。

駅ビルの袋を提げて保健室に入って来た原先生は、本当に大変だった、暑いだけならまだしも……、みたいなことを言っていたはずだ。あれは、真弓先生に眼鏡を貸して、裸眼で買い物に出なければならなかったのが「本当に大変」だったと言いたかったのだ。

「自分の眼鏡を他人に買いに行かせることはできないけど、伊達眼鏡なら大丈夫ってことね」

「うん、そういうこと。それから、川口たちが保健室に行ったとき、先に尾花先生が来てたって言ったよな？ 尾花先生は、真弓先生が眼鏡を借りた直後ぐらいに来たんだと思う。だから真弓先生は、コンタクトを外す時間がなかったんだよ」

これで推理はすべて終わり、と言うように、嶋くんは鞆から野球ボールを取り出してぽんぽんと軽く上に投げた。わたしはそれを横目で見ながら、ぼんやりと考えごとをしていた。

駅が遠めに見えてきたとき、嶋くんは掌のボールを見下ろしながら呟いた。

「でも、真弓先生って恥ずかしがりなんだな」

無意識に湿布に当てていた手を離して、尋ねる。

「眼鏡焼けを見せるのを嫌がったからってこと？」

「そう。……まあ、俺が勝手に推測しただけで、本当に眼鏡焼けをしたのかわからないけど、もししてたら話。俺だったら、伊達眼鏡が壊れたら諦めてその日は眼鏡無しで過ごすのになって。なのになぜわざわざ原先生から眼鏡を借りて、しかも伊達眼鏡を買いに行っ

てもらってるんだろ？ 相当、眼鏡焼けを生徒に見せるのが嫌だったんだって」

ああ、まあね。そう思うわよね。

「なんとなくだけど、そういうことにはけろっと思ってる人だと思ってたんだ。でも意外と、恥ずかしがり屋だったんだな」

別世界の人間を語るような面持ちの嶋くんを見ながら、わたしは心の中で呟いた。

——嶋くん、それは違うよ、と。

嶋くんの推理はたぶん当たっているけど、そこだけは違う。真弓先生が眼鏡焼けを見せたくなかったのは、生徒たちじゃない。尾花先生に見せるのが嫌だったんだよ。

あの二人がなにがきっかけで、いつからそうなったのかはわからない。でも確実に、恋人同士だというのはわかる。

昼休みの時点でそんな気はしてたけど、さっき尾花先生に会ったときにそれは確信に変わった。

わたしたちが着替え終わったあと、真弓先生はもう保健室を閉める時間のはずなのに、藤井の質問に答えて、悠長に雑談なんかしていた。たぶん、事前に尾花先生と連絡を取り合っていて、彼がテストの採点で帰りが遅くなることを知っていたから、時間潰しにわたしたちの雑談に付き合ってくれたのだ。昼休みに二人でいたのも、今日のお昼は一緒に過ごそうと決めていたからだろう。

そう考えると、尾花先生の言動も理解できる。

にきびができたら絆創膏で隠すと話したわたしに、尾花先生は言った。そんなに必死に隠さず、ありのままでもいいのに、と。どこか遠くを見るようにして、そう呟いた。

あれは、真弓先生を思いだして言ったことだったんだ。尾花先生は、真弓先生が眼鏡焼けを隠すために眼鏡をかけていることに気づいていたのだ。

けど、そんな想いとは裏腹に、真弓先生は必死に眼鏡焼けを隠した。わたしには、伊達眼鏡が壊れたときの真弓先生の様子がはつきりと想像できる。

そんな、お昼に彼と会う予定があるのに、こんな眼鏡焼け全開の顔で向き合うなんてできないわ、と慌てふためき、必死に頭を働かせ、仲のいい原先生になんとか頼み込む。どうか眼鏡を貸してください、と。

思わず笑ってしまう。

これって明らかに、さっきのわたしと一緒だ。もうすぐ嶋くんが保健室に來ると聞かされて、早く湿布を貼ってくださいと真弓先生に詰め寄ったわたしと。

違うのは、わたしたちの場合は完全に一方通行ということだけ。だからこそ、嶋くんはわたしが早く湿布を貼って欲しかった理由に気づかないのだ。

「やっぱり、女の人からしたら眼鏡焼けって恥ずかしいのかな？」

駅内へと続く小さな階段を上がりながら、嶋くんは首を傾げた。

「恥ずかしいよ。すっごい恥ずかしい」

わたしは少し声を小さくして、続けた。

「……わたしだって、いま湿布はがして嶋くんに痣を見せなさいって言われたら、やだもん」

「ああ。眼鏡焼けと痣じゃ、レベルが違うもんな」

そんなことを言いたいわけじゃないんだけど……。

階段を上り終えて、切符売り場を過ぎ、改札を抜ける。わたしは上りの電車、嶋くんは下りの電車だ。

「じゃあ、また明日」

嶋くんは自分の乗る電車のプラットホームへ歩き出そうとする。

わたしは大きめの声を出して、それを止めた。

「ちょっと待って、嶋くん！」

「ん？」

「あの……ありがとね。嶋くんのおかげで、怪我、軽くてすんだから。本当に助かった。どうもありがとう」

いつ言おうかとタイミングを計っていたけど、けっきょく別れる直前にやっと言えた。

嶋くんは困ったように頬をかきながら、

「いや、でも、捕れなかったから……。ごめん」

違う違う。そんなことを言ってほしいんじゃない。まったくこの人は、どこまで女の子の気持ちかわからないんだろう。ここまですると笑えてくる。

笑えてきた記念に、わたしは言ってやった。

「じゃあ、嶋くん。……次はちゃんと守ってよ？」

「えっ？」

目の前にいる朴念仁は驚いたように目を見開いたけど、すぐに大

きく頷いた。

「……うん、わかった。次はぜったい捕る」

真面目な顔でそう言われて、思わず笑顔がこぼれてしまう。

うれしいな。相手がわたしじゃなくてもそう言うだろうってわかってるけど、やっぱりうれしい。

「ありがとう。……じゃあ、また明日ね」

「うん。気をつけて」

手を振って別れたあと、わたしは少し歩いて後ろを振り返った。嶋くんはバッグを揺らしながら人ごみの中を歩き、やがて、プラットホームへ続く階段を下りていった。当然、わたしのほうを振り返ることは一度もなく。

いいよいいよ。振り返らないことぐらい知ってたよ。

いまはまだ、それでいい。これから振り向いてくれればいい。……いや。ぜったい、振り向かせてやる。高校を卒業して、自由にアタックできるようになったら、わたしから目が離せなくなるぐらい虜にしてやるんだから。

「見てなさいよ、野球馬鹿ヤロー」

小さくそう呟いて、わたしはまた歩きだした。

8

少し苦くもあり、でも思い返すと楽しかったなと思える帰り道が終わって、家に帰るとそこには現実が待っていた。

「どうしたの、それっ？」

「大丈夫なのか？」

わたしの顔の湿布を見るなり、お父さんとお母さんは半狂乱になった。わたしはとりあえず事情を説明して、洗面所に向かった。その途中、お風呂からあがった妹の柚希ゆずきとすれ違うときも、

「げ、柚香なにその顔？」

とドン引きされた。

洗面台の鏡と向き合っていると、わたしはそろそろと湿布をはがした。そこに映るものを見て、思わずうわあと声が出てしまう。

左頬にできた、大きな痣。当分は、これを隠すために湿布を貼り続けられないといけない。わたしのチャームポイントの泣きぼくろも隠れてしまう。きっと、眼鏡焼けに気づいたときの真弓先生もこんな気持ちだったんだろう。明日、学校休もうかなという気すらしてくる。

それにしても……。

わたしはもう一度、鏡を見つめてため息をつく。

自分の顔を見て傷つくなんて、中学のときものもらいになって以来だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558v/>

リバース・シンデレラ

2011年11月15日11時29分発行